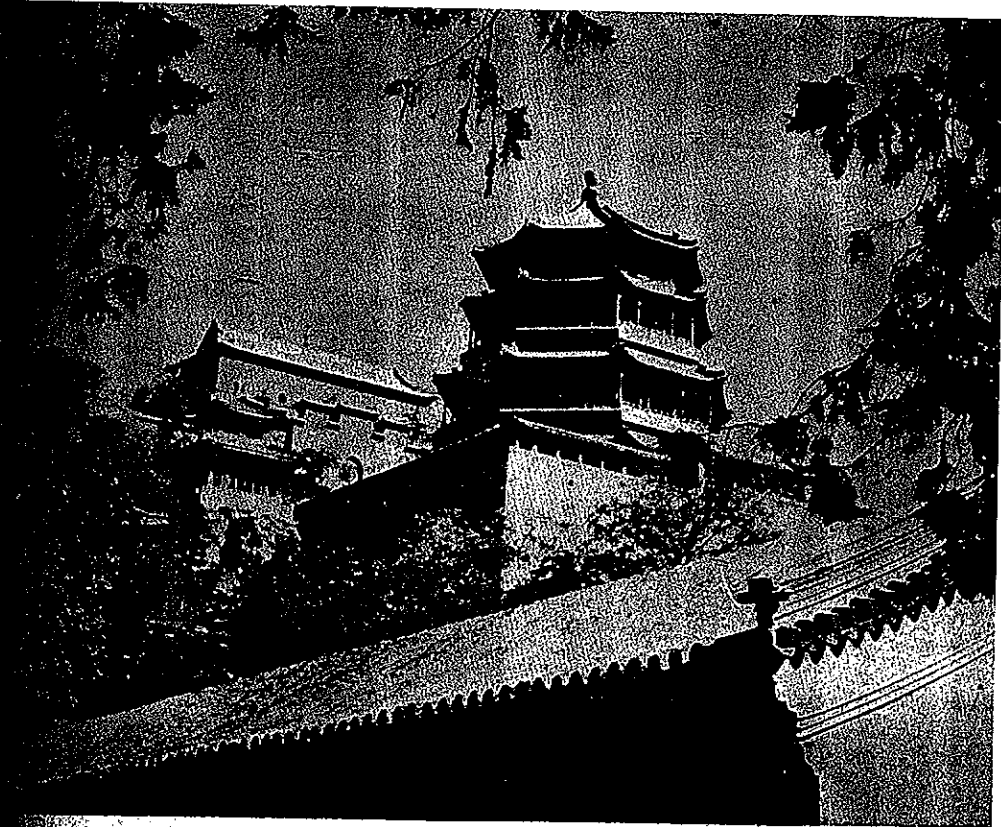


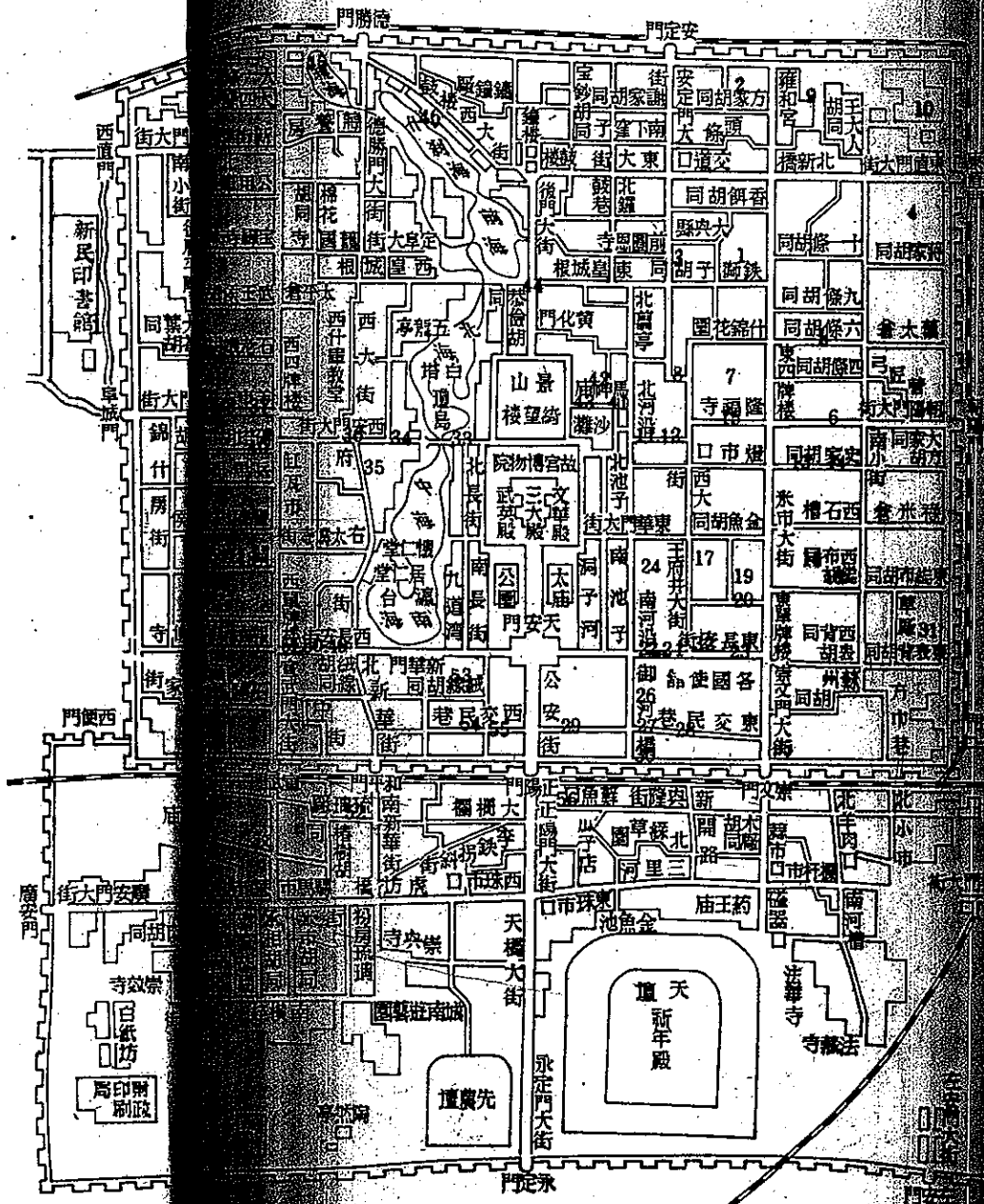
J
292.211
A47



閣香佛 山壽萬

北京名勝舊蹟案內圖

- 1 興亞院華北連絡部
- 2 孔子廟及國子監
- 3 文天祥祠
- 4 北京大學農學院
- 5 西本願寺
- 6 偕行社
- 7 東亞新報社
- 8 大佛寺
- 9 栢林寺
- 10 俄國教會
- 11 東方文化事業總委員會
- 12 近代科學圖書館
- 13 知恩院別院
- 14 東本願寺別院
- 15 隆福寺
- 16 內政部
- 17 東安市場
- 18 華北政務委員會
- 19 協和醫院
- 20 同仁醫院及日本居留民團
- 21 華北交通株式會社
- 22 北京飯店
- 23 電報總局
- 24 翠明莊
- 25 德國飯店
- 26 日本大使館
- 28 橫濱正金銀行
- 29 日本領事館警察署
- 30 朝鮮銀行
- 31 六國飯店
- 32 北京神社
- 33 日本國際觀光局
- 34 團城
- 35 國立北京圖書館
- 36 北京特別市公署
- 37 治安總署
- 38 廣濟寺
- 39 歷代帝王廟
- 40 白塔寺
- 41 萬松老人塔
- 42 北京大學本部及學院
- 43 東亞文化協議會
- 44 北京大學理學院
- 45 積水潭
- 46 醇親王府
- 47 教育總署
- 48 實業總署
- 49 新民主會
- 50 中央廣播電台
- 51 雙塔寺
- 52 國立北京師範學院
- 53 建設總署
- 54 最高法院
- 55 中國聯合準備銀行
- 56 北京驛
- 57 清真寺
- 58 法源寺



序

北京は悠久千年の古都であると共に、今次事變以後は急激に近代都市としての變貌を呈して來た。北京はもはや單なる觀光都市ではない。決然として立ち上つた興亞の最主要基地である。

在留日本人の數は既に十萬と報ぜられる。觸手ある都會はつひに古く堅固な城壁を打開して西郊新市街の計畫を實行せしめるまでに發展した。

かかる永住者乃至半永住者以外にも、官用調査留學商用視察慰問等の目的を以て此地に來往する邦人の數は實に夥しいものがある。

これらの人人は折角此地を踏んでも適當な案内書が無い爲めに世界的な遺跡に接しても空しく看過してしまふやうなことが一再に止らず、宿泊觀光買物等に就いても不案内の爲めの不便は尠くない。一方永住者にとつては全然その指導を缺き從來出版された二三市販の案内書も單なる觀光案内に墮して、北京といふ土地に住みつく「市民としての生活」の案内は全く之を缺く實狀である。

本誌編纂者

北京都市公理觀光科委員

滿化交通會社營業局長

華北交通會社

東方文化事業總委員會總務委員

東亞新報社

東亞新報社

北京大學醫學院教授 醫學博士

西湖堂主

故宮博物院編輯員

華北交通會社

石橋丑雄

石原徹

岩村成正

橋川時雄

服部由治

早瀬讓

富田三郎

加治伊三郎

曹宗儒

中島荒登

宇澄郎

安藤更生

佐藤登

本書は特に是等の需要に應じ、その缺を補ふ意味から編纂せられたもので、親しく此地にあるものには懇切なる指導書であり、遠隔の地にあつて北京のことを知らんとする者に對しては、居乍らにして目のあたりこの地を見るの思ひあらしめる立體的地誌たらんことを企圖した。

我々の試みは這種案内記としては始めての企である。果してどの邊まで所期の實が擧つたかは知らぬが、兎も角この方向への先驅として本書を世に贈る。此書を踏み臺として更に完備せる案内書が現るるに到らば、それこそ我等の望むところである。最後に本書編纂に當つて執筆に資料蒐集に格別の便宜を賜つた興亞院華北連絡部、北京市公署觀光科、華北交通株式會社、東亞新報社、日本國際觀光局各當局の好意は編者等の感謝に堪えないところである。

昭和十六年十月

編者識

責任編輯 安藤更生
編輯校正 小川明正
同 千葉亨

北京案内記目次

表紙繪

序

別刷挿繪

天利 達

寫眞版十五頁

第一 觀光篇

北京の地理……………一
位置・地勢・氣候―市内地理―人口―交通―鐵道―航空
 市内交通―電氣―バス―觀光バス

清時代の西四牌樓と燈市……………八
 名勝舊蹟……………九
 北京の沿革……………九
 城郭……………一五
 面積……………一八
 大使館區域……………一八
帝國大使館―招魂社―日本兵營

内城の部……………二二
 皇城……………二二

紫金城……………二三
 午門……………二六
 三大殿……………二六
 武英殿……………二九
 文華殿……………三一
 故宮博物院……………三二
中路―内東路―外東路―内西路―外西路

景山……………四三
 大高殿……………四六
 西苑……………四七
 南海……………四七
 中海……………四九

北海	五一
國城	五六
太廟	五七
中央公園	六〇
鼓樓及鐘樓	六三
國子監及孔子廟	六四
雍和宮	六七
文天祥祠	七一
隆福寺	七二
護國寺	七三
翺象臺及欽天監	七四
白塔妙應寺	七四
歷代帝王廟	七五
萬松老人塔	七五
都城隍廟	七六
慶壽寺(雙塔寺)	七六
什刹海	七六
象房址	七五
廣濟寺	七六

智化寺	七九
柏林寺	八一
舊王府	八一
俄國教會(アルバジン村)	八二
北京神社(貢院舊址)	八三
光明殿址	八五
祿米倉址	八六
外城の部	
天壇	八七
<small>園丘—皇穹宇—祈年殿—皇極殿其他</small>	
先農壇(城南公園)	九六
法源寺	九六
謝疊山祠	九七
江南城隍廟	九七
陶然亭	九七
蟠桃宮	九八
萬柳堂址	九八
藥王廟	九八
清眞寺	九八

廣安門	九九
崇勛寺	九九
法藏寺の古塔(法塔寺)	一〇〇
金魚池	一〇〇
東郊の部	
東嶽廟	一〇一
九天宮及び十八地獄	一〇三
日壇及び金臺夕照	一〇三
二 閣	一〇三
日本陸軍墓地	一〇三
加松(肅王故)	一〇三
通州及び其の附近	一〇四
<small>通州城—燃燈佛舍利寶塔—文廟—鼓樓—殉難邦人の墓</small>	
<small>—八里橋—通惠河—双橋</small>	

西郊の部	
西山の概況	一〇七
萬壽山	一〇七

仁壽殿—耶律楚材の墓—昆明湖—玉瀾堂—樂壽堂—長廊—排雲殿—佛香閣—石舫其他

玉泉山	一一三
圓明園址	一二九
明帝景陵	一三〇
臥佛寺	一三〇
碧雲寺	一三一
香山及び闕武樓並に碑	一三一
西山八大處	一三一
黑龍潭、溫泉並に大覺寺	一三三
妙峰山	一三三
農事試験場	一三三
五塔寺(正覺寺の金剛寶座)	一三七
萬壽寺	一三八
大鐘寺(覺生寺)	一三九
大佛寺(大懸寺)	一三九
月壇	一三九
傳道師の墓	一三九
八里莊の塔(永安寺萬壽塔)と摩訶菴	一四〇
白雲觀	一四〇

天寧寺	一四一
五顯財神廟	一四一
蘆溝橋	一四一
一文字山	一四四
遼金の土城	一四五
豐台	一四六
南郊の部	
南苑	一四六
燕墩	一四七
北郊の部	
地壇(市民公園)	一四七
黃寺及び黑寺	一四八
元の土城址	一四八
藪門煙樹	一四九

第二 案内篇

北京年中行事	一七五
支那芝居案内	一九六

遠郊の部	
明の十三陵	一五〇
湯山温泉	一五五
居庸三關	一五四
南口—居庸關—上關	
八達嶺の長城	一五六
觀光日程及び費用	一五七
一日で見物する場合—二日で見物する場合—三日で見物する場合—長城見物	
北京遊覽地一覽表	一五九
旅館	一六〇
日本旅館—ホテル—支那旅館	
土産物	一六四
買物の町	一七二

民衆娛樂	二二六
北京の學藝界	二三三

琉璃廠	二三五
骨董屋の話	二三九
古本屋	二四六
北京の支那風呂	二四九
北京の飯館子	二六三

第三 生活篇

支那料理の作法	三三三
支那服の話	三三四
洋車の話	三三八
日常買物の手引	三四三

附録 各種便覽

主なる中國側諸機關	三七一
主なる日本側諸機關	三七二
銀行・會社	三七四
日本側學校	三七五
中國側大學及專門學校	三七五

街頭の呼び賣り	二七一
小吃・點心・果子	二八〇
東安市場と西單商場	二九二
天橋	二九八
八大胡同(前門の姑娘の話)	三〇六
アマとボーイの使ひ方	三四七
中國人との交際	三五一
北京に於ける保健常識	三五七

博物館・圖書館	三七六
學術團體	三七六
新聞・通信社	三七六
雜誌社	三七七
出版社	三七七

中國側宗教機關	三七八
日本側宗教機關	三七八
社會事業團體	三七八
衛生施設	三七九
中國側商工業團體	三八〇
日本側商工業團體	三八〇
百貨店・市場及び菜市	三八一
北京の娛樂施設	三八一
英語・ハイキング・釣魚・スケート・騎馬・擲球	
日本料理店	三八三
小料理屋	三八四
カフェー	三八四
喫茶店と食堂	三八四
北支渡航案内	三八六
各種證明書類式……北京へのコース……税關に就て…… 通貨の交換……北京よりの旅行	
中國郵便料金表	三八八
航空郵便料金表	三八八
北支發日本滿州宛小包料金表	三八八

北支に於ける郵便爲替	三八九
國內爲替料金……國際爲替料金……塘北對日本各地小爲替…… 塘北對日本間普通爲替……舊日電價爲替……華商電信爲替	
中國郵便貯金	三八九
日本郵便貯金	三九〇
日本簡易保險	三九〇
電報料金表	三九〇
北京に關する研究書	三九一
北京の常識	
北京市内外寫字樓禁止區域	(額光裕譯)
香妃のこゝと	一三〇
公寓	一六三
女醫	二二五
彩票の語	二二〇
中國の祝祭日	(案內篇譯)
北京の文藝グループ	二四三
理髮館	二六二
北京の水	二九一
北京の時問	二〇五
北京の城門	三三三
焼羊肉	三三三
郵便用紙	(生活篇譯)
北京市内洋車價目表	三三七
北京市内洋車價目表	三四二
值段の符號	三四六
お金の數へ方	三五〇

北京の地理

位置・地勢・氣候

北京は北緯四十度、東經百十六度半に位し、中原大平野の北端を占める。緯度からいへば、日本の秋田市、アメリカのファイラデルフィア、スペインのマドリッドに略々相當する。

東南百五十軒にして渤海灣に到り、西は大行山脈を背負ひ、北は長城に限られて滿洲國に接し、永定・白の二河その間を貫流して、北京を挟み、東南渤海に注ぐ。

北に山を負ひ、東に大河岸を洗ひ、南遙に中原を控御し、西に大道あり、所謂四神相應の土地として、支那帝王の理想的都城である。

北京の地理

地層は沖積層に屬し、春季烈風一と度到れば所謂黃塵萬丈の觀を呈して咫尺を辨せず、窓ガラスの隙間から、洋服の襟元から、下着の襪衣の縫ひ目へまで微塵が舞ひ込んで來る。この黄土の堆積が雨に逢へば道路は忽ち泥濘の海と

化し、市中に於ても行人の膝を没する處が多い。冬季は殆ど降雨を見ず、一月は僅かに一五耗であるのに比して、七月は二〇〇耗を越えることがある。

三月の終り頃にストーヴを撤すると、急に春が襲つて來て百花一時に妍を競ひ、柳絮舞ひ飛ぶが、五月ともなれば既に夏で、日本のやうな照春初夏の風光を樂しむことは出來ない。夏は七月が最も暑く、平均氣温は二六・七度であるが、最高三九・二度に及んだこともあり、この季節にあつては戶外よりも室内が涼しく、窓を開け放つと却つて暑いので、閉め切つて涼しい空氣を外へ逃さぬやうにする。冬は零下一〇度以下に降ることも屢々である。ただ秋は大氣清澄にして空飽くまでも高く、樹木黃葉して暑からず寒からず、行樂に宜しく、この時期の北京の景観こそは眞に「世界一の秋」の名に負かない。

市内地理

城郭は凸字形をなして、内城と外城に分れ鐵道は内外城の境の中央にある北京站到發する。市域は内城六區、外城五區に分れ、この中に含まれる街巷は内城約一八〇〇外城約一四〇〇である。又俗に内城は舊紫禁城を中心にして

東城、西城に分つ。内城は家屋節比し、東城の西南角附近は東交民巷で北清事變の結果公使館區域たり、列強公使館、兵營、外國銀行商社を列べ、並木美しく、特殊な異國風景を展開してゐる。その北を東西に走る長安街は舊皇城の前面を通る大道で東西城をつなぐ主要交通路である。

東單牌樓より東四牌樓を経て北新橋に至る大街は東城の中心街で殊に東單附近は日本人商店多く、横町には日本花柳界、カフェ等も軒を列ねてゐる。これと並行する王府井大街は北京銀座の稱あり、美しい並木道で、百貨店、勸工場、貴金屬商、洋服商、雜貨店など高級な商店が多い。東四から東へ行けば朝陽門あり、通州街道の門口に當り、重要な交通路である。

西城では東單とシンメトリーをなす西單牌樓を北へ西四牌樓を経て新街口に至る大街がメインストリートで、西單附近は殊に熱鬧する。新街口より西すれば西直門であるが、この門は城門中最も交通量多く、蒙疆方面との主要關門である。

皇城の北側には景山があり、北京での最高地をなしてゐる。これから北側一帯の地は住宅多く、地安門から鼓樓附

近へかけてのほか、目立つた商店街はない。

外城は、内城寄りの地は肆應節比し、中央の前門大街附近は北京第一の繁華を示すが、南寄りの方は住家少く、城内に畑や、肥料の製造場などあり、又外城面積の約四分の一は天壇並に先農壇に占められてゐる。

人 口

由來、支那の戸口調査は極めて不正確で、北京の人口の如きも從來は百五十萬といひ、百萬といひ據るところを知らないが、民國十七年の首都南遷當時は約二十六萬戸、百十萬人であつたと云はれる。その後一時減少したが、滿洲事變後、東三省より移住せしもの多く、今次事變以來は、附近の治安狀況の關係もあつて北京に僑住するもの多く、また日本人の進出著しく、民國三十年(昭和十六年)三月の調査によると總人口は百七十六萬六千八百八十四人である。うち日本人は八萬九千八百八十三人となつて居り、内地人六萬一千三百三十四人、半島人一萬九千四百七人、台灣人四百四十二人である。事變前の日本人は約三千人と云はれ、東交民巷や東單あたりに踞つて、所謂北京の日本村を形成してゐた時代に比較すると驚く可き飛躍振りである。

今日では北京の内外城は云はずもがな、城外に到るまで日本人の姿や表札を見ぬ處とてない。

第三國人はアメリカの四六〇を筆頭に、獨逸人二一七、ロシア人三二二、イギリス一四、イタリイ七四、オランダベルギー、スエーデン、スキス、スペインその他を含めて計一五五〇人である。

同じく中國人と云つても、漢人もあり、蒙古人あり滿洲族あり、西域系の回教人種あり、これらが上掲の外國人と織り混ちつて街頭を歩くさまは、こゝも一つの人種展覽會場である。

交 通

北京は首都たるの位置を失つても依然として中國第一流の都市であり殊に事變以後は華北の中心都市として、政治に經濟にその位置は舊に倍する重要性を帯びて發展しつゝあるから、その交通上に於ける位置も益々重きを加へてゐる。鐵道は從來からすべてこゝを起點として發着し、海運は天津を外港として遠く日本滿洲とも連絡し殊に近來航空網の發達は近代都市としての觸手をいやが上にも複雑にしてゐる。その他大道や運河を利用する古來の交通機關も活

用せられ、近距離の各都市との間には長途汽車(旅行用バス)も走つてゐる。

鐵道によれば、こゝより東京へは急行列車にて六九時間五五分にて達し、奉天へは一五時間、新京へは二二時間四〇分、釜山へは三九時間半にて達する。南方上海へは三七時間、國都南京へは三二時間、濟南一時間、青島二三時間を要する、更に蒙疆方面は、張家口へ七時間一〇分、大同へ一二時間一五分、包頭へは二三時間三〇分にて達する。京漢線方面は石門へ九時間、開封へは二六時間を要する。

飛行機による時は、東京九時間四〇分、上海五時間五十分、南京四時間三十五分、奉天三時間十分、漢口は六時間五十分、包頭は四時間にて達する。

鐵 道

鐵道はこゝを起點とするものに京山線、京包線、京漢線、京古線あり、その他津浦線、石太線、膠濟線の各終點驛へもこゝから直通列車が出てゐる。これらの運輸を經營するものは即ち華北交通株式會社である。

京山線 日本、滿洲への主要路線である。北京站より山

理地の京北

行先	所要時間	料	金	程	經由	摘要
東京	二日	二二五圓	大青	經由	大青	
大阪	八時間二〇分	一八〇圓	福	經由	福	
福岡	五時間二〇分	一五〇圓	青	經由	青	
京城	四時間一五分	一三五圓	大	經由	大	
台北	九時間五〇分	二六〇圓	一七七〇程	經由	大連	毎日

北京を中心とする航空線は總て中華航空株式會社の手によつて運営せられ、北京・大連間、北京・上海間、北京・青島間、北京・太原間、北京・開封間等の各線あり、各地間の運賃、所要時間、距離は次の如くである。

航線	所要時間	料	金	程	經由	摘要
北京線	南	一三程	五五程	經由	南	
京保線	長辛店	一八程	七五程	經由	長辛店	
京河線	河南村	六〇程	二四七〇程	經由	河南村	
京周線	周口店	五六程	二四五〇程	經由	周口店	
京長線	長溝鎮	二四七〇程	二四七〇程	經由	長溝鎮	

海關に至る四三二程餘、通州、西沽、北戴河の各支線四六、四七程より成る。山海關に於いて滿洲國奉山線に連り天津で津浦線に接し、豐臺で京漢線及び京包線と連絡するほか、前記支線と新河材料廠、漢沽鹽場、武山石廠の三支線がある。

京包線 包頭に達する鐵道で、豐臺を起點とするが、北京より直通列車出で、本支線合せて八七四程、沿線に南口、宣化、張家口、大同、厚和等の主要地點がある。蒙疆開發に對する使命は重い。

京漢線 北京、漢口を結ぶ一三二四程の幹線と、約九八程の支線より成る。現在は路線を變更して開封に達し、甯海線と連絡してゐる。本鐵道沿線は河北省に於ける棉花の主要産地であると共に磁縣、臨城等の炭區を控え、又井陘炭や山西に於ける諸資源の搬路としても極めて重要な役割を果してゐる。

京古線 通州—古北口（華滿國境）間二二六程の線路。通州—北京間をも加つて京古線といふ。滿洲國側の承古線と合し、錦州—北京を裏側から結ぶ新ルートである。

聯合自動車（長途汽車）

北京と近傍の小都市を結ぶ交通網は現在華北交通會社北京自動車營業所の傘下に統制ある經營を行つてゐる。毎朝八時乃至九時、前門棋盤街の同事務所前を同方面に向ふ數台の大型バスが車輪を列ねて出發する。途中各コーズの終點で漸次車を止め、夕方又速い所の順に折返し運轉し來つた車を合して朝と同様の車輛群を編成し北京へ歸つて來るのである。

左にその路線、距離、行先、料金を掲げる。

路線	行先	距離	料	金
京津線	河西務	六九程	三圓〇五錢	
	通州	二五程	八五錢	
京古線	天津	一三四程	六圓二五錢	
	高麗營	三七程	一圓五〇錢	
京滬線	保定	五〇程	二圓一〇錢	
	三河	六四程	二圓八〇錢	
	鄭州	八〇程	三圓六〇錢	
	鄭州	九四程	四圓三〇錢	

開封	天津	太原	石門	上海	包頭	張家口	濟南	廣東	漢口	南京	奉天	青島	大連
三時間四五分	〇時間三五分	二時間〇〇分	一時間一〇分	五時間五五分	四時間一〇分	一時間一〇分	一時間三五分	一時間四五分	六時間四五分	四時間三五分	三時間四五分	二時間〇〇分	二時間一五分
一三二圓	二〇圓	九〇圓	五〇圓	二三五圓	一一五圓	三〇圓	七〇圓	五三五圓	三三五圓	一八五圓	八六圓	一三〇圓	八五圓
六六〇程	一三〇程	四五〇程	二七〇程	一三五〇程	六三五程	一七〇程	四一〇程	一五四〇程	一五四〇程	九八〇程	六七五程	五〇〇程	五〇〇程
石門	石門	石門	石門	石門	石門	石門	石門	石門	石門	石門	石門	石門	石門
毎日	毎日	毎日	毎日	毎日	毎日	毎日	毎日	毎日	毎日	毎日	毎日	毎日	毎日

市内交通

市内交通には、公共機關としては市内電車と、公共汽車（バス）があるが、一般交通機關としては洋車（人力車）が壓倒的である。（洋車の話参照）近頃は洋車と自轉車の合の子の三輪車が大部分見受けられる。賃銀は洋車よりはいくらか高めのやうだが早いので喜ばれてゐる。自動車

は自家用のほかは、大概ガレーチから呼ぶので、一時間四圓五十銭位だが、新車は殆どなく、千九百二十年代の代物がガタガタと走り廻つてゐる。駐車場は停車場前のほかは無く、日本のつもりでみると大分あてが違ふ。馬車もあるが、一頭立ての箱馬車で外見は一才いゝが速度は洋車よりも遅い。一時滿洲式の馬車もあつたが、近頃は見かけなくなつた。

このほか、廟會の日などには場所によると騾馬が街角で客を待つてゐる時もある。これに跨つて鈴の音を聞き乍らボクボクと城外へ出てゆくのも怕しいものである。

電 車

北京の市内電車は民國十三年十二月十七日、北京電車股份有限公司の手によつて營業を開始したが、一般中國人の觀念としては、電車は下層階級の乗物であつて、むしろ洋車以下に看る風があり、之に乗るを潔しとせざる者さへあるが、事變以後、日本人の激増に伴ひ、日本人は相當位置の人々まで近代交通機關として盛に之を利用する實状を目撃して、電車が市内主要交通機關たるの事實を認識し漸次之を利用せんとするものが増加しつつある。

運轉系統は七路に別れ、次表の通り

- 第一路 天橋—珠市口—前門—司法部街北口—西單牌樓—新街口—西直門
- 第二路 天橋—前門—天安門—東單牌樓—北新橋
- 第三路 太平倉—西單牌樓—天安門—東單牌樓—北新橋
- 第四路 太平倉—地安門—北新橋
- 第五路 宣武門—西單牌樓—天安門—東單牌樓—崇文門
- 第六路 崇文門—珠市口—和平門
- 第七路 天橋—永定門

乗車賃は全線十銭、軍人、學生には割引がある。車輛は約百輛を全線に配備し、始發午前六時、終發午前零時四十分五分である。

バ ス

支那語にて公共汽車といふ。市營である。市公共汽車管理局の所管にかゝる。民國二十四年創業、事變勃發後一時中止したが、二十七年二月電氣、水道の復活と同時に復活した。車輛は現在六十七輛であるが、毎日運行してゐるのは四十五輛である。(民國卅年四月一日現在)經營路線は次の通り、

- 1 北新橋—東單牌樓—前門—統綽胡同—西四—北池子—北新橋—(環狀路線)
- 2 交道口—東安市場—前門(交道口線)
- 3 東路門—香山
- 4 觀光自動車
- 5 西單牌樓—萬壽路(西郊線)
西單牌樓—永定路(西郊線)

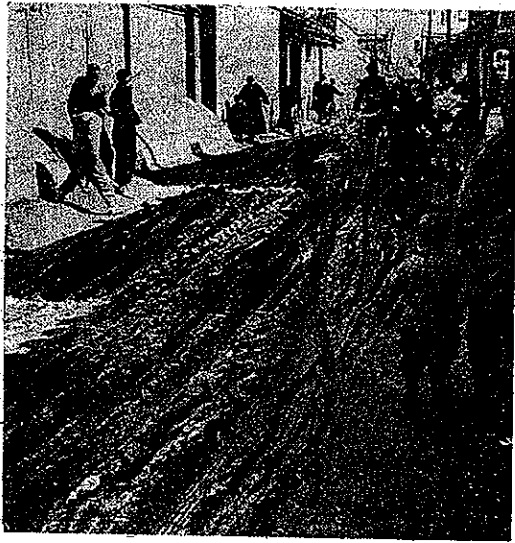
料金は市内一區十銭、一區を増す毎に十銭、市外は西單—西環大街、十五銭

觀 光 バ ス

同じく公共汽車管理局の直營である。二十人乗りのスマートなバスで市内外の重要遊覽地を巡遊し、妙齡のバスガールが齒切れのよい日本語で名所舊蹟の案内をして呉れる。晝食は萬壽山内食堂にて攝る。(一人一圓五十錢程度)

- 一、觀光場所 北 海 紫禁城 萬壽山 天 壇
- 一、料 金 一入六圓(入場券ヲ含ム、制服軍人及十二歳以下四歳までの小兒は半額、但し、軍人は別に軍人規定の入門料を要す)
- 一、所要時間 約七時間
- 一、出發地點 北京站前
- 一、出發時間 午前九時半(四月—十月)十時(十一月—三月)

雨 後 の 胡 同



雨後の北京の道の泥濘は全く言語に絶してゐる。雨が降ると支那人は役所へも出て来ない。訪問の約束を破つても「あの日は雨が降つたから」と云へば、それが立派な理由になる。この泥濘が天氣になると急に黄塵に變つて滾々と天地を被ふのである。

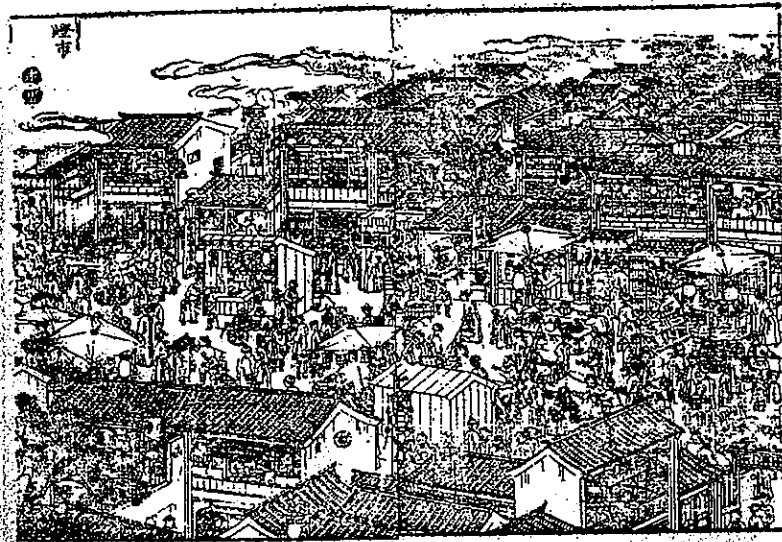
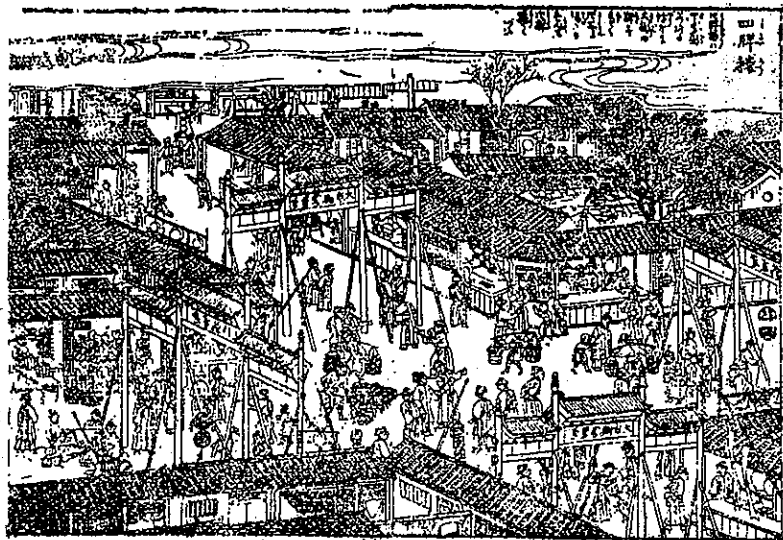
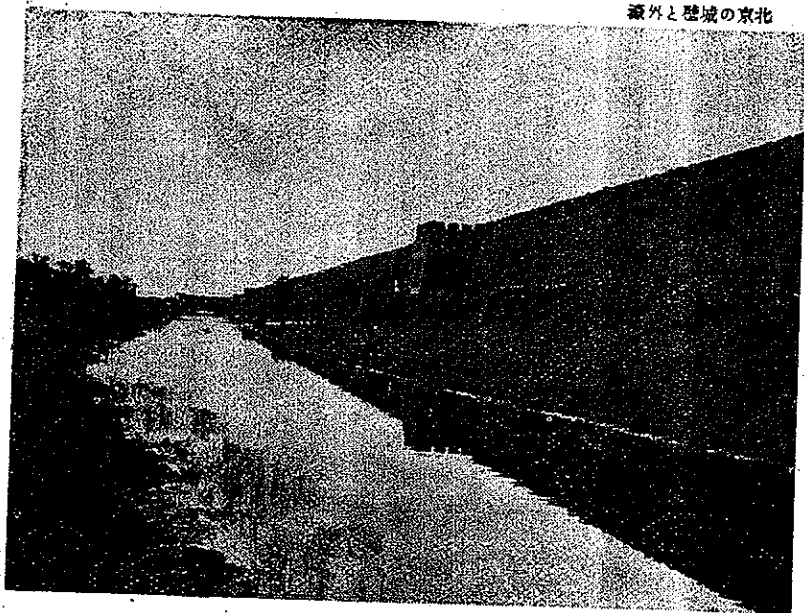
名勝舊蹟

北京の沿革

現在の北京附近には古くから薊と呼ばれる城市があつて、燕・幽州・上谷等の治所が置かれて居たが、此の北京の前身と見るべき薊城の發生は、恐らく周初に燕國が始めて置かれた當時であらうと思はれる。そして春秋から戰國時代に亘つて燕國の漸く強大となるに従ひ、其の國都たりし薊も非常な盛大を來して、趙の邯鄲や齊の曲阜と共に北支屈指の都市として、其の繁榮を誇つたものゝ様である。然るに其の後秦漢から三國時代にかけては僅かに一地方の治所たるに過ぎぬ様になつたが、五胡十六國時代には慕容氏が一時此所に都したこともあつて、慕容儼が銅馬を鑄て城門に立てたと云ふ銅馬門の地名は、元時代までまだ残つて居たものゝ様であるが、之は當時既に此所に相當な築城が施されて居たことを物語る一資料であらう。

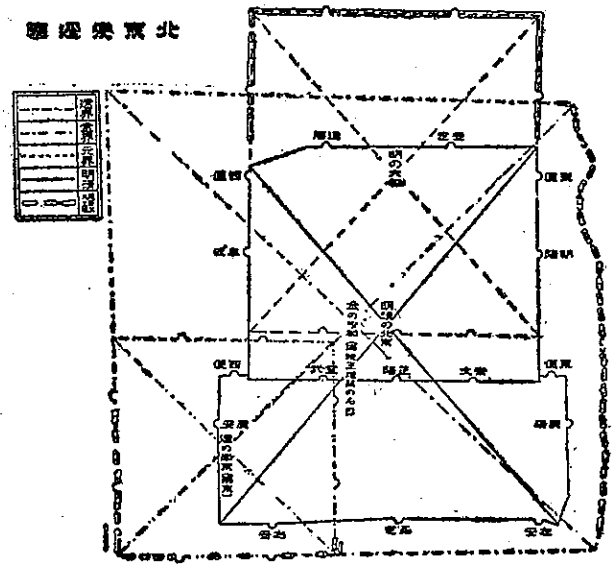
降て隋の煬帝が大業三年（皇紀一二六七年）に幽州を

北京の城壁と城外



清製四百年の牌樓（上）と市場（下）— 唐名勝圖會より —

北東樂遠圖



涿郡に併合した時も、從來幽州の治所が世々嗣に存した關係から、涿郡の郡治は依然として此所に設けられたのであったが、大業七年から同十年に亘つて行はれた高麗遠征に際しては、此所を以て行軍の一大基地とした爲め、天下の人材多く此所に集り、國內の物資亦夥しく此所に積まれて、漸く天下の要衝を以て目せらるゝに至り、急に政治的重要性を加へて來たのであるが、隋に代つて天下を領した唐（皇紀二二七八年—一五六七年）も此所を特に重視して、幽州大都督府に防禦大使を新設し、後には幽州節度使をして河北採訪處置使を兼ねしめて、其の管轄は安東都護府にも及び、更に天下に十節度使を置いた時には、范陽節度使をして此所に治せしめたるのみならず、太宗の貞觀二十一年（皇紀一三〇七年）に高麗を征伐するに方りては、一大兵站基地としたること隋と同様であつた。

大體に於て後の遼金の都城と一致するものゝ様に考へるものである。

其の後契丹の遼（皇紀一五六七年—一七八五年）が北方に雄視する様になると五代の初め契丹の太宗は後晋の高祖石敬瑭を援けて帝位を得せしめた代償として、燕雲十六州の割讓を受けて此の地を領し、翌會同元年（皇紀一五九七年）には國號を遼と改めて此所を南京となし、幽都府廣龍軍を置いて此所に奠都し又燕京とも稱したが、これが北方民族の燕地に根帯を固ふした濫觴であり、又實に北京奠都の始めでもあつた。遼史の地理志に據ると當時の城は方三十六里高さ三丈、厚さ一丈五尺の堅固なもので敵機戰櫓を具へ、八門を有したと云ふが、後聖宗の開泰元年（皇紀一六七二年）に析津府と改められ、更に後には金の都城として製用せられたものである。

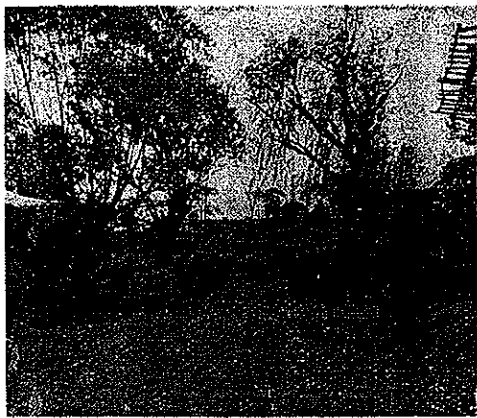
其の後に金（皇紀一七七五年—一八九四年）が北方に起ると遼を滅ぼして此の地を取り、一時宋の版圖となつて燕山府と改稱したこともあつたが、廢帝亮（海陵王）の貞元元年（皇紀一八一三年）には此所に奠都して中都とし大興府と稱し、當時其の手に依つて増築せられたこの都城の外郭は、

周圍實に七十五支里を算したと謂ふ。此の遼・金兩朝は時代により北方民族に特有な五京制を採つて居たもので、即ち遼には上京（臨潢）・南京（幽都）・東京（遼陽）・中京（大定）・西京（雲州）の諸京城があり、金には東京（遼陽）・北京（大定）・西京（大同）・中都（大興）・南京（汴京）の諸京城があつたが金の中都大興府の舊城は即ち遼の南京の後を襲つたもので、其の位置は大體に於て今の外城廣安門附近を中心としたものゝ様であり、今同門の西南約三杆に在る鳳凰嘴を西南角とした、方約五杆の四邊形を畫けば當時の城郭は略ぼ復原し得られるのみならず、現在この鳳凰嘴附近及び永定門西の審崗子から東莊村に亘つて殘存する當時の古土城址に依つて、其の西南と東南との隅角や其の築造の方法及び大さ等の大體を知ることが得るのである。又金の廢帝亮の大増築は事實如何なる程度のものであつたかは判然しないが、今北京の東方を南北に斷續して連亘する土城址の東北角と鳳凰嘴の西南角とを連結して四邊形を作ると、大體に於て七十五支里の長さとなるのである。尙ほ注意すべきは遼の南京の皇城の位置でそれは中央に設けられずして、西南隅に近く長方形に造營せられて居たことである。

名勝舊蹟

金の章宗の晩年(泰和六年(皇紀一八六六年)に蒙古の鐵木眞自立して成

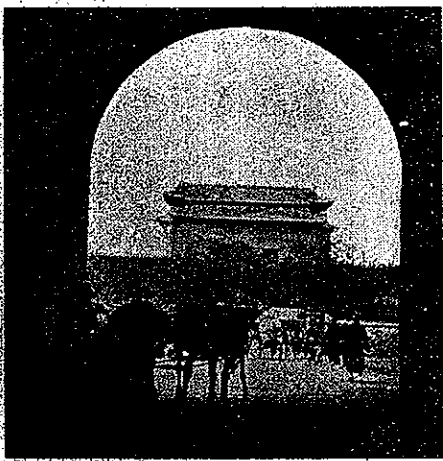
右安門外の風景



吉思汗を稱するや、勢急に強大となつて其の九年七月には大舉して燕京を圍み、翌年(金の昇王貞祐二年(皇紀一八七五年)五月には遂に之を取つてしまつたが、これよ

り光き金は前年五月に汴京(開封)に遷都して繼かに其の銳鋒を避けた。斯くて蒙古は世祖忽必烈汗の至元元年(皇紀一九二四年)に此所に奠都して中都としたが、これがかのマルコポーロ旅行記に「カムバリック」即ち汗の都として傳へられたもので更に同四年には舊城の東北に大都城を新築して之を大都と稱して九年に其所に遷都した。國號を元

としたのは其の前年であつたが當時の城壁は周圍六十支里城門十一を有し、中央部の南際に近く皇居と禁苑とを配したものであつたが、其の設計は亞刺比亞人の手になつたものゝ様で、また實に今日の北京内城の大部分を成すものであるが、當時其の城郭の南至は今の東西長安街の南縁と合致し、其の北至は今の安定・德勝兩門外約二軒に連亘する土城址の線に在つて、今の鼓樓鐘樓邊が大體に於て其の中心地點に當つて居た關係から、清初迄はあの邊に中心台の地名があつた。斯うして元が曾て遼金の都した立派な都城を捨て、特に態々新城を築いたことに關して之は其の舊都城と帝王に對する殺氣の



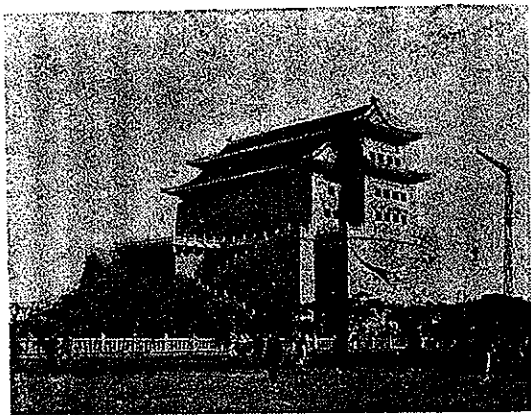
德勝門

あるのを覆れた様に書いたものもあるけれど、私はあの水に敏感な沙漠民族の蒙古人が、積水潭から北海中南海に亘る池の水に注目した事を特記し度いと思ふ。即ちあの天然の大水池の畔に遼金の帝王達は后妃の離宮を盛んに造營したのに對して、蒙古人は此の水を非常時の籠城に際して利用することを考へたのは偉とすべきであらう。此の元の大都是明初に北の約三分の一を削減せられたのであつたが、其の部分は今尚ほ安定門外から德勝門外にかけて歴然たる土城址を存し、此の北方民族の手に曾て造り営まれた大文化の名残を留めて居る。

蹟 舊 勝 名
降つて明(皇紀二〇二八年—二三〇四年)になつて太祖の洪武元年(皇紀二〇二八年)に、大將軍徐達が元帝を逐ふて大都を陥れると、此の大都城の北半部約五支里を削り元の宮殿を悉く破壊してしまつた。之は蒙古人の築城が餘りにも大に失して其の經營に伴ふ困難を慮つたものかとも見られるが、寧ろ漢民族出身の明朝としては朔北に慍うした大城を置くことを覆れた事にも因るものゝ様で、現在北京内城の北際はこの徐達の手によつて削られた當時の劃界線である。其の後此の地は北平府と改稱せられて太祖の子燕

王棟の治所となつたが、燕王が靖難の師を起して南京に惠帝を破り即位するや、永樂元年(皇紀二〇六三年)にはその舊封の地を北京とし、同五年此所に奠都を決し勅して都城の造營に着手し、十八年其の造營成ると共に之を順天府と稱して帝都とし、翌年正月南京より遷都したのであつた。

爾來、明は此所に都すること二百二十餘年、帝王相繼ぐこと十五世に及んだが、崇禎十七年(皇紀二三〇四年)流賊李自成は明帝を滅して此の都城に占據したので、當時山海關附近に明軍と對峙中であつた清朝の攝政王は、明將の請に依り李自成を伐つて之を破り、遂に北京に皇帝を奉じて滿洲より遷都したのであつたが、爾後清朝は此所に都すること十朝二百七十年、其の間に康熙・雍正・乾隆の盛時を招來し、此の都を中心として東洋文化の黄金時代を出現したけれども、其の後英國を主とする歐洲資本主義の露瀾を受け、之に加ふるに打ち續く内亂に漸く國力衰頹し、首都たる此の地も之を反映して盛時の舊觀を失ひつゝあつたが、殊にかの光緒二十六年(明治三十三年)皇紀二五六〇年)に勃發した北清事變を大轉期として、急激なる凋落を



正門門橋



正門

官民相呼應して東亞新秩序の建設に精進を續けて、華北の天地に於ける大推進力たらんとしつゝあり、殊に大規模を誇る新都市計畫も着々其の實施に向つて雄々しき進展を見せ新首都南京と南北相對して、今や東洋の一大新文化は方に此所より發生せんとしつゝある。

城郭

現在北京特別市の所轄區域は城内と近郊とから成つて居

來し遂に宣統三年（明治四十四年）の大革命に清朝の覆滅を見たのであつた。
 中華民國の成立後も引續いて其の首都たること十餘年に及んだけれども、民國十七年夏國民革命軍の北伐完成と共に此の地を北平と改め、續いて首都の南遷が行はれて、明初以來存続した中央政府を始め其の附屬機關の大部を南京に移したが、更に民國二十二年の春皇軍の熱河聖戰が始まるや、蔣介石は此の機に乗じて數年來南方要人等の垂涎措かざりし舊清朝所有の珍寶を擧げて南に劫運し、更に民國二十四年の秋には北平圖書館を始め諸大學及び諸調査研究機關等の貴重なる資料までも劫送を行つたのであつた。次で發生を見た冀察政權の治下に於て、最初の間は兎も角も表面平和な状態を保つて居たが、蔣介石一派の手に依つた連年の排日教育と抗日毎日の積極的工作とは逐次其の馬脚を現はして、皇國に對する敵對態度は日を逐ふて表面化し、遂に昭和十二年七月七日夜蘆溝橋畔に於ける一發の銃聲に、皇軍に對する挑戰の幕は切つて落され茲に日支事變は點火せられたのであつた。
 斯くて我が事件不擴大的方針にも係らず、事毎に誠意を

缺く敵軍の行動は在再現地對陣兩旬に及ぼしめたが、七月二十五日の鄭坊事件に引續き同二十六日夕の廣安門事件の勃發は、遂に七月二十七日在留邦人の大使館區域籠城を招來せしめ、翌二十八日には城外蟠居の支那軍に對する皇軍の剿討が行はれて、鎧袖一觸滅滅的打撃を蒙り、冀察政權首腦部は夜陰に乗じて城を出で、城内に跋扈した匪兵も之に次いで雲散霧消してその姿を失し、連年市民に蛇蝎視せられつゝあつた暴戾なる支那軍は、皇軍の手によつて一瞬にして附近より其の影を消して、茲に明朝北京の出現を見たのであつたが、引き續いて地方維持會の組織によつて治安は忽ちに恢復し、十月十三日北平の名を廢して北京の舊稱に復せられ、更に十二月十四日中華民國臨時政府の成立と共に其の首府となり、北京特別市が設けられたが、翌年二月一日には冀東政權も之に合流して北支の統一は茲に完成せられ、爾來引續き皇軍援助の下に諸般の施設は着々と完備して、統一國家の面目漸く具はるに至つた。昭和十五年三月三十日國民政府の南京遷都と共に之に合して、此地には華北政務委員會が設置せられて内政・治安・財政・實業・教育・建設の六總署が之に屬し、中華民國新民會と

るが、城内は更に内城と外城とに劃分せられて、何れも堅固な磚を以て内外兩面を卷いた城壁によつて圍繞せられて居る。

内城は大體に於て元の大都の舊を襲用したものであることは既述の通りである。即ち明太祖の洪武元年（皇紀二〇二八年）に、其の北半約五支里を縮めたが、後五十年を経て世祖の永樂十七年（皇紀二〇七九年）十一月に、南

面約二支里を擴げて築城し、翌年竣成したものが現在のもので從來の土城を改裝して外面を磚で固めたのも亦この時と謂はれるが、内面を磚で固めたのはそれから約三十年を経た、英宗の正統十年（皇紀二一〇五年）六月からであつた。此の城壁の大きさは場所によつて多少の不同もあるが、之を南側に於て見れば概ね高さ約一〇米、其の厚さは基底に於て約二〇米、上面約一七米内外を算し、周圍約

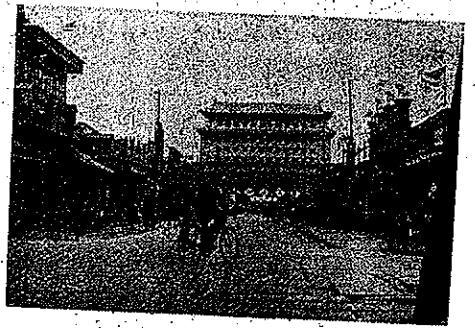
名勝遺蹟

られた爲め、現在其の舊狀を維持して居るものは西直門と東南角樓とのみである。此の内城は大體に於て前朝後市の制に則つて造營せられたものゝ様で、即ち其の前半中央に紫禁城を有し、更に之を繞らすに皇城の一郭を以てし、其の周圍にはもと諸官廳及び貴紳官吏の府第相連つて、黃瓦綠甍の大夏諸所に點綴し王氣自ら湧き出づるの觀があつたが、民國以來皇城の圍壁を殆んど取り拂つたのを始めとし、電車の開通や諸王府の取り毀しと共に官衙住宅の西洋化等が盛んに行はれたので、北京の特徴であつた純然たる支那都市的な景観は遂次變化を來して舊い街の氣分は年一年と削がれつゝある。

外城は即ち羅城で、明の嘉靖三十二年(皇紀二二二三年)起工、同四十三年の竣工である。當時は連年北に蒙古の遺孽たる韃靼や瓦剌の人寇があり、南に倭寇の侵犯漸く激しく、天下物情騒然として京師の治安亦漸く憂ふべきものがあつたので、朝臣の奏を容れて舊來都城の四周に残存した遠・金・元の舊土城址を利用して、之を複郭として萬一に備へ且城外の住民を保護せんとしたのであつたが、南面の築城に意外の日子と經費とを要した爲め、遂に最初の計畫を

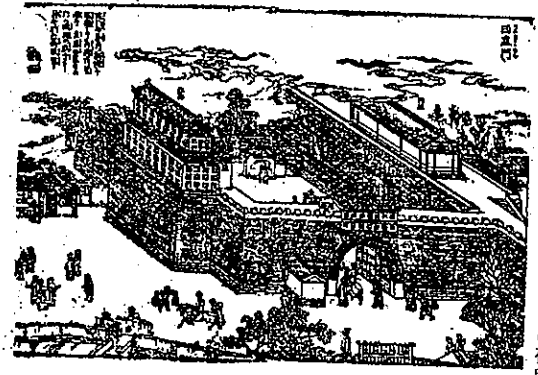
四〇支里と稱せられるが、大體に於て東面約五千四、西面約四千七、南面約七、北面約六千八で、周圍約二四、四と云ふ東西に稍長い方形を爲し、之にもと九つの城門が穿たれて居た。即ち南面の三門は中央を正陽(前門)、東を崇文(哈達)、西を宣武(順治)と稱し、東面の二門は南を朝陽(齊化)、北を東直と謂ひ、西面の二門は南を阜成(平則)、北を西直と呼び、北面の二門は東を安定、西を德勝と稱する。

この外に南面には正陽門の東に、北清事變當時に聯合軍の手で開かれた水門と、西に民國十五年に支那側の手で造られた和平門とがあり、東西兩面には朝陽阜成兩門の南に、民國二十九年新たに開かれた啓明門・長安門の二門があつて此の兩門を通ずる長安大街は將來西郊に新設せられる筈の新市街と、東郊に新設せられる工場地帯とを



西直門の現狀

連結する大幹線である。此等の新開の門は別として舊來の九城門には何れも城壁上に設けられた門樓と、その前面に設けられた箭樓(敵樓)とを具へ、此の兩者を半月狀の城壁を以て連結して所謂月城を爲すのを例としたが、東直・西直の兩門だけは方形に造られて居た、其の外に城壁の四隅には角樓の設けがあつて、城門と遙かに相望んで偉觀を添へて居たが、此等も北清事變以來國庫窮乏の爲め、特に新造されたものは別として、修繕不行届の關係から倒壞したり、或は交通の關係から取除かれたり、甚しきに至つては官吏の俸給に充用する爲めに門樓を毀ちて其の用材を賣る等の暴舉も演ぜ



西直門の舊狀

變更して此の一面だけに止めたものであると云ふ、此の周圍は二十八支里と稱せられるが、其の南面は約七千八、東西の兩面約三千五の長方形で、城壁の大きさは高さ約六米、厚さは其の基底に於て約六米、壁上に於て約四米五である周圍に七門を有し、南面の三門は中央を永定、東を左安(將撥)、西を右安(南西)、東面を廣渠(沙窩)、西面を廣安(廣寧・彰儀)と稱し、北面には内城に近く東に東便、西に西便の兩門がある。此の外城中央の北部は所謂前門外と稱せられる一帯で、從來北京の商業地區の中樞を爲して居た地方であつたが、民國二十年頃から其の繁榮を漸次内城の東西兩單牌樓邊から王府井大街、西長安街等の繁華街に奪はれた觀がある。又永定門内の東西には天壇及び先農壇の兩大祭壇が設けられ市廛を離れて靜肅の一郭を成し、和平門外の琉璃廠や前門外に隣接する八埠(八大胡同)の花街、廣安門内の回教徒街等を始め、天橋の露天市場から下層市民の行樂地區、崇文門外に軒を並べる各種の小工業商舖等特色のある街衢を包容して居る。

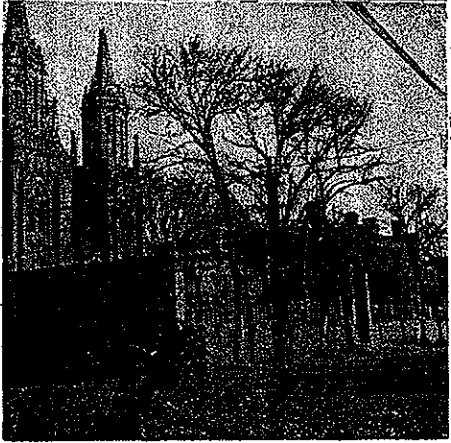
註。支那舊來の文獻は此等の城壁の大きさを丈尺を以て示したのが多し。即ち大洲會典に據ると内城は南面二、二九五丈九尺三寸。北面二、二



東交民巷



正金銀行と六國飯店



交民巷の教會

が殘されて、凄慘なりし龍城當時の苦戰の一端を物語つて居る。

もと東華門外皇恩橋の北に昔のまゝに殘つて居る舊玉河の水が、北御河橋の北で中南海から出る水と合して水門に直流する小流が存して、御河・御溝又は玉河と稱し、全地域を東西に兩分する形となつて居たが、民國十五年の春之を暗渠に改装して今の様に上に散歩地帯を造つた。

現在此の一郭には日・獨・伊・佛・白・蘭・西・英・

米等各國の大使館や公使館があり、又日・伊・佛・米の諸國は大使館護衛隊を駐屯せしめて居る。其の他外國領事館・銀行・商社等が相並んで、宛然西洋都市の觀があり、地域内に支那人の居住を禁止し、行政權も使館界管理委員會の手に掌握せられつゝあるのみならず、周圍には銃眼を穿つた圍壁を繞らして外部に墮壕を掘り、其の外郭は防備地帯として幅二〇〇米の空地を設けて一の要塞と化して居る。

三二丈四尺五寸、東面一、七八丈九尺三寸。西面一、五六丈四尺五寸。高さ三丈五尺五寸。壕高五尺八寸。址厚六丈二尺。環關五丈とし。外城は南面二、四五丈四尺七寸。東面一、〇八五丈二尺。西面、一〇九丈二尺。高さ二丈。壕高四尺。址厚二丈。環關一丈四尺とし。九類であるが、茲に注意すべきは外城東西兩面の長さに就て、之を東千八百五十丈云々。西千九百三十丈云々としたものが往々存すること、光緒順天府志や北京誌の如きも之を誤つて居るが、此の誤記は其の後の著述にも影響して多くの人を誤らせて居る觀があり、心すべきことである。因にこの「尺」は即ち清の營造尺で、九九部尺、魯班尺等とも稱せられ、〇米三二に該ることになつて居る。

内城の中心線は正陽門・天安門・神武門・地安門の中央を通じるものと思ふ人が多いが、正陽門の中央を基點として測れば内城南壁は東より西の方が約三〇〇米長くなつて居る。

面積

北京特別市の面積は大體次の様である。

内城約一一・九(約三七・一五)平方支厘 平方斤約一、一二三万七八七五坪
 外城約 八一・五(約二七・〇六)約 八一八万五六五〇坪
 計約一九三・四(約六四・二一)約一、九四二万三三二五坪
 四郊約一、九七三・〇(約六五五・〇〇四)

合計約二、一六六・四(約七一九・二五)

此の中で紫禁城の面積は約〇・七五平方斤(約二二萬六八七五坪)であるから内城面積の約二・一九%(約五十分の一)に當り又天壇の面積約二、七一平方斤(約八二萬坪)は外城の面積の約十分の一を占めることになる。

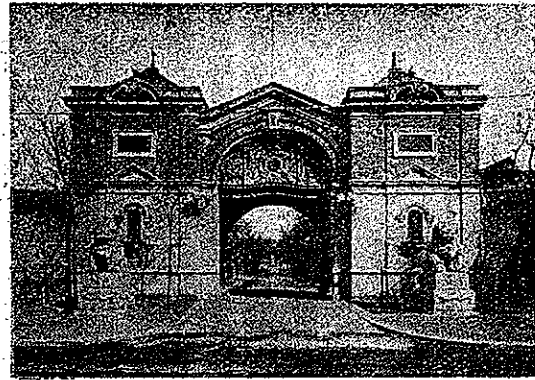
此の中に内城約千八百、外城約千四百の街巷がある。

大使館區域(使館界・東交民巷)

東は崇文門より西は正陽門に至る長さ約一料五の城壁を其の南際として、北は東長安街に至る幅約〇料七五の一郭は、北清事變の最終議定書によつて各國の公使館區域と取り定められた地域であるが、東交民巷と云ふ一街が丁度此の間を東西に貫いて其の主要街路となつて居る所から、この名は此の一郭の別名の様になつて居る。かの光緒二十六年(明治三十三年)の北清事變に際して、六月十二日から八月十四日に至る前後六十四日の籠城に際して日・獨・伊・露・英・米等の各國兵は、其の義勇隊と共に、英國公使館を中心として此所に籠城したのであつた。今英國大使館東北角に近い壁面に當時の彈痕を其の儘に保存した部分

帝國大使館

北京に日本の公使館が開設せられたのは明治六年で、當時は東四牌樓六條胡同(現西本願寺別院)に在つたが、外國公使館の多くが東交民巷に設けられて居た關係上、明治二十五年に今の總領事館警察署東隣に移轉し、其の後明治四十二年末に現在の場所に移つたのであつたが、此所はもと



日本大使館正門

肅親王府の舊址である。明治三十三年の北清事變に際して此所に籠城した日本軍は、海軍陸戰隊二五名、義勇隊三一名と外に西公使及陸軍將校四名で、伊太利兵二七名の援助を得て此の方面の防禦を擔當したのであつたが此の附近は二個月餘

の籠城期間を通じて激

戰第一と稱せられ、此の間に日本軍の死傷三〇名(戦死九名・負傷二一名)と伊太利軍の死傷一八名(戦死七名・負傷一一名)とを出したが、而も其の間に於て支那人の基督教信者約三〇〇〇名を收容保護したのであつた。大使館本館前に立てられた北京籠城戦死者之碑



支那民社明治通

はもと正門内に在つたのを、昭和十三年現位置に移したものであるが、表面には當時北京の人柱となつて戦死した英靈の氏名を刻み裏面に籠城の経過を記してある。また本館裏の庭園には當時戦死した兒玉外交官補の碑や、當時の彈痕を留めて居る老木があり、樂山の溪流には當時の跡を保存したもので、陸軍武官室の舊址は、當時の

鐵條網を塗り込んだ部分があると謂ふ。

大正十三年の第二奉直戰に際し、十一月五日馮玉祥のクーデターに會ふて赤城の壓迫を危み、紫禁城を出られた宣統皇帝は一時難を其の生家たる醇親王府に避けられたが、同二十日皇后と共に日本公使を頼つて公使官邸に入られたので、其の後一官舎を模倣替して之を迎へ、翌年二月二十三日の赴津までを其所に過されたのであつた。

招魂社

大使館の西の一郭は陸軍武官室で、此所は舊肅親王府の庭園の一部であつた。招魂社はこの陸軍武官室の境内に設けられた小祠で、もと日露戰爭に際し特別任務班として北京より出征して戦死した志士の英靈を弔ふ爲めに、青木陸軍武官が祠を設けて祭られたに始まり、其の後日清戰爭・北清事變・日露戰爭より滿洲事變迄の戦病死者の英靈を此所に祭つた所で、毎春行はれるこの招魂祭は數年前迄は北京居留民の年中行事の主なるものであつた。

招魂社の東に建てられた銅像は故陸軍中將青木宣純將軍の胸像で、將軍は殆んど其の全生を支那に在勤せられ、北京在留邦人の崇敬の的たりし人であつた。

日本兵營

日本兵營は北清事變の結果其の最終議定書により、帝國公使館の護衛隊として置かれたもので、其の地はもと唐事府の舊址である。唐事府と云ふのは元來皇太子の爲めに主として經史文章を掌る官署で、明の中葉に此所に設けられたものであつた。清朝に於ては色々な事情から雍正以來皇太子のことは無かつたけれども、唐事府は明の舊に據つて之を設け、唐事以下の諸官を任命して居たが、何れも翰林院の銜を兼ねしむるを例として居た。

北清事變後公使館護衛隊新設の必要上、明治三十三年十二月に此所に兵營の新築を始め、翌春竣工し、爾來北京駐屯歩兵隊として支那駐屯軍の管下に置かれて居た。

現在營内には康熙帝の御筆になる存誠の石額を始めとして、青銅製の方缸や模造石鼓、明時の古碑等が残つて居り、昔都民が水質の良好なるを賞味して争つて汲んだと云ふ有名な唐事府の井戸も最近まで其儘に保存されて居た。

民國六年七月張勳の手によつて行はれた宣統皇帝の復辟事件に際しては、大總統黎元洪が此所に難を避け又同九年の安直戰爭に方りては安福派の要人等が此所に避難したことがある。

名勝遺蹟

〔内城の部〕

皇城

天安門の前から中華門に至る紅牆の凸出部を正面として、東は東安門、西は西安門から地安門を連ねる地域は舊皇城の禁域で、紫禁城の本丸に對して此の一郭を以て二の丸が形作られて居た。其の廣袤大體に於て東西約二軒四、南北約二軒八の長方形で、西南隅に僅かに缺凹があり、正面部に大きな凸出があつて、周圍は約八支里約一〇軒四と稱せられ、其の牆壁は高さ約十八尺(約五米八)と謂はれて居たが、民國十四年頃より之が取り毀しを始めて、東西北の三面は間もなく取り除かれてしまつた。

皇城の城門は上述の通り中華、東安、西安、地安の四門で、何れも黃蕪軍營の低い形に建造せられ門額を有して居る。此等の中で東安門は民國元年二月二十九日の兵變に燒かれ、其の後磚造の三座門を建て居たが、民國二十二年夏之を取り除いて今では其の地名だけを存して居るに過ぎぬ。

皇城の域内には紫禁城を始め、太廟・社稷壇・西苑・景山等の壇廟禁苑から、清朝時代には大小の諸官衙や貴紳の住宅等が設けられて帝京の中心をなして居た所で、民國以後も大總統府・國務院を始め多數の官衙・兵營・學校等が置かれ、首都南邊後此等には相當な變化もあつたけれども、地は北京城の中央に位置して今尚ほ最も重要な一郭を成して居る。

(一) 中華門は清朝時代の大滑門で、其の門額は横額であつた。現在太和殿の中に陳列されて居るものがそれである。

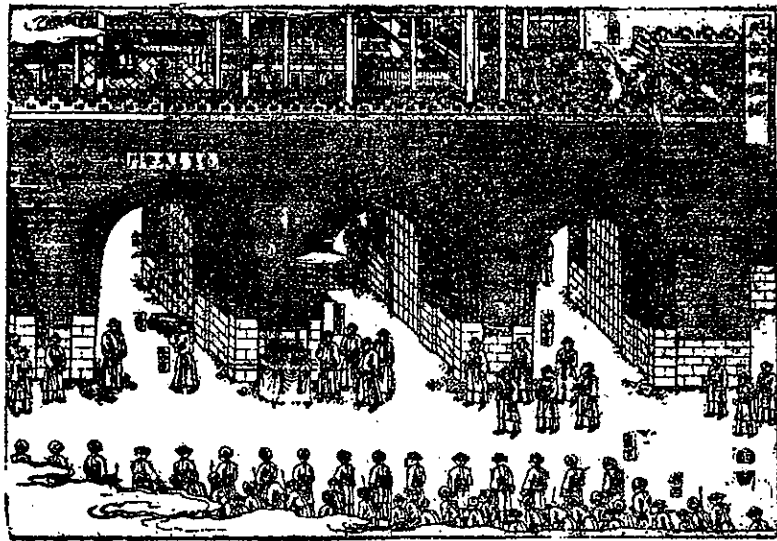
(二) 東安門内の玉河に架せられた橋は即ち東安橋であるが、この橋に關して今から百四十年ばかり前の文化二年に、日本で出來た『唐土名勝圖會』に斯うした記述がある。「内に宮仕へ奉る官女初め選に入りて宮内に登るに必ず東安門より進み東安橋を渡る由。之よりして日々朝思を奉り、限り無き榮耀を極むれば、此の橋を稱して皇恩橋と謂へり。凡そ宮中に登り仕ふる貴妃嬪御朝には醜遇の厚きに押れて君恩の恭けなきを忘れ、夕には重寶に誇りて我が父母の賤しきを悲む。依て京師の俗皇恩橋を渾名して忘恩橋と呼べり云々」

(三) 西安門の門額の右上方に一本の鐵筋が立つて居る。明末に北京を一時占領した流賊李自成の射たものと傳へられて居るが、今赤い布片を附

かり前に、西太后と光緒皇帝の一行は此所を通過して德勝門より出て、西安に派隨せられたのであつたと云ふ。

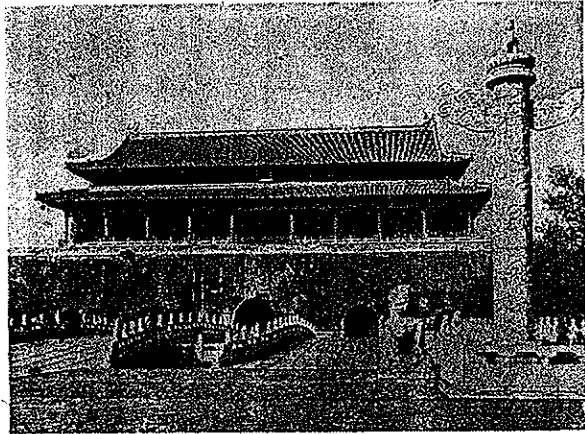
紫禁城 内六區

中華天子の居城を特に紫禁城と稱するのは、天上紫微垣の星座に天帝の御座が存すると云ふ支那古來の思想に出たものであるが、この紫禁城こそは四百餘州に君臨する天子の尊嚴を、殊更に誇大に示す様にと造營せられたもので、其の壯觀には誰しも一驚を吃するけれども、一石一瓦の間にも苛歎誅求の跡が見えるかの觀



天安门頡頏 (唐士名勝會)

して見
易い様
にして
ある。
(四) 地
安門は
一に後
門と稱
せられ
る。北
清事變
の時に
皇軍の
此の門
を占領
する二
時間程



天安门

があり有り難さや神々しさは素より奥ゆかしい気分さへも殆んど味へないのは、歴代標榜せられた王道政治か、眞の王道精神に立脚しなかつたことに因るが故ではあるまいか。

此の一郭に帝居が始めて造營せられたのは實に元の世祖の至元五年（皇紀一九二七年）で、所謂カムバリックの名に榮えた大都の内裏として、當時歐亞兩洲に跨つた大汗國の政令は悉く此所から發せられ、遠く來貢する四裔色目の使臣をして眼を障らしめたものであつたが、其の後約一世紀を経て順帝の至元二十八年（皇紀二〇二九年）に、明軍の大都占領と共に其の手に歸し、間もなく勅によつて元宮の毀敗を行はれたので、壯麗を極めた其の建物はこの時殆んど影を没してしまつた。

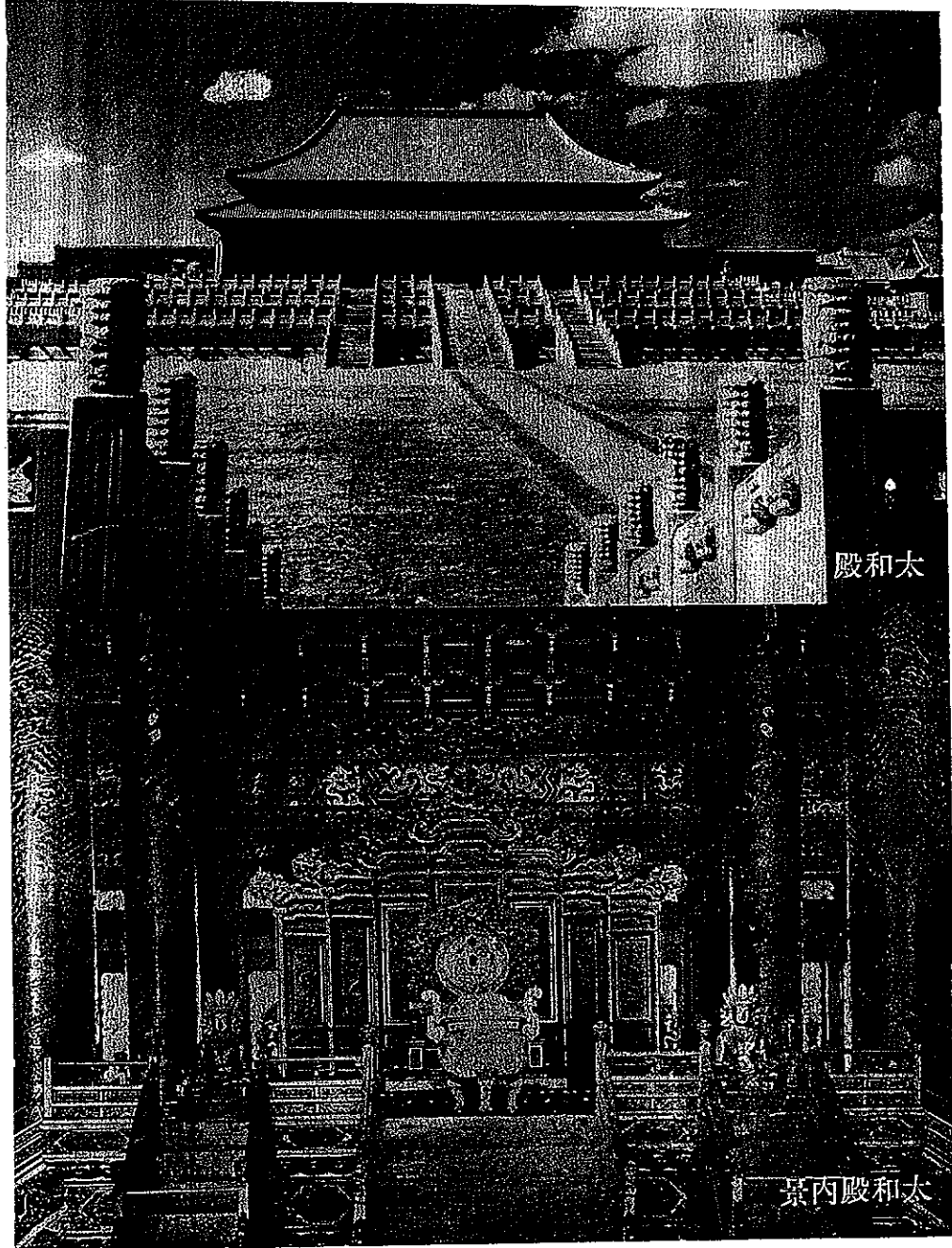
然るに明の世祖が即位すると、永樂四年（皇紀二二六六年）には北京奠都の事が定まり、宮殿造營の詔勅も發せられたのであつたが、之は大體に於て元の宮殿の舊址に據り、南京帝宮の制を模して、大々的な宮殿再興が始められたもので、其の落成は約十五年を経た永樂十八年十二月で、これが即ち明の大内であつたが其の壯大と輪煥の美とは元朝のそれにも増したものがあつたと謂ふ。然るに此の宮殿

も毅宗の崇禎十七年（皇紀二三〇四年）三月には、流賊李自成の陷るゝ所となつて、さんざんに其の劫掠を蒙つた上に、五十日はかり後に李匪の敗走に際しては、主なる宮殿は火を放つて焼き拂つてしまつた。

續いて北京に入つた清朝は明代の舊を踏襲して盛んに此等宮殿の造營を行ひ、康熙朝には大體に於て明末の舊觀に復したものの様であるが、更に高宗の治世に及んでは歴年昇平の餘力を以て、陸續其の改建重修が行はれて現狀になつたけれども、清末には國帑窮乏の影響を受けて此所にも漸く荒廢の風が萌して居たものの様である。

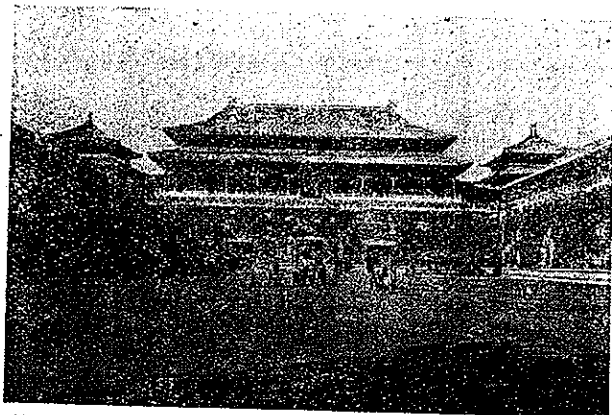
中華民國の成立と共に宣統皇帝は退位して萬壽山に移られることになつたが、當分は此の禁城内にお住みになる様にと、當時皇室優待條件に定められて居たけれども、民國三年には其の前半部は古物陳列所として開放せられ、同十三年末には皇帝の出宮と共に、其の後半部も時の政府の手に接收せられて、翌秋故宮博物院として開放せられたのであつたが、此の後半部内に於ては當時迄清國皇室が續存し、宣統の正朔が奉ぜられて居た。

紫禁城の規模に就ては諸書に



太和殿

太和殿内景



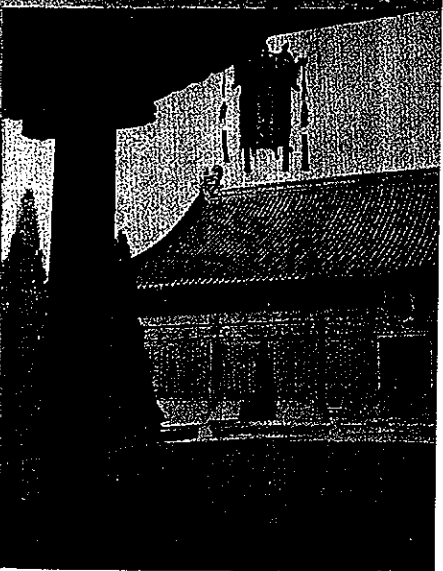
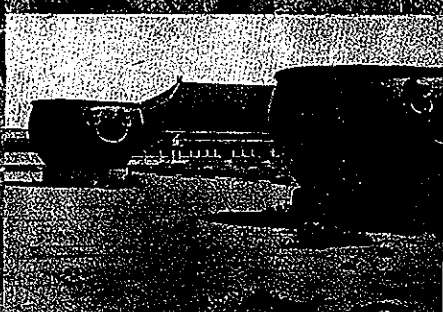
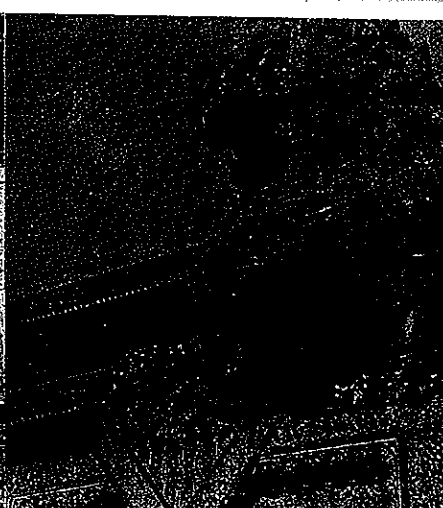
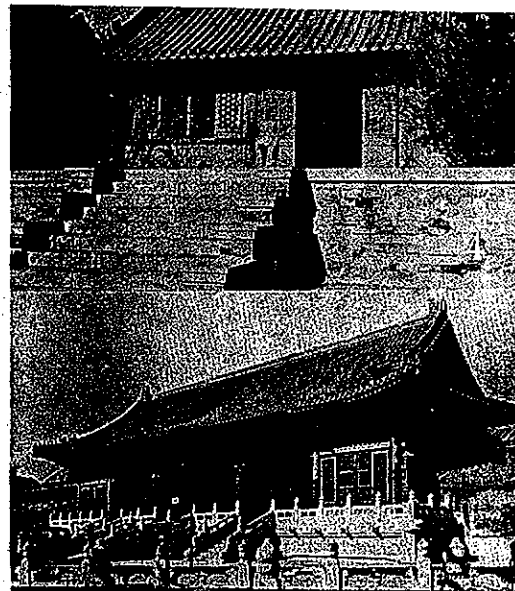
午門(歷史博物館)

南北各二百三十六丈二尺
東西各三百二丈九尺五寸
とあるが、此の南北は南北の兩面、東西は東西の兩面の意味で此等は營造工尺の長さであるから、之を換算すると南北の兩面は約七五六米、東西の兩面は約九六九米の長方形となり、此の面積は約我が二二二〇〇〇坪となる様であるが、此の周圍には高さ約一〇米の圍壁と、幅約五〇米の外濠とが繞らされて居て、其の圍壁の厚さは基底に於て約八米、上面に於て約六米五を算する。そ

れから此の圍壁と外濠との間には庫房・堆房等に充られた建物が東西北の三面に連つて居たが、民國以來漸次取り拂はれた箇所が多く、現在残存して居る東西の連房も近く之を取り拂つて、紫禁城周圍には立派な散歩道路を開く計劃がある。

それから此の一部には南の正面に該る部分に午門があり、東面に東華、西面に西華、北面に神武の諸門があつて紫禁城の四面の出入を警護し、其の四隅には角樓が設けられて帝城の壯嚴と偉觀とを添へて居る。城内は大體に於て朝と廷との兩部に分れ、即ち前半部が天子の朝儀の場所に充てられた所で之を外朝と稱し、後半部は天子日常の生活場所として用ひられた所で之を内廷と稱して居たが此の用途に従つて建物も大體に於て宮と殿とに區別せられて居

紫禁城西角樓



殿華文³ 紅綉前殿和太² 獅綉前殿和太
(懋寧世朝) 像妃香⁶ 堂德浴⁵ 殿英武

る様である。

午門

紫禁城外朝の正門になつて居る午門は、門樓の左右に金頂燦然と輝く前後の兩廡を有して、所謂五鳳樓を成して居るが、之は世界最大の城門と稱せられ、清朝順治四年（皇紀二三〇七年）の建築である。正面門樓下に三個の大門と左右の掖門とが穿たれて居るが、中央の大門は専ら帝后の通御に充てられ、左門は文武百官、右門は宗室王公の出入に用ひられたもので、左右の掖門は朝儀の參内に際して百官が左右の班次を正して出入する時に開かれたものであつた。門樓は天子の出入及び視朝に際して鉦鼓を設け、天子將軍の凱旋を迎へて獻俘の禮を受け、又毎年十月の朔日には此所に頒曆の儀を行つたのであるが、又平素百官の常朝には此の門外に集ふのが例であつた。

民國九年十一月歴史博物館を此の門樓内に設け、同十六年から開放して一般の觀覽を許して居るが、陳列品の主なものは金石・拓本類・明清の檔案類・官印・勳章記章・國子監舊存の器物・明器類・模型・兵器・刑器・圖表等で、此の中には鉅鹿出土の宋代陶器・鍼灸銅人・刑刀・凌遲刀

等の如き人の目を惹くものがあり、また支那の勳章記章類は其の數約二千個と稱せられ、之は曾て北京の伊太利大使館に在動した領事ロスノのコレ氏の蒐集品である。

此の門上に立てば紫禁城南半の大觀一眸の裡に集り、黃堦の間に白欄紅牆を交へて碧空に反映する壯景は、他に於て味ひ得ざる趣のものである。

三大殿

午門から金水橋を渡つて左右に跨る大銅獅の雄姿に見惚れつゝ太和門を入ると、前方遙かに白石三層の基壇上に聳え立つ太和殿の壯觀に一驚を吃せしめられるであらう。此所は紫禁城の正朝で、明朝時代の奉天殿の舊址に係り、「太和」の名は易經にある「各正性命。保合太和」に出たもの様である。其の壯大偉麗儼然として崇基の上に峙つところ、誠に四百餘州に君臨する大帝國天子の正朝として相應しいものがあり、來朝の四夷をして中華天子の尊きを如實に知らしむる好箇の教材であつた。

此の建築は清初順治三年に出来たものが燒失した後を承けて、康熙三十四年（皇紀二三五五年）の再建と傳へられるが、其の建築者は梁九と呼ばれた七十餘歳の老工師で

工事に際しては先づ百分の一の模型を造り之に據つて漸次組立を行つて竣工したと云ふ。現在の建物は東西十一楹（約六三米五）南北五楹（約三一米）で、重層四注造り三手先の斗横を以て重出の軒を受ける構造に出来て居る。

殿内には中央より稍奥まりたる所に一段高く寶座が設けられ、其の椅には雙龍と斧鉞とが描かれて居るが、之は所謂天子は南面して斧を負ふて立つ古例に據つたものである。又上部の格子天井の中央部には、一段高く丸天井を穿ち巧妙なる龍の彫刻を施したる中に、銀色の懸珠を吊り下げてあるが、此の様式はかの營造法式に闢八藻井とあるものに該當し、天子の正殿中央部や特殊な寺廟の佛龕の上部などに用ひられて居るのを見受ける。

此所は元且・萬壽・冬至の三大節を始め、其の他の大慶典に際して天子出御の上百官の拜賀を受けさせられた所で、現在寶座の前に陳列せられた正從十八品の品級山は、斯うした大朝儀の際に之を基壇下廣庭の左右に配置して、百官整列の班次を示したもので、また其の後方にある滿漢兩文字を用ひた「大清門」の大門額は、清朝時代に今の中華門に掲げられて居たもの、皇帝及び八旗々人の戎裝は昔行

はれた南苑の大開に着用せられたもの、其の他殿内陳列の扁額類や古董類等の大部分は曾て熱河離宮に藏せられて居たものである。

殿前基壇の間に設けられた三路の石階は即ち陛と稱せられるものであるが、「陛下」の尊稱は實に之から生じたものである。即ち天子の坐します所、恙うした陛の下には常に不慮を警しむる衛士が配せらるるのを例としたのであるが、百僚有司天子に上言するに當りては直言を憚り、此等衛士の從言を以て上聞に達するの意より此の尊稱が起つたものと謂はれて居る。それから此等陛の中央には見事な龍紋を彫刻した石板を嵌入してあるのが多いが、此等の彫石には相當に大きなものがあつて、丁度此の太和殿前と前後相對する保和殿後方の大彫石の如きは、長さ五十二尺幅十三尺を算する大石板である。また此の陛の上下左右に安置せられた十八個の寶鼎は支那本部十八省を表徴したものと謂ふが、殿前丹墀の兩旁に設けられた銅鶴銅龜は長壽の動物として聖壽の萬歳を奉祝する意味に則つたものの様で、其の前に配せられた日晷と嘉量とは、天子施政の要諦が民に正しき時と正しき量器とを授くるに在つた三代の舊風

を取つたものと謂はれて居る。

太和殿の後方は中和殿で即ち明の華蓋殿の舊址である。

此所は天子太和殿への出御に先だち扈從の大官及び侍衛等の拜を受け、又壇廟の祭祀に先だち其の祝版を親閲し、先農壇の親耕に豫め農具を視、或は皇太后の徽號を加ふるに方つて其の奏書を親閲せらるゝ等の時に用ひられた所で、現在設けられて居る四隅の汽罐は袁世凱の帝位僭稱當時に、其の老體を慮つて採暖の用に設備したものである。

保和殿は清初に位育宮と稱せられ、明の謹身殿の舊址に建てられたものである。此所は毎年の除夜に天子親しく臨御して外藩の王公を饗宴し、又科擧に際しても天子親臨して殿試を行はれた事もあつたが、歷朝の聖訓寶錄の完成を見る時にも此所に進るのを例とした。殿後の墻は即ち大體に於て内廷と外朝とを分つ線になつて居る。

民國四年十二月袁世凱の愾かに皇帝を稱するや國幣二百萬圓を投じてこの三大殿一帯の大修繕を行ひ、殿門の名稱を改めて洪憲の帝制は此の中に於て華やかな儀仗の下に進められつゝあつたが翌年三月には帝制取消の命令が發せられ、同六月には袁世凱の死に依つて遂に此の帝制は全く解

消したのであつた。此等の殿門の名は民國八年に復舊せられたけれども、當時の改名の痕がまだ判然と残つて居る所があり、太和門西の一室には當時の即位に用ひられた調度

が保存せられて居る。

註一、太和の正音は「タイクワ」で中和、保和も之に類するものである。

二、「陛下」の尊稱は支那の戰國時代には諸侯にも用ひられたが秦の始皇帝の時から専ら天子の尊稱に用ひられる様になつた。近頃太和殿内養井の懸珠を代て陛と爲し、其の陛下下に寶座が設けられて居る所から陛下の尊稱が出たなど、説く聲があるが、不學も甚しき誤りである。

三、太和殿の東西兩廡の中央部に體仁、宏義の兩閣がある。明朝時代には體仁閣を金庫に宏義閣を銀庫に充てられて居たが、清朝になつからは體仁閣に金銀を貯藏し、宏義閣に綬子を貯藏したと云ふ俗傳は、結局清朝の國富が明時代に及ばなかつたとする意味を寓するもの、様で民國後に生じた傳説であらう。

四、太和殿の大きに就ては某報告書等に間口一九九尺四寸奥行一一〇尺八寸とあるが實測の結果は頭記の通りであつた、この建物は太廟の前殿や明十三陵の長陵にある隆恩殿と共に、支那に於ける木造建築の最大なるもの、一つである。

五、靈鈞の天咫偶聞に據ると太和門は光緒十五年(明治二十二年)十二月に燒けて居る(卷一)、現在の建物は其の翌年の重建と傳へられる。

から紫禁城内に於ては新らしい建築の一つである。

門前の東にある大理石の小石闕の用途に就ては色々の説があるが宮廷當直者の氏名を掲げたと云ふのが實の機である。又西の石造寶匣は紀均の閣殿草堂日記(卷二十二)に據ると、曾て之を開つた時中に米穀の朽化したらしいものが入つて居た様に記してある。

六、保和殿に於ける除夜の外藩王公饗宴の後に於て、「打虎虎」と云ふ特殊な劇が演ぜらるゝのを例としたが、之は清の太祖の故事を脚色したもので劇中には竹馬が用ひられる様な特別な場面もあつて鳴虎兒はその名通り熊怪に扮して居たと云ふ。

武英殿

東華門内の文華殿と東西に相對して西華門内に武英殿がある。清朝時代に於て欽定の諸書は此所で校刻、裝幀、貯藏せられたもので、此等が即ち世に殿版と稱して珍重せられる唐本である。又乾隆の中葉に出來た武英殿聚珍板の活字も亦此所に格納せられて居たが、此等は光緒二十七年(明治三十四年)六月に雷火の爲めに烏有に歸してしまつた。現在の建物は其の後の再建であるから、紫禁城内に於ては最も新しい建物の一つである。當時西華門を守備して居た日本軍と、午門の守備を担当して居た米國兵とが、異常の協力の下に消防に努めたこともあつた。

民國三年に文華殿と共に此所を開放して古物陳列所となし、熱河及び奉天の兩離宮に藏せられた清朝の寶物を此中に移して陳列し、一般の觀覽を許したのであつた。當時集められた寶物は無慮二十五萬點に近かつたと稱せられ其の精巧古色眞に人をして目を眩らしむるに足る物が澤山にあつたが、其の後打ち續いた政變や兵變等に際して此等の逸品は逐次其の行方を失し、殊に熱河聖戰當時に於て、主なる寶物類は南方に劫運せられて、もと西廡の煥章殿内に陳列せられた三代の古銅器の如きは、今や一物の存する物さへも無き始末である。然し現在に於ても尙ほ約十萬點の古物類を存すると傳へられ、殊に陶磁器の所藏に於ては、世界屈指の博物館と謂はれるが、今では相當如何はしい物の混存を認められるのは遺憾である。

武英殿に續く敬思殿の西に浴德堂と云ふ小堂があつて、其の後方には見事な土耳其式の浴室が連つて居る。此の一郭は乾隆帝の寵を集めた香妃の爲め帝が特に造營せられたものと傳へられて居て、堂内には當時の伊太利人畫家で郎世寧の名を以て知られるのCastiglione Giuseppe 筆に成ると謂ふ二枚の婦人の肖像畫が保存せられて香妃の像と稱せら

れて居る。たゞ此の香妃に關しては正確な資料が無い爲めに、從來單に回部の王妃とか准葛爾の王妃など傳へられて居るが、これは乾隆二十三年（皇紀二四一八年）から將軍兆惠に討伐せられた回部ホーシヤ（和卓）の王妃であつた土耳其美人の様に考へられる。此の王妃は其の體に生來特異の芳香を存したので香妃の名が起つたと傳へられるのみならず、乾隆帝の西域平定も實は此の妃を獲る爲めに行はれたかとも想像せられる點があるが、而も妃は帝の寵を恣にしつゝも尙ほ且故主の爲めに復仇する事を忘れなかつたと云ふので、遂に皇太后が其の不慮を擧げて之に死を賜つたものゝ様である。この香妃に關する傳説はこの外にも今の新華門や、西長安街の回々營、陶然亭に近い香塚等にも残つて居るのみなら

香妃のこと

香妃のことに關してはいろいろな傳へがある。北京の父老の傳説では「新疆回部の王は、乾隆時代に清朝のために征服され、爾は破れ家は亡び其身は死んで、妾は俘となつて皇帝に獻せられてしまつた。その妾の體には常ならぬ芳香があり、近づくと厥る薫つた。そこで乾隆帝はこれを妃となし、香妃と呼んだ。しかし乍ら妃は烈婦で操固く、死んでも帝に従はうとしない。つひに帝が天を祀るために皇宮を出で天壇に瘞戒してある際、皇太后のはからひで死を賜つてしまつた。以てその志を達したわけである。南海の前門（新華門）は舊と名を寶月樓といひ、乾隆二十七年に妃のために建てたものである。南海の塔の外に回子營といふところがあつて、その塔の様子はすつかり西域式になつてゐた。妃がこの寶月樓に登つて回子營を望み、その思慕の情を慰めるために建てた



門正朝妃香の年初國民

この話は一面、香妃の節烈を讃へ、一面帝の厚い寵を叙べたものであるが、國史の上には典據がない。史實の研究者は多く、香妃其人が實際に存在した人であるといふことすら承認しない。但し余の知るところに據れば、回子營に香妃廟がある。乾隆二十九年に建てたもので、その建立は正に寶月樓の建てられたのと同後してゐる。廟中に勅建の碑があり、その名を禮拜寺といふ。乾隆御筆の碑文は正面を滿洲文と漢文で記し、背面をアラビア文字と蒙古字で書してある。此廟は現在、建設總署を建てるために移建されたが、碑だけは今も存してゐる。香妃其人の有無は、北京の史實研究者の研究の焦點であるが、既にその廟があるのだから、その人が無かつたといふわけには行かない。李文蔚君の著した『清北宗數年鑑』には、この廟を致つた事に就いて頗る詳しい記事があり、以て余の説の謬とす可きである。（曹宗備）

名勝舊蹟

ず、京劇の「香妃恨」や王園運の「今烈女傳」等にも傳へられて居るが、これに類する土耳其風呂は哈達門外天慶寺の東にも相當古いものが残つて居る。武英殿の東廡は凝道殿で此所には現在古書畫を陳列してあり、西廡の煥章殿にはもと三代から兩漢時代に亘る古銅器が陳列せられて居たが、之は熱河聖戰當時にすつかり南方に運び出されてしまひ現在その跡に明清時代の武器を陳列してある。武英門の西に開かれた咸安門はもと咸安宮と云ふ宗室八旗の子弟を教育した官學の正門であつたが、其の宮址には今寶齋樓の洋式倉庫が建築せられて、古物陳列所保管の寶物を其の中に納めてある。門の兩側にある正大光明の石額は世祖順治帝の御筆で、其の拓本は故宮乾清宮正面の額になつて居る。

咸安門の前にある南薰殿はもと支那歷代帝王や聖賢の畫像を藏した所で、此等の畫像の多くは明時代に宮中の内庫に藏せられたものを、乾隆の初めに裝潢を加へて此所に移されたのであつた。

文華殿

東華門を入ると其の北側に舊清史館の一郭がある。民國

になつてから此所では専ら清朝史の編纂を行つて居たのであつたが、民國十八年になつてから漸く出來上つて居た稿本に、反革命的な個所があると云ふので、其の刊本を舊南京政府で没收し、此所を閉鎖してしまつた。清朝時代には歴世の史録は此所で作られて居たのであつて、東華殿の名は即ち此の門の名に因つて起つたものである。

文華殿は天子の經筵を行はれた所でこの儀式は恰も我が國の御講書始の御儀にも該るものである。即ち毎年春秋の仲月に天子親臨の下に講官は殿内に進講し、終れば天子親ら御論を宣示せられ參列の諸臣跪坐して之を聴き、其の後順次座に列して殿内に於て茶菓を賜はるのを例とした。

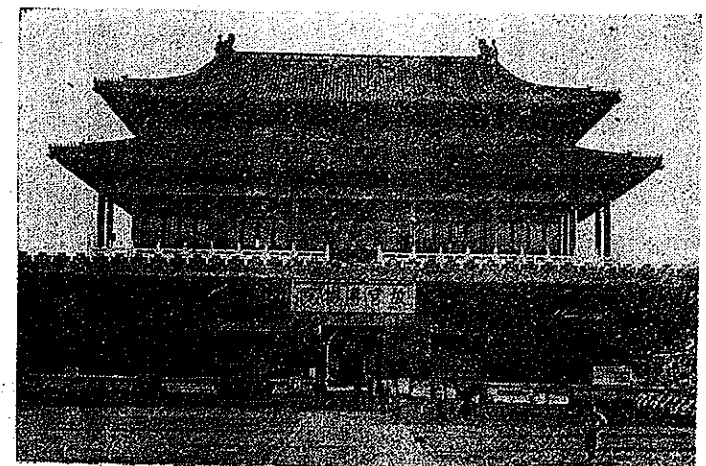
後方の主敬殿と通る文華本殿の兩廡は、東を本仁殿、西を集義殿と稱し、民國三年に古物陳列所として開放せられ専ら書畫類を陳列して一般の觀覽に供して居たのであつたが、熱河聖戰當時に此等殿内の畫畫は殆んど残さずに南方に運び出されて、爾來一時閉鎖されて居たが、民國二十四年七月頃から米國人フオーガソン Dr. John C. Ferguson 氏の蒐集した考古學的資料を陳列して觀覽に供して居る。また此の文華殿の東に通る傳心殿は、清朝時代に先聖先

師の神位を奉祀した所で、民國十年頃から曾て清朝時代に皇帝の用ひられた日用調度等を陳列して寢宮や書房等に換し、一般に開放して居たこともあつたが、熱河聖戰當時から閉鎖されて居る。

文華殿の後方にある黒琉璃瓦葺の樓閣は文淵閣で、禁裡に於ける四庫全書の格納庫であつたが、此の四庫全書も熱河聖戰當時に持ち出されて南運されてしまつた。それから東華門の南に聳える東南角樓下の一部は天子の御乘を掌つた鑾輿衛で、其の西に連る一帯は所謂内閣大庫で、此の中には寶録庫、紅本庫、内閣大堂等が相連り、曾ては種々の貴重なる檔案類が格納されて居た所である。

故宮博物院 内六區景山前街

紫禁城の北半部を爲す内廷は、大體に於て保和殿後方の紅牆の線を境界として外朝と分たれ、北方の神武門から出入する様になつて居る。明清の兩朝を通じて歴世皇帝の宮中に於ける日常生活は、其の大部分を此の中で過されたのであつたが、特に明末に於ては宮廷の腐敗其の極に達し、此所を中心として一萬に近い宮女と約十萬の宦官とが、權



中に其の寵を得る者が跋扈した觀があつた。民國になつてからも此の一郭は清國皇帝の皇居として引續いて其の居所に充てられ、十三年十一月五日宣統皇帝の出宮當時迄は皇帝や后妃を始め同治、光緒兩朝の老妃達

も此の中に居住せられて居たのであつた。

宣統皇帝の出宮後は清室善後委員會の手に接收せられて内部の點檢が行はれ、翌十四年の十月十日には之を故宮博物院として開放したので茲に於て到底外間からは窺ふ事さへも許されなかつた、此の專政老天國の後宮の模様がある程度迄公開せられたのであつたが、當時は北京の主權が彼の馮玉祥一派の手に掌握せられて居た關係上、此の間には曾て勞農露國に於て行はれたクレムリン宮殿開放の故智に做つたと噂せられた點などもあつて、故らに帝王政治の醜い半面を公開したり、又は多少の扮色を加へて觀覽に供したるもの等もあつた事は心すべき所で、今尙ほ此所の内部には一種の伏魔殿的な秘密の包藏せられると共に反帝政的な動向の存することは注意を要する所であると思ふ。

現在出入して居る神武門はもと玄武門と稱した紫禁城の後門であるが、清朝になつてから聖祖康熙帝の諱を避けて今の名に改められた。當時聖祖が西洋人の上つた獅子を觀られたのもこの神武門の上に於てであつたと云ふ。昔は宮中に於て時刻を報ずる鐘鼓が此の上に設けられて居たが、今門樓内には天子の鑾輿や儀仗等を保存してある。

神武門の中は更に圍壁を繞らした數郭が存して、其の正面に順貞門が開かれて居り、現在此所を通つて内に入る様になつて居るが、この故宮博物院の一郭は劃然として中・内東・外東・内西・外西の五路に分たれ、此の區劃は景山に上つて俯瞰すれば殆んど判然と看取出來る、現在之を三日に分つて觀覽を許して居るが、大體に於て中路は天子皇后の正宮を中心とする部分、内東路は奉先殿と齋宮とを南にして其の後方に東六宮を配した部分、外東路は天子讓位後の養老の場所として造營せられた部分、内西路は天子常住の養心殿を南にして其の後方に西の六宮を配した部分外西路は皇太后養老の場所たる慈寧宮の一帯を主にして、其の後方に道教喇嘛教の特殊な祭祀を行ふ建物を配した所と考へてよい様である。

中 路

順貞門内の東一長街と西一長街との中間の一部で、天子の正宮たる乾清宮、皇后の正宮たる坤寧宮を始め、交泰殿欽安殿等が主なる建物で、外朝保和殿後方の乾清門が其の正門となつて居る。乾清宮は天子親臨して日常の政を聴き臣僚を召對し、外

藩屬邦の使節を引見し、又歳時に於て内臣の賀を受け宴を賜つた所で、清末には外臣の接見も此所で行はれたこともあつた。曾ては皇帝寢御の場所にも充てられて居たが、乾隆帝の時代から之を養心殿に改められて清末に及んだ。宮内正面寶座の後方高く掲げられた「正大光明」の額は、順治帝御筆の拓本であるが舊額は熱河聖戰の時分南方に持ち去られた。清朝に於ては種々の關係から皇儲を立てたことが殆んど無かつた關係上、時に天子は後嗣の名を書して箱に密封し此の額の後ろに入れて置かれたことは有名な話である。東西に残つて居る几上にはもと欽定古今圖書集成が置かれ、寶座の右には大きな地球儀が設けられて居たが今は取り片づけられて居る。宮前月台上の陳設は太和殿に類して居るが基壇下の東西には東に江山、西に社稷を祀つた小金殿を安置してある。其の四圍の廂房は東から順序に御茶房、端凝殿、自鳴鐘房、御藥房、上書房、敬事房、南書房、内奏事處、批本處、懋勤殿等となつて居り、其の間東西に日精、月華の兩門があり、正面乾清門の兩廂は乾清門侍衛の詰所となつて居た。

御茶房は其の名の通り天子に茶を上る用を辦じた處で、端凝殿は明朝の

中葉迄は天子の冠袍帶履を藏した所であつたが、清朝になつてからは官帽朝珠、指甲、緞鞋等も納められて居たもの、據で、曾て宣統皇帝の婚室も此所に保存せられて居た。自鳴鐘房は天文儀器、鐘表類、曆算等を格納した所、御藥房は調劑所、上書房は皇子の學問所であるが、宣統帝の即位後其の生父醇親王は此所で政務を視られて居た。敬事房は専ら宦官が大典の仕事をした所で、昔は天子の寢に侍する宮女は此所の手を煩はすのを例としたもの、據である。南書房は翰林院の學士で特に南書房行走を命ぜられた人々の宿直した所で、内奏事處は奏章を天子に取次ぐ宦官等の居る所、批本處は批票及び本章を掌つた所、懋勤殿は翰林學士兼直の場所に充てられた所で聖詔に押捺せられる御璽は常に此所に保存せられて居た。

交泰殿は乾清宮の後方にある單簷四注造り滲金圓頂を有する建物で、其の制は外朝の中和殿と相似た所がある。此所は清朝時代に皇帝の寶璽二十五顆を藏した所であつたが後には皇后の寶四個も亦此所に移された爲め大小二十九個の寶璽があつた。天子の寶座を中央にして其の東西に曾て寶璽を藏めた匣を奉安し、更に東に漏窗西に大自鳴鐘を置いてある。寶座の後方に掲げられた無爲の額は康熙皇帝の御筆である。

交泰殿の後方は坤寧宮でもと皇后の正宮に充てられた所であつたが、清朝の中葉からは神を正寢に奉祀する滿洲

民族の舊習に従ひ、此所を天子の祭神殿として用ひらるゝに至つた。即ち外觀的にも窓を堅格子として其の窓紙を外から貼つてある所や、正中に大きく開かれて居る管の入口を東方に偏在せしめて小さく開いた所などに祭神殿としての特徴が見られる外、内部に於ても低い坑を南西北の三面に廻らした所や、入口の正面に竈を設けた所、東方の二楹を天子大婚の際の合巹の場所に充てた所など外の宮殿に見られぬ特色が存する。此所で祭られた神は滿洲民族本來の信仰に係るシャーマン教 Shamanism の神々で、之を祭る爲めに滿洲八旗の婦女から俗に薩滿太々と稱する女巫を特に任用して此の祭祀を掌どらしたのであつたが、此の特殊な祭祀に用ひられた神像や祭器神桿等もまた殆んど原状のまま残つて居る。

坤寧宮の祭祀は乾隆帝の欽定に係る滿洲祭神大典に詳しく定められて居る。此所の祭祀は朝夕の二回に行はれ、朝祭には西方の神座前に釋迦牟尼佛、銀世菩薩、關帝の三位を祭り、夕祭には北方の神座に穆里汗、賽魯神、蒙古神の三位を祭つた。兩祭とも毎に豚二頭を供へて之を神前に屠り、釜で煮た上で更に神前に上つて、女巫が滿洲語の呪文を唱へながら跳り廻る祭儀があり、殊に夕祭の終りには背燈祭と云ふ賑祭があつて、此の時女巫が腰鈴を纏つて憑神状態になつて神殿内を跳り狂ふ様な儀式も

あつた。又西壁に掛けられた後には滿洲人や蒙古人の間に神祕な傳説を有つ子孫袋(俗稱嬭々袋)で、入口の正南にある神柁は俗に祖柁柁子等と稱し、毎月一回祭天の名に依つて清朝の先祖を祭つたものであつたが、其の先祖と云ふのは實は饒で、之は清朝發祥傳説にも明なる如く愛新覺羅氏のトテムの祭祀であつた。斯うしたシャーマン教の祭祀は上は天子より、下は八旗の走卒に至るまで、滿洲蒙古の兩旗人は北京でも之を行つたもので、この坤寧宮の祭祀も清末まで續いて居たのであつた。又滿洲人本來の結婚式は神前婚禮の儀式に依つたもので、現在この宮内にある喜神桌及び天地桌は民國十一年末の宣統皇帝の大婚に用ひられたものである。

坤寧宮の後方は坤寧門で其の東西兩板房は殆んど宦官の住房に充てられた所であつたが、現在其の東板房には郎世寧(伊太利人 Carluccio Giuseppe)と艾啓蒙(奧太利人 P. J. Schallart)の筆に成る御馬の寫生畫十幅が掲げられ、之に續く基化門の南屋には精巧な象牙細工の陳列があるが、此の中の宮廷十二個月の生活を描いたものは實に稀有の傑作であり、其の末尾に作者の名を記してあるのは珍らしいことである。

坤寧門の後方一帶は御花園と稱せられる。紫禁城の中で樹木の多いのは此の邊りで、帝后の好んで散策せられた場所であつたと謂ふが、樹木の中に特に連理柏の多いことも

目立つ所である。

天一門内の欽安殿は宮中鎮火の神として玄天上帝を奉祀した所で、此の神様は曾て乾清、坤寧兩宮の失火に際して出で、火を鎮めたと傳へられ、清末までは其の靈顯かな意味で宮女や宦官等の間にも頗る信仰せられて居たのであつたが、此所は道場としても東の玄宮寶殿や西の斗壇と共に頗る整つたものである。殿内にある龍皮鼓や岳飛の傳説の絡はる青龍缸等は、殿前にある魯班の石柱や旗幟使者の金龍、天一門外の諸葛拜斗石等と共に、斯うした九重の奥の神秘を傳へるものであらう。

欽安殿の東西には稍離れて東に絳雪軒があり西には養性齋がある。絳雪軒は曾て光緒皇后の休憩所に充てられたこともある所で、其の前に栽えられた太平花は京師誰一の珍木と稱せられ、開花の期節には特に外賓を招待して觀覽に供したこともあつたが、元來四川邊に野生するもので日本の卯の花と似たものである。また養性齋は宣統帝の英語教師として奉侍した、英國人ジョンストン Sir Reginald Johnston 博士の住んだ所で、屋内の諸調度は當時のまゝと傳へられて居る。此の一帯の通路に當る部分は精巧なモザ

イク式に、大小各色の色石を配して色々な形が作られて居る所など、觀る人をして流星は王者の營みと三嘆せしむるものがある。

内 東 路

中路と東一長街を挟んで其の東方に在る一郭で、主なる建物は奉先殿・毓慶宮・齋宮・東六宮及び玄宮寶殿等であるが、東六宮の北に北五所、東に東三所が連つて居る。

奉先殿は大廟に模して歷世帝后の神位を奉安した紫禁城内廷の靈廟で其の外門は誠肅門である。其の西の毓慶宮は所謂東宮で、皇子の居所に充てられた場所であつたが、昔皇子の多い時には内西路の北にある重華宮の一郭も之に充てられた様である。齋宮はこの西に設けられて居るが、此所は天子齋戒の場所で壇廟の祭祀に際しては天子此所に籠つて親ら齋戒に服せられた所で、有名な齋戒銅人は其の所在を失して居るが、其の寶座と乾隆帝御筆に成る敬天の大額とは昔のまゝに残つて居て、宮内には現在玉器類が陳列されて居る。

東六宮は景仁・延禧・承乾・永和・鍾粹・景陽の諸宮で后妃の居所に充てられた場所であるが、光緒朝には鍾粹宮

に皇后、永和宮に瑾妃、景仁宮に珍妃が住はれたのであつた。殊に永和宮は宣統皇帝出宮の直前迄、瑾妃が居住せられて、出宮の當時は其の年の九月に他界された妃の靈柩がまだ奉安されて居た。其の南にあつた延禧宮は數年前故宮の庫房に改建せられたが、此所は俗に水晶宮とも稱し、宮前に玻璃圍ひの小亭が建ち並んで居たが、民國六年七月の復辟戦に際して飛行機の爆撃を蒙つて大破した所である。現在景仁宮には古銅器、承乾宮には清代の磁器類、永和宮には時計類、鍾粹宮には元明清の書畫、景陽宮には宋元明の磁器類を陳列してある。

景陽宮の東は玄宮寶殿で、此所は道教の神である元始天尊を奉祀した靈場であるが、久しく開放を中止して居る。また東三所と云ふのは緞庫・茶庫・南果房で、北五所と云ふのは如意館・壽茶房・敬事房・四執庫・古董房で、この中で如意館は宮中の蠶院、壽藥房は后妃の侍醫の詰所であつた。后妃の居住に充てられる六宮は古くは後五前一の制に據るべきものであるが、之を東西に分設したのはこの紫禁城に始まつた特例の様で、清末に於ては同治の后妃が西に住はれたのに對して、光緒の后妃は東に置かれ、更に宣

統の后妃は西に居られると云ふ風にして之を用ひて居た。

外 東 路

外東路は寧壽宮一帯を主とする内廷の東郭で、此所は明代に於ける仁壽殿、熾慶宮等の舊址である。

清朝になつてから康熙の中葉に皇太后奉養の場所に充てる爲め、多數の宮殿を建て並べて明代の舊態を一新せしめられたが、其の後更に乾隆の中頃に改變重修が加へられて現状となし、此所に皇太后を奉じて其の晩年を樂しましむると共に、皇帝歸政後の養老の場所に豫定せられたのであつたが、かの西太后も其の晩年を此の一郭に過させられた様である。

圍壁によつて他と隔絶せられた此の一郭には南に錫慶、欽禧の兩門と、北に貞順門がある外東西に二三小門が穿たれて居るが、現在殆んど開かれて居らぬ關係から、錫慶門を入つて貞順門に出る順路になる。

錫慶門内の九龍壁は其の南が戲衣庫に面して居るので、北側の一面よりが見られないが、其の構造は北海小西天外の物と大體に於て相似たもので、只龍の出來榮えに於て北海のものに比し甚しい遜色を感じる。此の北にある皇極門

を入ると更に寧壽門があつて、其の中に皇極殿と寧壽宮とがあり此の兩宮殿は大體に於て中路の乾清、坤寧兩宮の樣式に擬せられて居る。特に皇極殿は西太后の晩年に其の正殿として用ひられた所で、太后の崩後には其の靈柩を此所に暫安せられたのであつた、今殿内には寶座の前に康熙、乾隆兩朝の萬壽聖節圖を陳列し、其の東西に嘉慶初年製の漏壺と乾隆朝所製の大時計とを置いてあるが、萬壽聖節圖は兩朝時代の風俗を知る好個の資料である。また寧壽宮は坤寧宮と同じく宮廷祭神の場所に充てられたもので、今宮内には清代の繪圖を陳列してある。

此所を東に廻つて養性門を入ると養性殿がある。天子常住の場所として用ひられた養心殿に模して營まれた所で、其の月台の陸も亦養心殿と同じく特色のある滿洲固有の樣式を用ひて居るのは珍らしい殿内には樂器が陳列されて居るが稍不揃の觀がある。殿東の一部は暢音閣の大舞台で、之は熱河離宮の清音閣や、圓明園の同樂園、清漪園の怡春堂と共に乾隆營造の宮廷戲場であつたが、同樂園と怡春堂は英佛聯合軍の亂に燒き拂はれて、現存して居るのは暢音、

の模型を陳列してあるが、其の後壁に掲げられた春牛圖は珍らしいものである。

景祺閣の西にあるのは符望閣で、此所から南の一郭は養性門西の衍祺門を其の南門として寧壽宮の西路を爲して居るが、此の一帶は乾隆帝の崩御以來人の住む者無く、所謂紫禁城内の不開の宮殿として百数十年間を荒廢に任せて居る。かの光緒皇帝の寵妃として西太后の怒にふれ、景祺閣後方の小房に幽閉せられて居た薄命の美人珍妃が、北清事變に際して太后の西安蒙塵に方り、其の毒手に罹つて投げ込まれたと傳へられる井戸も此の符望閣の東に残つて居て、井戸の北に開かれた貞順門内の懷芝堂東室には、其の非命の死を傷まれた姉の瑾妃が西太后の死後に、其の位牌を祭つて供養を續けられた跡が残つて居る。この瑾妃は後の端康皇貴妃で珍妃は行年二十五歳であつたが、此の事實は符望閣一帶に絡はる怪談めいた傳説と共に見る人をして一段の凄愴味を感じしめるものがある。

内 西路

西一長街を界にして中路の西に連る部分で、其の西の方の外西路との境界は大きな屈曲もあるが、養心殿の南庫を

清音の兩閣だけである。雲を突いて聳え立つ三層の戲樓は福台・祿台・壽台の名を以て呼ばれて居るが、劇は下台の外中台でも演じられて居る。今閣内に陳列された大小幾多の大道具や、曾て皇帝觀覽の場所に充てられた閣是樓内に陳列の劇戲關係の脚本・記録・盈頭類から戲衣類等を見つづ斯うした宮中の演戲を想起すればそれが如何に贅を盡したものであつたかが判るであらう。

養性殿の後方は樂壽堂と稱し、曾て乾隆帝の寢宮にも充てられた所であるが、其の制は長春園の淳化軒と同様であつたとのことで之と同名の建物は萬壽山にも現有するが堂前兩廊に御筆敬勝齋の石刻を嵌めてあるのも、淳化軒に模したものであらう。又此所は西太后晩年の起居の場所に充てられた所で、西極の北間には其の寢室も残つて居て、其の前には太后の御物も十數點陳列せられて居るが、比較的質素なものが多い様である。堂内には宮中文獻關係の物や清朝時代の錢が陳列されて居るが、文獻の中には珍らしいものも見受けられる。

此の次の建物が頤和軒で後方の景祺閣と相連ねられ、現在頤和軒には清朝の武器武具を陳列し、景祺閣には圓明園南とし西鐵門を北門とする一郭を爲して居て、重華宮・西六宮・兩華閣・中正殿舊址・西花園舊址・養心殿等が其の中にある。

順貞門を入つて御花園を西に澄瑞亭の西山門を入ると重華宮の一郭に出る。即ち明代の乾西五所の舊址で東の漱芳齋は重華宮の東郭で其の後殿と穿堂を以て相通して居り、齋前の舞台は結構精美を盡して居る。此の邊は乾隆朝の政建に係るもの、様で、乾隆帝歸政の後此所に王公大臣外藩等を召宴し雜戲を觀覽せしめられた所であつた。此の西に續く重華宮は曾て乾隆帝が其の皇子時代を過された所で、西廡の浴德殿は其の書齋として用ひられた所と謂ふが即位の後大に改修を加へて遂に現状になつたもので皇帝は毎年正月に此所に太后を奉じて宴に侍し、又廷臣に宴を賜ひ聯句倡和せらるゝを常例としたと傳へられる。清末には同治帝の妃であつた瑾妃が、其の晩年を榮惠皇貴妃に封ぜられて此所に住はれて居て、今尚ほ其の床帳を有して居る。重華宮の前は崇敬殿で中に掲げられた樂善堂の額は乾隆登極前の御筆に係り、當時の御製詩文集を樂善堂全集と稱せられて居るのはこの堂名に因んだものである。

崇敬殿の前門は即ち重華門で門前の通路は西二長街であるが、これの中に挟んで東側に儲秀宮・翊坤宮・永壽宮があり西側に咸福宮・長春宮・太極殿があつて、西六宮をなして居る。

咸福宮は明初の壽安宮で、嘉靖十四年(皇紀二一九五年)に現名に改められた所、康熙二十年(皇紀二三四一年)の重建と稱せられるが、其の建築様式には明代の物を考へさせる點がある。西太后時代から荒廢を招いて居たが十年ばかり前に、米國人の出捐に依つて修理を加へて開放し、現在乾隆帝遺愛の小玩を陳列してある。

儲秀宮は明初の壽昌宮で嘉靖十四年に今の名に改められたのである。清朝になつてからも此の名に依り、現在の建物は清初順治十二年(皇紀二三三三年)の重建であると云ふが、其の後儲秀門を取り拂つて體和殿を建て、前方の翊坤宮と相通接せしめたので現状になつてしまつた。此所は西太后の妃たりし時の住居で、同治帝は實に此所で誕生せられたのであつたが、其の後皇太后時代にも曾て此所に住まれたこともあり、天津郊外楊柳青出身の女流畫家として有名な繆嘉蕙も、當時太后に召されて常に此所に出入して

居たと傳へられる。民國十一年十二月宣統皇帝大婚の後は専ら此所を皇后の正宮に充てられ、遂に皇帝の出宮當時に迄及んだのであつたが、現在此の一郭の陳設は殆んど當時のまゝであるとのことである。即ち宮内正中に寶座を設けて、東室を其の寢所に用ひ、西室を其の浴場に用ひられたものゝ様であるが、當時使用せられた諸調度や化粧品書籍類等も其のまゝに残つて居り、中には英人教師ジョンストン博士夫妻や、皇帝洋裝の寫眞なども見える。宮後の麗景軒は洋式の食堂に使用せられたところで、中には食卓や椅子寢台等が設けられ、西の方には諸調度一切硝子のみを用ひた一室もあつて、其の隣室には北海の風景を描いた大幅が壁になつて居るが、軒下の狗窠は皇帝當時に飼養せられた犬の遺物であると云ふ。

體和殿は舊儲秀門の舊址に建てられたもので、専ら宣統皇后の書齋に充てられて居た所であるが、中には婦人用自轉車や洋式樂器類から玩具等も残つて居て、何れも皇后の使用せられたものである。

翊坤宮は明初の萬安宮で嘉靖十四年の改稱、清初順治十二年の重建と云ふ。西太后の貴妃たりし時に此殿は住居

た所で、後太后となつてからも此所に居られた事がある。宮前廊下に残つて居る鞞韞は宣統皇后のお用ひになつたものと謂ふが、之は昔から宮廷内に於ては婦人達の唯一の運動具であつた様である。

翊坤宮の西にある長春宮は明の中頃に一時永寧宮の名を以て稱せられた事のある所で、現在の建物は康熙二十二年の重建と謂はれるが、其の後に長春門を取り除いて體元殿に改建した爲めに今の形となつてしまつた。天啓の時にかの有名な李妃が此所に居た事があつたと謂ふが、降つて清朝光緒の初頃には東太后も一時此所に居られ、後には西太后も亦此所に住はれたことがあつた。宣統皇帝の時には淑妃が此所を用ひられて、東室を浴室に充て、西室を寢所に充て、西廡の承禧殿を書齋として用ひられて居たが、内部の陳設は儲秀宮と同じく大體に於て當時のまゝであると傳へられてゐる。この淑妃は名を文繡と云ひ額爾德特氏文綸の妹で慈心と呼ばれ、民國十一年十二月皇后と共に入内した人であつたが、民國二十年八月下旬天津に於て突如皇帝に離縁状を突きつけた婦人である。此の妃の宮殿は皇后の正宮に劣らぬばかりか、寧ろ調度等はそれを凌ぐかの觀さ

へある様で、西廡の書齋には妃の親筆らしい紙片や小説類らしい書籍も見られる。又この周圍の壁に描かれて居るのは、有名な小説紅樓夢の繪であると傳へられて居るが、特に注意せねばならぬのは長春宮東西の兩廡の筆致で、屈折視覚を巧みに應用して繪を廊下續きの様に觀せてしまつて居る所は、其の非凡な技倆を三嘆せしむるものがある。

長春宮に連る體元・太極の兩殿は、清末に敬懿皇貴妃と稱へられた同治帝の老妃瑜太妃の住まれた所で、宣統皇帝出宮の後、重華宮に住はれた瑾瑜太妃と共に軍營の無道な壓迫に堪えず、遂に死所と定めた紫禁城を退出されたのであつたが、それは皇帝出宮に後ること十餘日の民國十三年十一月二十一日で、茲に於て此の紫禁城は全く愛親覺羅氏の手を離れ、民國以來も尚ほ内廷に於て用ひられた宣統の正朔も亦、十六年十月二十六日(陰曆)を以て遂に終りを告げたのであつたがこれは、實に順治元年(皇紀二三〇四年)世祖の北京入城以來二百八十年目であつた。

太極殿は明初に未央宮と稱し嘉靖十四年に啓祥宮と改められ、清の中葉に現名に定められた所で、其の建築は康熙二十二年の重建と云ふが、此所の寶座を見ると其の後屏は

我が日光東照宮を描いた四つ折の屏風で、之には金時繪の葵の紋所が判然と見えて居る。

西六宮の一である永壽宮と、其の南にある養心殿とは久しい間開放せられないので此の内部を知つて居る人は少い様である。殊に養心殿は乾隆朝以來歴代皇帝の起居せられた所で、其の位置は中路から云ふと月華門の西にある養心門内である。

雨花閣は太極殿の西、春華門内にある三層の高閣で、屋上に燦然と輝く黄金の瓦と、四隅の飛龍とは見る人をして一驚を吃せしむるに足るものがあり、熱河喇嘛廟の金屋と共に絢爛たりし乾隆文化の一片を物語るものであらうが、此所は後方の賢華殿と共に喇嘛佛を祭つてあり、奇怪を極むる喇嘛の祭器なども藏されて居る。

雨花閣の後方は中正殿の舊址で即ち明の玄極寶殿の跡である。清朝になつてから此の一帶にも喇嘛佛を祭り、雍和宮の喇嘛に命じて讀經せしめられたのであつたが、民國十二年六月二十六日夜、突如其の後方の建物から火を失して延春閣、雨花閣を焼き更に此所も延焼を蒙つて烏有に歸してしまつた。これが紫禁城最近の火災であつたが、この原

因に就ては宦官の放火説が有力で、即ち宦官共が共謀して此の邊の寶物を盗出し、其の犯跡を晦ます爲めに放火したものと見られて居たが、宣統帝が大英斷を以て宦官約千四百を追放せられたのも其の直後のことであつた。現在雨花閣から賢華殿にかけて雜然と藏せられて居る佛像佛具等は當時幸にして類焼を免れたものである。

外西路

外西路は内西路の西から外朝武英殿の北方にまでも通る一郭で、慈寧宮を中心として其の前後に總管内務府、内務府造辦處、慈寧宮花園、壽康宮、壽安宮、英華殿等が主なる建物として配せられて居る。

慈寧宮は皇太后の正宮として營まれたもので、其の門額に滿漢蒙の三文字が用ひられて居るのは珍らしい。後方の大堂は特に佛堂として陳設を整へてあるが、其の西南にある慈寧宮花園中の咸若館、寶相樓、吉雲樓、慈蔭樓等には喇嘛教關係の佛像が澤山に奉安されて居る。

慈寧宮の西は壽康宮で其の北は壽安宮であるが、此の邊はまだ開放されて居らぬ。總管内務府は我が宮内省に相當する役所で、内廷の事務を總管して居り宮女や宦官なども

此所の區署を受けて居た。内務府造辦處は慈寧宮花園の東方の一郭で、此所は宮廷の御物を製造する所であつた。

外西路の北方に英華殿がある。明の萬曆年間に李太后が此所を開いて佛を祭られたと傳へられ、殿前東西にある菩提樹も太后の手植になるものと謂はれて居るが、枝葉よく繁茂して、年々實を結び殿前の大碑には乾隆御製菩提樹の歌を刻してあり。東廂に祀られた古い佛畫は李太后の肖像であると云ふ。現在殿内には喇嘛教關係の佛畫が奉安されて居り、陳列品の中には清初の皇帝の御筆に成る經文が澤山にある。

註一、北京内城の正中線が正陽門中央と一致しないので之よりも西約一四〇米の所にあると同じ様に、紫禁城の正中線も亦天安門、午門、神武門の中央を連ねる線よりも西にある。

二、紫禁城内にある建物の中で特に名を有するもの、みでも約四百に及ぶが、無名の建物を加へて其の棟数を算すると約七百ある。

景山

景山は紫禁城の北に築かれた人工の小山で、元、明に萬歲山と呼ばれて居り、マルコポーロの旅行記には「綠丘」の名を以て書かれて居るが、景山の名は清の世祖順治帝の勅

名に係るもので萬民景仰の山の意味である。又一名煤山と稱せられるのは元の世祖の築造に際して、籠城非常時の用に備へる爲め此の山下に煤(石炭)を埋めて、上に土を被ふたと云ふ傳説に基くものであるが、此うした傳説は明朝の中葉頃に始まつたものゝ様で、萬曆末に出来た野獲編の中に見えるのが始めである。即ち明の第六世の天子英宗は正

統十四年(皇紀二二〇九年)八月、奸宦

王振の勸めに従ひ群

議を排して、今の大

同地方に侵入した

蒙古の偉酋也先の軍

を親征したのであつ

たが、勢の非なるを

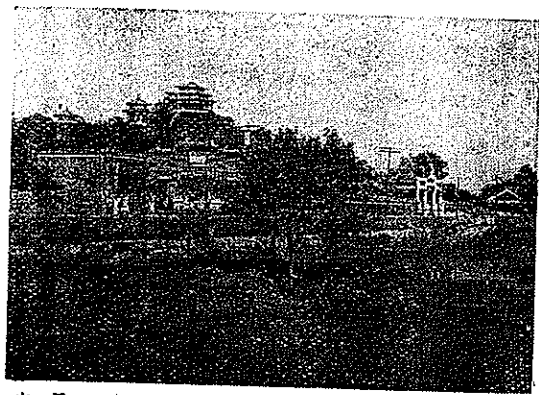
覺りて師を還し、土

木堡(八達嶺の西約

四〇哩)に陣した時

長蒙古軍の急襲を蒙つ

て大敗し、帝は亂軍



景山は紫禁城の北に築かれた人工の小山で、元、明に萬歲山と呼ばれて居り、マルコポーロの旅行記には「綠丘」の名を以て書かれて居るが、景山の名は清の世祖順治帝の勅

の中に捕へられた上に、次で十月には蒙古軍は帝を携へて北京を包圍してしまつたので、初冬の寒氣に西山からの石炭搬入が絶望となつた爲め城内の民心は極度に動搖した。當時京師の防備に任じたのは兵部尙書の子謙と云ふ人であつたが、之を聞いて一計を案じ、元の世祖は築城當初に今日あるを慮つて多量の石炭を景山の下に埋藏して置いたから、之を掘り出して用ふれば燃料の不安は無い趣を城内に流言せしめたところ、之が適中して城内の民心は急に沈靜したと云はれる。此の子謙の祠は東單牌樓の西棧胡同等にあるが、この時は實に北京は累卵の危殆に頻し一步を過れば明朝社稷の覆滅を見る處があつたが、幸に子謙の計宜しきを得て蒙古軍は間もなく圍を解いて退き北京の不安も解消したので、斯うした關係から煤山の名は特に有名になつたり、今でも正陽門内に木炭の埋めてあると云ふ傳説と共に、北京の故老の間には煤山炭海の名を以てよく知られて居る。

山の東麓に明思宗殉國之處として保存せられて居る老槐樹は明末崇禎帝の哀史を物語るものである。崇禎帝は崇烈帝、毅宗、哀宗、懷宗など、云ふ諡もあるが、思宗の諡は其の

崩後南京で即位した福王の追諡したものである。即ち明末の批政と連年の饑饉とによつて天下物情漸く騷然たるものがあつたのに加へ、滿洲に興起した清朝は勢を増して屢々中原への進出を試みつゝあつたが當時陝西省の北部に蜂起した流賊李自成は此の風雲に乗じて忽ち華北を蹂躪し、官軍の關外進出の虚を窺ふて居庸關を破り、崇禎十七年三月十七日には遂に北京に迫つて、德勝、西直、阜成、廣安の諸門外は賊軍充滿し、翌十八日には李自成自ら廣安門外に陣して其の指揮に任じたが、同日午後廣安門の守將が賊に内通して自ら門を開いた爲め、賊軍は潮の如く外城に侵入して



明思宗殉國處

放火掠奪を恣にしたのであつた。帝は之を聞いてこの山上に登つて見られると、

既に南城一帯は烽火天を焦して逃げ迷ふ住民の阿鼻叫喚の聲手に取る如く、凄慘名狀すべからざるを見て乾清宮に歸り、諸臣を集めて對策を問はれたけれども誰一人として應ふる者無かつたと云ふが、「朕非亡國之天子。臣皆亡國之臣也」とは實に當時天子の嘆聲であつた。茲に於て帝は最後を決心して皇后を坤寧宮に自盡せしめ、妃嬪數人を斬つて最後に芳紀十五歳の皇女をも亦親ら斬られたのであつたが、當時帝は右手に御劍を持ち左袖に龍顏を掩ひつゝ「汝何ぞ我家に生れたる！」と叫んで涙と共に一刀を下されたと云はれ實に想像するだに堪えざる人生の悲惨事である。斯うして帝は十九日の拂曉親ら鐘を鳴らして百官を召されたが、誰一人之に應ずる者無きを見て、遺詔を草して櫛に藏め、萬歲山に上つて帛を吊して自縊せられたのであつたが、之に隨つて節に殉じたのは僅かに太監王承恩一人のみであつた。此に於て成祖永樂帝の北京奠都以來、十五世二百二十四年にして明朝の社稷は此の樹下に亡び、北京は遂にこの一流賊の手に歸したのであつたが、當時百官の中には一死以て社稷に殉じた者も有つたけれども、又李自成の人城を迎へて頌徳表を捧げ、之を堯舜湯武に比した者多かつた

ことは注意すべき所である。この崇禎帝自縊の樹に就ては當時開花中であつた海棠の樹とも傳へられて居るが、其の後約五十日にして李自成を逐ふて北京に入つた清朝は、此の樹が天子を自縊せしめたと云ふので、之を鐵鏈を以て縛つて斷罪の義を示し後世に残したのであつたが、此の鐵鏈は北清事變に際し此の山を外國軍が占領する迄此の樹に残つて居たと謂ふ。此の邊には夏になると蠟子草が生じることが、北京の城内では此所と天壇の一部に見る位である。

山上の五亭は現在東より觀妙、周賞、萬春、富覽、輯芳の順序に額を掲げてあるが、之は古くは、欽定日下舊聞考や近くは光緒大清會典等を見ても、東から周賞、觀妙、萬春、輯芳、富覽の順序になるべきもので、此等は何れも乾隆十六年（皇紀二四一年）の建築で、もと各亭佛像を供してあつたが北清事變に際して殆んど持ち去られ、今僅かに中峰萬春亭内に一體を有して居るのみである。俗に此の上に五味神が祀つてあつたと傳へられるが、實は五方佛を供したものであると云はれる。

山の高さに就ては光緒大清會典事例に
景山。山周三里餘。爲峰五。中峰高十一丈六尺。左右峰各高七丈一尺。

又次左石峰各高四丈五尺。

とあり、明宮殿額名と云ふ書から欽定日下舊聞考に引用せられた

崇禎七年九月。置萬歲山。自山頂至山根。計五十二丈。折高二十四丈七尺

の一節や、春明夢餘録にある「萬歲山高一十四丈」等の數字と相當な開きがあるが、標高は中峰約九二米で山麓に於て約四五米である。

中峰の上に立つて俯瞰すれば紫禁城の黃臺眼下に連亘し、遠く外城の一帶までも展望出来て、北京の大觀悉く一眸の裡に聚り、人をして其の雄大なる景觀に一驚を吃せしむるものがある。因に現在北京の内城に於ては此の邊が略ぼ中央部になつて居る。

山後の一郭は壽皇殿で昔は清朝歴世帝后の御容を奉安した所であつた。此等の御容は其の筆致襍裝善美を盡したものであつたが、民國十八年故宮博物院と清室との間に所屬の問題が争はれ、遂に法廷に訴へて之を決した結果明に清朝の所有と判決せられたにも係らず、遂に故宮博物院に劫奪されてしまつたが、爾來此所の開放を中止して閉鎖した

西 苑(太液池)

紫禁城の西苑は即ち太液池で南、中、北の三海に分れて居る。此の中で北海は夙くから外人の遊覽を許されて居た所で、民國十四年には之を公園として開放したが、南海及び中海は其の境内に總統府を置かれて居た關係上、民國になつてからも長い間一般人の出入は禁じられて居たが、首都の南遷に因つて民國十八年から漸く開放せられる様になり、現在中南海公園として公開して居る。

民國以來斯うした禁苑や離宮等の開放せられたことは、一般の民衆には非常に大きな福音であつたが、就中この西苑の如きは何分にも城内に於て、斯うした善を盡し美を盡して天子の園苑として營まれた豪華な景色が見られる所から、都人は踵を接して之に遊ぶ様になり、然うした關係から從來民間の名勝として名を得て居た二關の如き、特に城外にあつた市民の遊覽地は、殆んど之を顧みられざる様になつて、急に凋落を招來してしまつたものが多かつた様である。

南 海 内六區府前街

繼にして居る。此の中には有名な婆羅勒と云ふ老樹があつて、本來波斯の産と云ふが俗に婆羅樹と稱して居るものがそれであると云はれ、殿裡の建築も立派なものを存して居る。殿東の觀德殿及び永思殿はもと帝后の靈柩を奉安した殯宮であつたが、清末には此所を用ひずして宮裡から直ちに東陵又は西陵に發引すると云ふ様な、祖制を紊る新例も行はれて居た様である。

尙ほ現在山前の大街になつて居る部分はもと景山の境内で、舊道は北上門の南を紫禁城の濠に沿つて通つて居り、北上門に連る東西の連房は有名な景山官學であつたが、此の關係から會て崇禎帝の穿たれた鞋を祭つてあつたと云ふ。景山門内の綺望樓には孔子の神位が祭られて居た。

大 高 殿 内六區西板橋大街

景山の西にある圓殿の一郭で正しくは大高元殿と言ふ。天子祈雨の靈場で門前の兩亭は鈎簷圓柄人巧を盡したものと稱せられ、明嘉靖年間(皇紀三二〇〇年頃)の建築で紫禁城四隅の角樓と共に我が國の天守閣に似た珍らしい建物である。

南海は新華門を正門として中央に激合を抱いた一郭で、北は蜈蚣橋を界として中海に連つて居る。

新華門はもとの寶月樓で乾隆二十二年(皇紀二四一八年)の創建である。傳説としては乾隆帝が其の寵妃であつた香妃の爲めに建てられたものと稱せられ、妃は此の樓に上つて門前近く長安街の彼方に立ち並ぶ回々營の風光を眺めて其の故里を偲びつ

中南海公園正面(新華門)

つ、其所に住む近親舊知等と相見えて居たと謂はれるが此の香妃を獲る爲めに行はれたと迄考へられる西域遠征は乾隆二十三年に將軍兆惠によつて始められて居るから、之は寧ろ此の門が香妃の爲めに利用せられたと見るべきものであらう。只最初三層に設計せられた



門樓を二層に改めて其の竣工を急いだ観はあるが、之に就て帝は御製の寶月樓記に於て、太修を覺えたが故に一層を減じた旨を説明して居られる。要するに此の門はかの武英殿に隣る浴徳堂と共に、乾隆帝と香妃との傳説を物語る大きな遺物であるが、當時皇帝から特に地を賜つて一衛を成して居た回々營の一衛は、今尚ほ其の名を改めずして此の前に存し、現在此所に住む回教徒は、幾戸かに過ぎないけれども、窮乏のどん底に喘ぎながらも勅建清真寺の舊址にある寺を中心として、新疆の故里とは昔ながらの關係を續けて居ると云ふ特殊な歴史と傳統とを有つ異つた存在であつたが、民國三十年に他に移轉することとなり長い歴史も漸く消滅せんとしてゐるのは惜しいことである。

新華門と相對して水中に浮ぶ瀛台は昔の南台で又瀛台とも稱せられ、明代に於て造營せられた所であつたが、清朝になつてから特に乾隆時代に重修が行はれて、屢々皇帝の御遊の場所に充てられたものの様で、正面に當る迎賓亭の中には御筆の聯や額が澤山に掲げられて居り、亭内の北側には乾隆十八年の御筆と跋をして、御製の詩に和した大學士訥親以下當時の名臣學士百七十六人の名を連ねた柏梁體

あつたが、同十四年の春には班禪喇嘛も此所に駐錫して居つたこともあつて、當時その爲めに此の島から東に木橋を架して喇嘛僧の出入に充てられて居た。

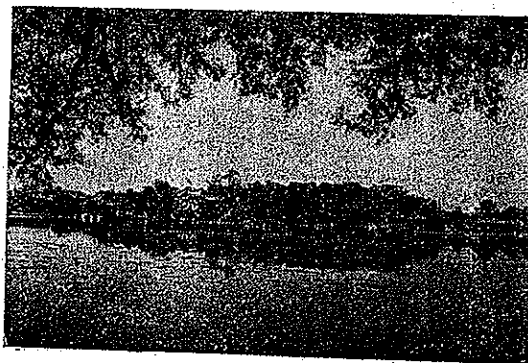
瀛台の東岸に水中に突出して建てられた小亭は初魚亭と稱し、兩側を小さな廻廊で連ねられて居る。此の亭の名は詩經大雅に見える「於初魚躍」の字句に出たものと思はれるから、天子觀魚の場所として造られたものであらう。

豐澤園は瀛台の北勤政殿の西に隣る一郭で、昔は天子此所に御して農業關係の儀式を行はせられた所であるが、又時に王公宗室を此所に宴せられたこともあつた。東方にある圓堂は大禮堂で、其の前には有名な崑崙石や人字柳の碑などが残つて居る。また此所を西に行けば靜谷の前を過ぎ、大圓鏡中の傍を北に廻ると卍字廊に出る様になつて居るが、之は昔圓明園の離宮に有つた萬方安和と共に卍形の水廊に係り、珍らしい形の建物で、又此所に近い月榭風亭の兩亭も頗る雅趣に富んだ建物である。

豐澤園から東して曲澗浮花の小門を潛ると流杯渠がある。かの雅びやかな流觴曲水の話事を偲ぶ舊址であるが、餘りにも形に捉はれて頗る窮屈な觀がある。亭内には乾隆

の詩を刻してあるが、蓋

し太平天子の下に文運隆盛を極めた佛を物語る珍らしいものであらう。事後には香辰殿、涵元殿の一郭があつて、翔鸞閣を正門として北方は木橋を以て豐澤園前に通つて居るが、光緒二十四年（明治三十一年）八月光緒皇帝は、變法自強の政策を實行せんとして戊戌政變の厄に遭ひ、西太后の爲め幽閉せられて萬壽山から此の中に遷され、遂に數奇を極めた其の晩年を御齡三十八歳を以て、光緒三十四年十一月十四日、王者の不遇を嘆じつゝ此所に崩ぜられたのであつたが、當時皇帝の用ひられた玉床は之を物語る人も無きまゝに、涵元殿の東室に昔のまゝ残されて居る。其の後民國四五年頃には副總統の黎元洪が一時此所に住んで居たことも



御筆の流水管の額が掲げられて居るが、斯うした流杯渠は現在香山と潭柘寺とに残つて居るのみで珍らしいものである。此の附近には千尺雪、日知閣、樂魚亭等があり、三海の水は此の東にある日知閣下の閘から流れ出て御河に注いで居り、日知閣の傍には大齊天統五年（皇紀一二二九年）の文字ある北齊佛が置かれて、好古家の注目を惹いて居る。

中 海 内六區文津街

太液池の正門として開かれた西苑門を入つた一帯は中海で、南は蜈蚣橋を界として南海に連り、北は金鷄玉蝸橋を中にして北海に通じて居るが、北京八景の一に擧げられて居る太液秋風は實に此所に見られる絶景である。

西苑門を入つた北に在る萬善殿は明代の建築で、昔は宮中で宦官の出家した者共を此所に置いて勤行せしめたと傳へられ、殿内の佛像が明時代の物と謂はれるが、殿後の千聖殿は斯うしたお寺には珍らしい圓殿で、中には紫檀の彫刻と稱せられる千佛塔がある。又兩殿の佛具には一開張の物が多く用ひられて居ること等も、他に例の少い所であらう。昔は此所で中元節に盛大な燈籠流しが舉行せられたと

を数千個作つて兩岸に浮べたと謂ふが、又端午節の龍船や七夕の針供養等も此所で行はれて居たこともある。かの福華門内にある時應宮は元來龍王を奉祀した所であるが、民國以來其の龍王像は悉く此所に移されて居たのを、最近西の一郭を龍神祠として改修し其所に奉祀した。此の一帶は明時代に蕉園又は椒園等と稱した所で、萬善殿はもと崇智殿と稱したのを、清初順治年間の改稱である。此所は民國二十五年に開放せられた所で、從來西洋人の間に於て比較的名だつた場所である。

萬善殿西方の水中にある小亭は水雲榭で、中には乾隆御筆に係る太液秋風の御碑が立て、ある。太液秋風は太液晴波とも稱し、古くから北京八景の一に數へられて居るが、他の八景の御碑が何れも縦書であるのに對して、之のみが横に書かれて居るのは特例である。この太液秋風の大觀は、既述の通り秋の日の午後、勤政殿裏の小亭の邊から此の水雲榭を望むところに於て、其の極致を盡せるかの觀がある。初秋の涼風をよるに水面を吹いて、蓮の葉の軽くさやぐところ、朱牆を蔭にして楊柳の翠り低く池畔に枝垂る、中に、隱見する景山瓊島の姿を遙かに仰ぐ絶景は、實に八

に停めて内外人の弔訪を受けた。

懷仁堂の北にある紫光閣は明時代に平台とも稱せられ、武進士の試験や武將謁見等の場所に充てられた所であるが、清朝になつてからも此所では侍衛大臣を集めて弓箭を試みしめたり、武進士を試閲したり、軍功顯著なる將軍や外藩を宴したり屬邦の使臣を引見したりする場所に用ひられて居た。乾隆の時には五十功臣の像を描かしめて之に御製の贊と序文とを賜つたが、之は漢武帝の雲台二十八將や唐太宗の凌烟閣二十四將の故事に仿したもので、光緒十二年にも功臣四十八人を描かしめられたことがあつた。同治十二年（明治六年）六月穆宗皇帝は此所に御して各國大公使に謁見の禮を行ひ國書を捧呈したのであつたが、當時第一に單獨謁見の榮を得たのは實に我が副島大使で、兎もすれば從來藩屬同様に見られ勝ちであつた日本の使節が、此の殊遇を得たのには人々皆驚いたとの事で、之は乾隆五十八年に英國使節マカートニー卿が熱河に謁を賜ふてから、實に八十年目に於ける外臣の謁見で、而も外國使臣は此の時に始めて對等國の使節として取扱はれたのであつた。

此所を北に行くと中海北門の福華門に出るが門西に天子

景中の白眉たるを失はない。

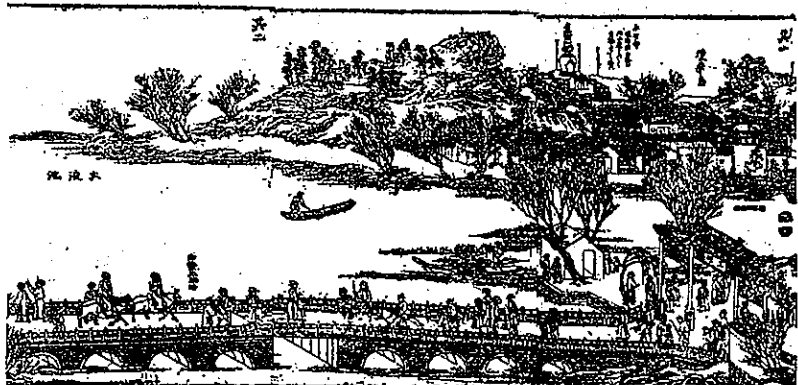
勤政殿の裏を北に進むと居仁堂、懷仁堂、紫光閣等が相次いで列んで居る。居仁堂はもと海晏樓で正門を寶華門とし西太后の所建に係り、堂前に十二支の動物を配置して噴水に擬した所は、圓明園の海晏堂の制を模したもの、様で、當時此所に婦人客を招待するに用ひられたと謂ふが、民國になつてから居仁堂と改め、袁世凱は此所を應接所に充用し、爾後の大總統は家眷を住はして居たこともあつた様であるが、民國十四年から開かれた關稅會議には此所がその議場に充てられて居た。

居仁堂の北に懷仁堂がある。寶光門内の景福門を正門とし、福昌殿、延慶樓、福祿居、延壽齋等が其の後方に連つて宏大なる一郭を爲して居る。此所はもと光緒十四年に西太后の別宮として造營せられた儀慶殿の舊址で、舊殿は北清事變の際獨逸軍の司令部となつて居た時に燒失したので、其の後洋式に再建せられたのが現在の建物であるが、當時投せられた費用は實に五百萬兩に上つたと謂はれて居る。民國になつてから懷仁堂の名に改め大總統の正堂として用ひられて居たが、袁世凱の死んだ時は其の靈柩を此所

祈雨の場所であつた時應宮の舊址がある。西太后の末年には北海の西岸から此の邊に輕便鐵道が敷設せられて居たこともあつたが、今一つ面白いのは中南海の境内に楡の樹が殆んど無いことで、之は光緒九年に其の樹に生じた毛虫が西太后を齧したと云ふので、悉く此の樹を伐り盡させられたと云ふことが翁同龢の日記に見えて居る。

北 海 内六區三座門大街

太液池の北部は金鯉玉蟬橋を以て界せられて北海となり、瓊華島の白塔山が大きな喇嘛塔を戴いて其の中に聳えて居る。此の邊は遼金の時代から盛んに離宮が造營せられたもの、如く、遼の蕭太后の梳粧台や、金の李宸妃の粧台、京北の離宮大寧宮から寧壽・壽安の兩宮等に關する傳説や記録等も相當に残つて居るが、元になつては此の山は萬壽山と稱し、山上には廣寒殿が建てられて、南に近い儀天殿と橋を以て通ねられたと云ふけれども、后妃の粧台の設けられたことは遼金と相似たもの、様である。明の時代にこの山は萬歲山とも呼ばれたが、清朝になると山上に喇嘛塔が建立せられると共に山下には永安寺が建てられ更に乾隆に及んで山後の重修を行つて其の面目を一新し、東北隅に



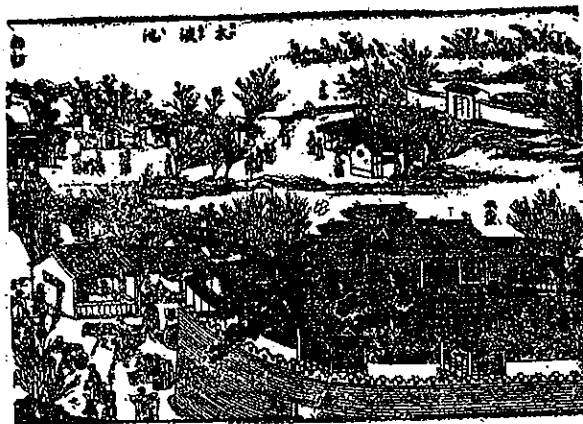
同承前

白塔山四面記を刻した大碑が立つて居るが、白塔山總記が滿漢蒙藏の四種文字を以て書かれてあるのは、永安寺が喇嘛關係の寺であつたのに因るものである。それからこの邊から山後に亘つて澤山に用ひられて居る怪岩奇石は、もと宋の良嶽に置かれて居たのであるが、此等は金が靖康元年（皇紀一七八六年）に汴京を陥れた時に、此等

の岩石を一輪車に載せて今の開封から北京に移したものと傳へられて居る。山上の大喇嘛塔は清朝の北京奠都後間も無い順治八年（皇紀二二二一年）の創建で、之は諸木汗と云ふ喇嘛僧の請に依つて建てられたものであるが、塔前の善因殿に大威徳天の像を安置したことに就ては、當時まだ南方に残つて居た明朝の遺孽を徹底的に討伐する大決心を示したものと謂はれて居て、この大威徳天は不空譯の儀軌に據ると清朝に縁りの深い滿殊室利即ち文殊菩薩の忿怒身となつて居



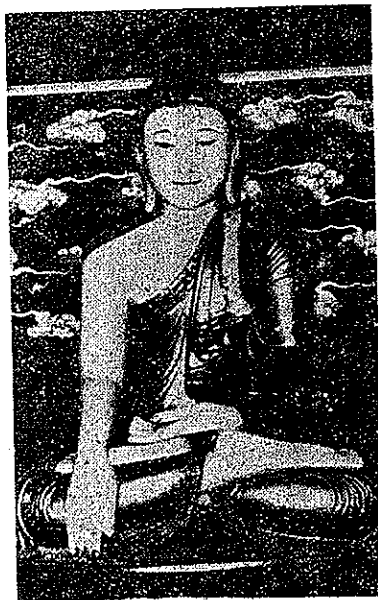
北海公園の白塔と推贊橋



清朝時代の北海（王府名勝園會）

せられる様になり、民國十四年秋遂に北海公園として開かれたのであつた。瓊華島は其の土を遠く塞外から運んで築いたとの説もあるが、實は三海を掘つた土を積み累ねたもので、之は乾隆帝も其の御製古井記に

於て然うした斷定を下して居られる所である。大體に於て現在の公園境内は池面約一五萬坪、陸地約一四萬坪で、この島の面積は約二萬坪を算する様である。公園の正門になつて居る承光左門を入つて、堆雲、積翠の兩牌樓に挿まれた永安橋を渡ると永安寺の山門に達するが、此の門前にある石獅が北欄になつて居るのは注意すべき所である。此所は袁世凱の帝制當時に皇太子の宮殿に豫定せられた所で、それがため法輪殿内の佛像なども長い間他に搬出されて居たが、公園開放當時漸く舊態に復せられた。殿後の石階を登れば東西に乾隆御製の白塔山總記と、



園城の玉佛

山後に降る路には岩洞による個所もあつて一段の趣を添へて居るが、其の盡きる所に瀟瀟堂があり此所を中心として東西に通貫する廻廊の丹碧相和して白石の欄杆と共に水面に映ずるところは、宛然龍宮をでも聯想せしむるものがあつて、水面から之を望むと萬壽山の縮圖の觀があると稱せられる。山の東北麓には乾隆御筆の瓊島春陰の碑が立つて居るが、之は古くから北京八景の一に擧げられて居る絶景で、本來この山の花曇りを賞したものである。また碑前に並んだ彫龍の水盤は元時代の物の様である。

西麓廻廊の端に近い閼古樓の中には、乾隆御定の三希堂法帖三十二卷の石刻を鏤めてあつて、之は全數百九十五方と算せられ今尚ほ完全に存して居るが、門を鎖して縦斷を禁じてある。此の外島内には悅心殿・靜憩軒・承露仙の銅像等があり、瀟瀟堂を對岸に渡れば大西天・小西天・闍福寺等の喇嘛廟がある。何れも乾隆年間建築で荒廢の中に天王殿の四大金剛や、大慈眞如殿の銅佛・銅塔・木塔等見るべきものが多く、大慈眞如殿の建物は其の後方の十佛塔や琉璃閣と共に特色を存する建築である。

小西天の西に有名な九龍壁がある。今の公共體育場にな

つて居る所に、もと大圓鏡智寶蓋があり、其の後方の建物内に滿漢藏蒙四種の大藏經々板を藏し、之を大西天經廠と稱し其の門を眞諦門と云つて居たが、此の九龍壁は實に其の眞諦門の影壁として營まれたもので、其の時代に關しては或は明代と云ひ或は遼代なども稱せられるけれども、其の手法色彩等に就て考へると、何うしても乾隆年代の物とせざるを得ない様に思はれる。此の種のもので故宮皇極門前にあるものに比すれば此所の物が見事であるが、而も之を大同東大街に有る明代の物と較べると、其の規模に於て時代色に於て遙かに遜色のあるのを如何ともし難い。

西の方にある大西天前の五龍亭は明の大素殿の舊址で、東より滋香・澄祥・龍澤・湧瑞・浮翠の五亭相連り、清初には孝莊皇太后の避暑場に充てられたと云ふが、乾隆時代に至つては龍澤亭を皇帝の釣魚場に充て、扈從の群臣は兩側の四亭に鈎を垂れたと云ふ話が残つて居る。また亭北の闍福寺はもと先蚕壇の廟館であつたのを後に喇嘛廟に改建したもので、九龍壁の前にある料理店仿膳は、宣統帝出宮後生活の途を失つた御膳房の料理人等が、資本を出し合つて民國十四年八月開業したもので、宮中の料理に類する物

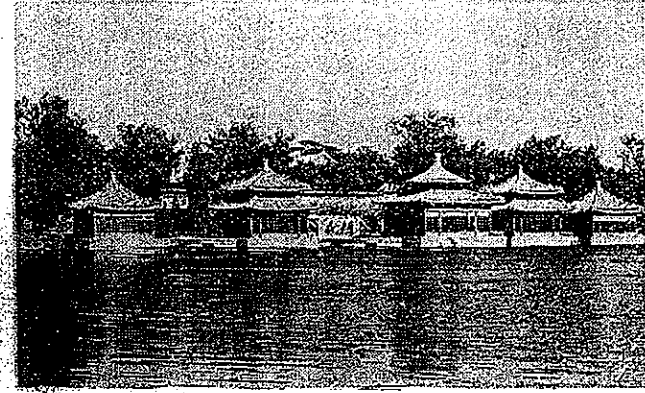


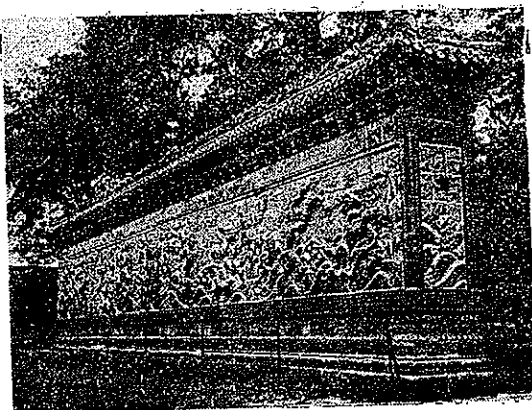
同承前

る。
高士奇の金鰲退食筆記に見ると、此の塔が建立後約三十年を経た康熙十八年（皇紀二三三九年）に、地震の爲めに破壊したので翌年之を修復したことが記されて居るが、當時北京附近は連年地震の襲來に兢々として居たものゝ様で、聖祖康熙帝が大臣を率ひて天壇に祈禱して地變の息災を願はれたのはこの年の九月で

あつたが、通州で燃燈佛舍利寶塔に大破を生じたり、鼓樓が倒壊したりしたのもこの年であつた。
塔後に立てられた五本の木杆は緊急を報ずる燈杆で、此所には各城門と共に五門の大砲を設け、急あるときは之を放ちて各門をして之に應ぜしめ、晝は杆頭に旗を掲げ夜は燈を掲げることになつて居て、之を白塔の信礮と稱し、歩軍統領の管理に屬して居つた。これは順治十年の定制であつたが、此の燈光は西郊監製廠の火器營や香山の健銳營からも望まれたと云ふ。

北海公園五認亭





列所として開放して居る。

園 城 内六區三座門大街

金鑿玉煉橋の東にある崇台は即ち圓城で俗に圓城と呼ばれ、上に承光殿が建てられて居る關係から、台の東に設けられた北海の正門も承光左門と稱せられて居る。

が食べられると云ふので有名である。公園裏門の中に先蚕壇の一郭がある。乾隆七年の創建に係り皇后親ら先蚕の神を祀られた所であるが、現在此の中には先蚕壇・觀桑台・親蚕殿・浴蚕池・蚕室・浴蚕河等が殆んど昔のまゝに存し、最近之を利用して國貨陳

此所は元時代の儀天殿の舊址で、明時代には元の舊に模した圓殿が立つて居たものゝ様であるが、清の初頃には既に荒廢に歸して居たらしい。現在の建物は乾隆年間の再建に係るもので、境内には松柏の繁茂し合つて居る中に、數百年を経た古栢と老松とが特に人目を引いて見えるが、此所で特に見るべきものは承光殿内の玉佛と、殿前の小亭に置かれた玉甕とである。

殿内には乾隆御筆の額を始めとして咸豐帝や西太後の御筆に成る聯や額が澤山に掲げられて居るが、其の中央正面に有名な玉佛が安置されて居る。これは高さ五尺ばかりの坐像で、其の作を見ると緬甸佛で用材は純白の臘石類の石である。傳へられる所に據ると光緒二十四年（明治三十一年）に、西直門内玉佛寺の僧人明寬と云ふ者が緬甸から運んで來たものを宮中に獻上したので、西太后は命じて此所に安置せしめられたと云ふから、時代的に考へてもまだ新しいものであらう。現在殿内には唐時代の明器類を主として古い土器類を陳列してある。玉甕は元代の作で青玉製の立派な物である。元史の『世祖本紀』に據ると、至元二年（皇紀一九二五年）十二月、漢山太玉海成、勅置儀案

名勝遺蹟

殿。」とあるが、この廣寒殿は今の北海白塔山上に建てられて居たのであつた。然るに其の後轉々として所在を變じたものゝ様で、清の初め頃には西華門外の眞武廟内に移され、道士等が之を漬物鉢に利用して居たのを、乾隆の時に千金を以て買ひ取り、承光殿の前に小亭を造つて其の中に置かれたのであつたが、此の玉甕に關しては元末に編纂された『輟耕錄』にも「黒玉甕一。玉有白章。隨其形刻。爲魚獸出沒於波濤之狀。大可貯酒三十餘石云々。」とある。甕の内面には乾隆御筆玉甕歌や御製の詩文が刻してあり、四圍の亭柱にも當時の詩文が刻せられてある。

此の承光殿は光緒十八年に外國使臣の謁見場に充てられたことがあつたが、民國二年憲法制定に關して議會と衝突した袁世凱は十一月四日國民黨解散のクーデターを行つた後、此所に政治會議を召集し議長に李經羲を任命して救國の大計、約法の増修、祭天祀孔の禮式、謚法の核定、内債外債の整理等に就て議せしめたことがあつた。所謂圓城會議と稱せられるもので、この會議は翌年五月下旬參政院の成立まで繼續せられたのであつたが、袁世凱の帝制は既に當時其の第一歩を踏み出したかの觀がある。

太 廟 内六區東三座門大街

天安門の東方にある鬱蒼たる老栢の森に包まれた一郭は太廟の聖域である。即ち最近まで清國皇室の宗廟として歷代皇帝の親祭を行はれた場所であつたが、太廟の名は天子の祖廟の意味で、蓋し太祖の廟とでも謂ふべき字義である。これを設くべき場所に就ては禮記の祭儀に「建國之神位。右社稷。而左宗廟。」とある通り、支那の古制として宮闕の左方に建てることになつて居たもので、此の太廟が紫禁城前の左方に、社稷壇を右にして相對した位置に置かれて居るのも、實に斯うした古制に據つて設けられた爲めである。

今の北京に始めて都した元も恁うした關係から、朝陽門内に地を相して太廟を設けたのであつたが、其の位置は東四牌樓の東にある大慈延福宮を南の入口とする一郭であつたと傳へられて居る。其の後元に代つた明が北京に遷都した時に、現在の場所に新たに太廟の造營を行つたのであつたが、これは大體に於て南京の舊廟の制に據つたものであつたと云ふ。然るに其の後數代を経て嘉靖十一年（皇紀

二一九二年) になると、朝臣等の議を容れ従來の制を改めて、太祖の廟を中心とする九廟の様式に改建せられたけれども、竣工後數年にして燒失したので、又舊制に復して再建し同二十四年七月に完成したものが即ち現在の建物であるが、此所には崇禎十七年(皇紀二三三四年)の夏まで明朝の帝后と功王功臣の神位を奉祀されて居たのであつた。

崇禎十七年三月北京は李自成によつて一時占領せられ、皇帝は萬歲山(景山)麓に自縊せられた時に、李自成は自ら帝位に登つて國を大傾と號し改元して永昌と稱したけれども、時恰も兵馬倉皇の際として太廟に就ては別に顧みる暇も無かつた様であつたが、同年五月清の攝政王多爾袞が師を率ひて李自成を逐ひ、北京に入城して順治の正朔が奉じられる様になると、七月には攝政王は使を遣はして明の太祖以下の諸帝を此所に祭らしめ社稷の交替と清朝の北京遷都とを告げて、翌日其の神位を歷代帝王廟に奉遷し、更に越えて九月幼帝世祖の北京入城と共に、太祖太宗二朝の帝后の神位を此所に奉安し、茲に於て太廟は全く其の主を替へてしまつたのであつたが、李自成の北京敗退に方り

紫禁城の中にある大きな宮殿の多くが燒かれてしまつた中に、此の太廟のみは幸にして兵火を免れて完全に残つたのであつた。

斯うして清朝に引き繼がれた太廟は順治五年(皇紀三三〇八年)に大修繕が行はれ、更に其の後も屢々重修が加へられたけれども、其の建物は専ら明代の舊を襲用したもので、現在前殿に用ひられて居る三十四本の楠木大圓柱の如きは、明の十三陵にある長陵後恩殿のものと共に、實に明代建築の一大偉觀である。

粉壁の大外牆に圍まれた境内は廣さ約五萬坪と稱せられ、本來天安門内の太廟街門を正門とするものであるが、現在中央公園の正門と相對して天安門の東と南池子の西とに入口を設けてある。此所を入ると柏樹の密林の中に更に複郭に包まれた祭場があつて、其の中には前・中・後の三殿と東西の兩廡とが立ち並んで居るが、この三殿は専ら帝后の祭祀を行つた所で、兩廡には東に功王西に功臣の神位が祭られて居たのであつた。

前殿は太廟の正殿で三層塔壇の上に建てられ、間口十一楹約七〇米、奥行四楹約三〇米、重檐四柱造の大建構で、かの太和殿と共に北京に於ける

木造建物の首位を占めるものであつて、特に内部に立ち並ぶ大圓柱は直径約一・一米、高さ一〇米の大楠木で、中央部の三楹を覆ふ金色燦然たる漆井と共に、見る者をして其の偉觀に驚かしむるものがあるが、茲に注意すべきは圓柱下際に穿たれたる小孔の外面に開いて居ることで、斯うした手法は明の十三陵と此所とに見られる特例の様である。此の前殿は祭時帝后

ある「祭如在。祭神如神在。」の字句の如きも、この形式を以て考へる必要もあるかと思はれる。それから殿内圓柱の傍には必ず香爐を置いてあるが、これは犧牲の臭氣を消し紛らはす爲めに特に多量の香を用いた關係に因るもの様で、この犧牲は神案前に置いてある俎に盛られて太宰が用ひられて居た。

の神位を中殿から遷遷し天子親ら北面して之を祭られた所で、中央正面には太祖高皇帝及び同皇后の神案が設けられ、之を中心として十一代に亘る清朝歷世帝后の神案は昭穆の順序を正して陳設せられて居る。即ち中央太祖から東に向つては太宗、聖祖(康熙帝)、高宗(乾隆帝)、宣宗(道光帝)、穆宗(同治帝)となり、西に向つては世祖(順治帝)、世宗(雍正帝)、仁宗(嘉慶帝)、文宗(咸豐帝)、德宗(光緒帝)の順になつて居て、一帝一案の制で、神案に設けられた神座の椅子の数は皇后の人数に因つて之を異にして居るのである。そして各神案に於ける神座の配置は中央に近い方を上位として之を皇帝の神座となし、他を皇后の神座に充てて居るが、數位の皇后がある時には其の原配を高位に據え、以下順を追つて其の神座を定めてあつて、神座の背背や鋪墊、帝座には龍の文様后座には鳳が用ひられて居る。祭時に於ては各帝后の神位を中殿より此所に遷遷し、神座上台座に安置して前方の神案上に供物を陳べたのであるが、此の時は特に神位を神座の上に宛らしめたもので、此の例は他の遷祀に於ても用ひられた所があるが、要するに神位其の物を生人同様に取り扱つて居たことは、後述中殿に於ける其の扱ひ方と共に注意すべき點で、これは古の尸を用ひる祭法や乃至はアニミズムを以て説明出来ること、思ふが、論語に

中殿は所謂後殿で平案神位を奉安して置く所である。間口九楹六四米餘、奥行四楹約二〇米の低い建物であるが、殿内は太祖の神案を安置した一室を中央に、東西の四室は各室を兩分して十六夾室となし、一夾室毎に一帝一の帝后の神位を奉安してあつて、其の順序は前殿神案の順序と同様であるが、各夾室共皇帝の神位を中央に置いてある點が異つて居る。之は元來一帝一室の制であつたのを、光緒四年に現制に改められたものであると云ふ。各神案は黄綬の帳を垂れ覆ふた中に黄色の褥を設けて支那式の牀が作られ、帝后の神位は此の褥上に安置されて居たもので、即ち寢宮其のまの様式になつて居るのは面白い點である。此所に奉安せられて居た神位は幅約一〇楹、高さ約三〇楹の金絲楠木製のもので、立派な金地に瀟灑兩體の藍字を以て、匾額を刻してあつたと云ふが、民國二十一年の開放に先ち故宮博物院に持ち去られてしまつたのは惜しいことであつた。

後殿は即ち後殿であるが清朝に於ては之に太祖遷國以前に死没した四世の祖と其の配とを祀つて居た。即ち聖祖、興祖、景祖、顯祖と追諡せられた人々で、清朝聖祖親覺羅氏の歴史は此の四祖以前に溯ると、神話乃至は傳説的なものになつてしまふ様で、此等は興京の永陵に合葬されて居る人達である。内部の陳設は前殿と中殿とを合併した様式になつて居て、犧牲の

先ち故宮博物院に持ち去られてしまつたのは惜しいことであつた。

大半が省かれて居る關係上廻が設けられて居ない。

前殿の東西兩廡に配享せられたのは功王功臣各十三人宛で、東側の功王の中に王妃を合祀せられた者が三人あつたのと、西側の功臣の殆んど全部が滿洲八旗の人々であつた中に、華古人の傅格林沁と漢人の張廷玉が配享せられて居たのは異例であつた。張廷玉は雍正帝の遺詔によつて特に配享を蒙つたものであり、傅格林沁は清末に驍勇を以て知られた傅親王で、張鑾の亂に偉功を立て次で英佛聯合軍の精銳を迎へて連戦し、更に捻匪を追跡して山東に入り甯州附近で壯烈なる戦死を遂げた人であつたが、功臣の太廟配享はこの人を以て最後とした。

太廟の祭祀は即ち大祀の一で、之には定期に行はれる四季五月の時祭と歳祭に行はれる大祀との外に臨時に行はれる告祭及び禘祭等があつた。時祭は即ち古の時祀で春は正月の吉日を選び、夏秋冬には各々五月(四、七、十月)の朔を用ひるのを例としたが、この時には中殿の神位を前殿に奉遷し後殿の神位は前方の神座に出して祭つたのである。又歳祭の大祀と臨時の禘祭には後殿中殿の神位を前殿に奉遷し、祭壇厚皇帝及同皇后を中心として昭穆を正して行つたものである。供獻は四季を通じて大體に於て同様であつたが、只酒食だけは各季に應じて異つた物が用ひられて居た。東廡の手前に建てられた琉璃燈籠は乾隆年間の新修であつたが、之は北都の壇廟にある燈籠中の出色のもので、後殿東方に設けられた珍しい形の燈籠と共に、太廟に特色を添へて居る。また柏林の東南隅の一部は今故殿院と稱して、魁ヶ賢等の如き沙禽類の候鳥の毎年春から初秋にかけて菓ふ所となつて居るが、此所は古くから鶴園と稱せられて、もと所謂太廟の

蹟 舊 勝 名

んど其のままに殘つて居るが、これは上層約一六米(五二尺六寸)、中層約一六米八(五五尺六寸)、下層約一七米八(五八尺八寸)を算する三層の正方形壇で、壇の上面に土を盛つた所はこの壇のみに見る特例で、其の土が中央及び四方に從つて各其の色を異にして居るのも亦この壇の特徴である。之は支那に於て古くから行はれて居る五行説に據つて、其の方色を中央と四方とに配したもので即ち黃を中央として東を青、西を白、南を赤、北を黒とし、周圍の牆の色も之に從つて四色を用ひてあるが、この五行説は實にかの陰陽説と共に、漢民族思想の經緯をなすもので、殊に漢時代からは宇宙の凡ゆる物質は素より、神佛、人事に至るまでも之を以て説明せんとしたものであつたが、今試み



社稷壇

に之を數例に配當して見ると、右の様なものがあるが、茲に注意すべきは中央に黄色を配したことで、之は千字文の劈頭に連ねた天地支黃の思想と共に、漢民族が古くから黃土の地帯に居住して居たことを物語る資料と思はれるが、斯うした關係から天子は中央に都して四方に君臨するの意義によつて、黄色

(社稷壇名土唐) 社稷壇



神鶏を飼養した所である。傳へられる所に據ると、この神鶏には黃鸞鶏と候鶴の兩種があつて、黃鸞鶏と稱したのは毎年黃鸞節に黒龍江省から獻貢した鶏であつたが、之を太廟に飼養した爲め自ら候鶴も此所に來て巢ふ様になつたけれども同治以來この黃鸞の制が廢れてしまつてからは、候鶴のみが僅かに今尚ほ殘存を續けて居るのであると云ふ。

中央公園

内六區西三座門大街

中央公園は民國三年に社稷壇の舊址を開放して設けられたもので、これが實に北京に於ける公園開設の濫觴であつた。本來天安門内に開かれた社稷衙門を其の正門としたのであつたが、開設當時に今の南門が公園正門として開かれ、又之と共に東北及び北の兩門も設けられて出入に便して居る。

廣袤約六萬七千坪と算せられる境内に植ゑられた古柏の數は約一千本と稱せられ、此等の中には周圍五六米に及ぶものさへあつて、斯うした老樹は特に南の方に多く見られるが、傳へらるゝ所によるとこの邊は元時代に於ける寺廟の舊址で、此等は其の當時植ゑられた古柏の殘存するものであると言はれてゐる。

園内中央に設けられた複郭の中央部に、舊の社稷壇が

を以て天子の色となして人民の使用を禁止し、天子の御衣に黄色を用ひ宗室（皇族）には黄帯を用ひしめたのであつたが、また紫禁城の瓦に黄琉璃の物を用ひて居るのも之に因り、更に我國にも影響して畏くも黄城築の御衣が制定せられて居るのである。

昔此所に祭られた社稷と云ふのは即ち土の神たる社と、五穀の神たる稷との意であるが、稷は「キビ」又は「タカキビ」即ち高粱のことで、之は漢民族の間に於て最も早く栽培せられたものであり、又最も多くの人々の常食に充てられて居た關係上、之を百穀の長とし轉じて五穀の神と崇めて社と共に祭つたものであるが、特にこの兩神を相並べて天子諸侯の重要なる祭祀として扱つたのは、國家が土穀に依存して人民を養ふの意に出たものであらう。そして之を祭る場所に關しては、支那の古禮に「建國之神位。右社稷。而左宗廟」とある通り、王城の右側に其の祭壇を設けるのが古來の定制で、現在の社稷壇も之に據つて、明初北京京都に際して、かの太廟と相對して此所に造營せられたものである。

この祭祀は毎年春秋の兩期に於て行はれたもので、即ち曆に定められて居る社日と云ふのが其の祭日である。そしてこの兩神の神位としては社には石材製のものが用ひられ、稷には木材製のものが使用せられたのであつたが、兩神位は何れも北嚮にして社の神位を東に稷の神位を西に安置し、之に東側に向土句龍氏の神位を配し、西側に后稷氏の神位を配して之を祭つたものであつたが、祭祀に際しては此等の神位の上を鳥の飛ぶのを忌ん

で、其の警戒の爲めに壇の左右に長い棒を持つた衛士が居て、飛禽を追ひ掃ふのを例として居たことも他の壇廟祭祀に見られないことであつた。

壇北の兩殿は北の方のものが戟門で南の方のものが拜殿である。即ち祭祀に方つて降雨を見る時は、天子は拜殿に立ち南嚮して遙かに壇上の神位を拜せられる例であつたが、北の戟門には大小七十二本の戟が立てられて居た。現在拜殿には新民堂の額が掲げられて居り、戟門は通俗圖書館として利用せられて居る。



それから正門内に聳えて居る公理戰勝の大牌樓は、北清事變の時暴兵の毒手に燈られた、獨逸公使フオン・ケツトレル男爵の遭難に對して、清國皇帝は遺憾の意を表すると云ふ意味の字句を刻して、其の遭難地點たる今の東

蹟 舊 勝 名

單牌樓新開路の西口に近い大街に建てられて居たもので、所謂國辱謝罪の紀念門として俗に石頭牌樓と稱し、心ある支那人をして髮蹙く能はざらしめた建物であつたが、天正七年十一月前世界大戰に於て休戦が提議せられると、當時北京に駐屯して居た佛國兵の爲めに倒壊を企てられたので、遂に支那側に於て之を取り拂ひ翌春戰勝紀念門として、此所に移し建てたものである。

鼓樓及び鐘樓 内五區鼓樓大街

鼓樓及鐘樓は地安門の北にある。この邊はもと中心臺と稱し、元の大都時代に於ける都城の中心地であつた關係上此の兩樓も亦此所に設けられたのであつたが、當時鐘樓の西方に在つた鼓樓を後に南方に遷して現在の配置にしたものである。此等は平時に在つては夜間市中に時刻を報じ、非常時に於ては城外への警報臺となつて居たもので、何れも歩軍統領の管理に屬し、民國十年頃迄はこの鐘鼓の響きが聞かれたのであつた。現在の鼓樓は清初に大修繕を行つたもので樓址は長さ約五〇米、幅約三四米で、高さは約三〇米即ち城壁の高さの約三倍に當り、もと齊政樓と稱し、



樓 鼓 樓 鐘

最近では明恥樓、齊政樓などと時々その名を改められたが、事變前迄樓上には支那の所謂國恥に關する資料が陳列公開されて居た。

鐘樓は乾隆初年の重建で鼓樓に比し規模は小さいけれども雅致に富んだ建物である。此所に懸けられた鐘は鑄匠の娘の鑿鐘として小泉八雲の小説にも書かれた有名なもので、この傳説にまつはる鑿鐘娘々廟は樓西の胡同中に殘つて居た。なほ鼓樓の後方には鐘樓にあるものと略同じ大きさの

鐘が放置されて居る。

國子監及び孔子廟 内三區成賢街

國子監は即ち國子學で、周時代に於て公卿太夫の子弟は其の父兄が爵を有して國に列する所から之を國子と稱し、王子と共に太學に入らしめる例であつたと謂ふが、晋の時にこの古制によつて國子學を興して官品第五以上の人の子弟を之に入らしむることにしたのであつた。爾來この名稱は時に中書學と稱し、時に國子寺と稱したこともあつたが、隋の時に之を國子監と改めてからは歴代概ね之に従ひ、時には國子學の舊名を用ひ、或は回々國子監の併置や、北京及南京の兩京に此の併置を見たことも有つたけれども、清に入つてからは之を京師に一個所だけ設けて國家最高の學府とし、天下の國子を此所に收容して教育したのであつた。

太學の門額を掲げた正門の東掖門を入ると立派な琉璃牌樓が立つて居て、表に闡橋教澤、裏に學海節觀の文字があるが、この北に建てられた辟雍は周代天子の學舎を仿したもので、周圍に水を雍した圓池を繞らして其の形が壁に似た所から斯く名づけられたもの、様であるが、今の建物は

然うした周代の古制を考へて、乾隆五十年（皇紀二四四五年）に建築せられたもので、圓水の直徑十九丈二尺、辟雍の廣さ方五丈三尺と稱せられ、中に設けられた寶座は當時皇帝親臨して學を講ぜられた時の物である。

辟雍後方の彝倫堂には正面の壁面に康熙帝御筆の大學章句を刻してあるが、もとは此の前に寶座を設けて皇帝臨御に際して南面の正位とし、其の東方を今の大學總長に該當する國子監祭酒の席に充てたのであつた。又入口の東方に設けられた小室は天子の更衣に用ひられた所で、前後の兩室を有して居るが其の構造はまことに粗末なものである。

堂内には清朝歴代皇帝の御筆に成る額を掲げてあり、北側の左右には御製の詩文を刻した澤山の碑が立つて居る。元來此所は國子監の大講堂として造られた所であるが、清末には月に一二回學生を集めて作文を課する場所として用ひられて居たと傳へられる。堂前月台の東に残る日晷は北京に在るこの種の一番古いものと謂はれ月台下の西には元の國子監祭酒許衡の植えた云ふ槐樹がある。傳へられる所に據ると久しく枯れて居た昔の株から、乾隆十六年皇太后の萬壽節に際して俄かに芽を出したとのことで、帝は之



成大成殿孔子廟

を吉祥として御製の詩を作られて居る。

兩側の廻廊は東方が率性・誠心・崇志の三堂で、西方が修道・正義・廣業の三堂になつて居て、各堂内に建てられた碑は即ち有名な清の石經である。雍正年間江蘇省金壇縣の

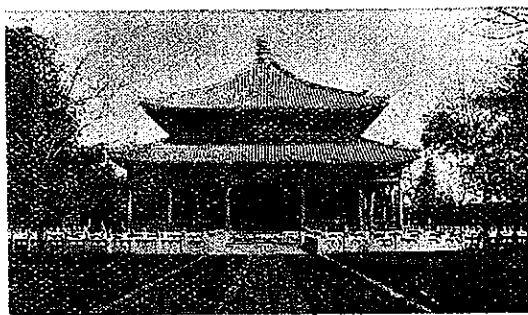
名勝舊蹟

學生員蔣衡字湘帆なる者が書を善くし、志を立て、十三經を手寫し十二年を閲して完成したがこの字數實に八十餘萬に及ぶと云ふ。乾隆五年（皇紀二四〇〇年）に之を上つたので、同五十六年に至つて勅して石に刻して太學に立てしめ、之を墨拓して各省に頒たれたと傳へられ、この碑實に一百九十基に及んで居る、石經は東漢以來時々其の剝刻を見

たが、今完存するものは西安の碑林に残つて居る唐の開成石經とこの清の石經だけで、而も唐の石經が十二經（三經……周易・尚書・毛詩、三禮……周禮・儀禮・禮記、三傳……春秋左氏傳・春秋公羊傳・春秋穀梁傳、論語、爾雅、孝經）に止まつて居るのに對して、之は孟子を加へた十三經になつて居り校正精核と稱せられる。

彝倫堂の後には敬一門があつて中に敬一亭が建てられ、其の西に箭亭があつて其の一帶は射圃となつて居た。又その學舎は成賢街の南側に在つて東に廣業・修道・率性の三堂、西に崇志・正義・誠心の三堂が前後列をなして相並んで居たのであつた。

國子監の東にある孔子廟は一に文廟とも稱せられる。即ち國學に孔子を奉祀



孔子廟

したもので現在の場所もと元の樞密院の舊址であつたと云ふ。

成賢街に面した正門は先師廟門と稱しもとは皇帝及び勅使の外は出入を禁じて居た所であつたが、最近は一設參觀者も此所から出入させて居る。門内の左右には元初以來の進士題名碑があるが、之は毎三年目に北京で行はれた最高の科擧に及第して進士の稱を賜つた人々の氏名を列記したもので、新しい碑の中には清末の名臣として支那の近世史上を飾り、日本人にも親しみを有たれて居る人の名も見受けられる。

先師廟門の中は大威門で、もとの門内には有名な石鼓が保存されて居た。即ち約二千八百年前周の宣王が岐陽に狩した時に、騎射に秀でた者の功を録し、詩十篇を作つて十石に録したものと稱せられ、支那最古の金石文字として學界の至寶と謂はれて居たが、民國二十二年四月南方に持ち去られてしまつて、今では乾隆朝に造られた模造の石鼓のみが其の門外に置かれて居る。

門内の大成殿は孔子廟の正殿で殿内の正面には至聖先師孔子の神位を奉祀し、其の左右に四聖（復聖顔子、述聖思

が、之は龍生九子の俗傳に依るもので、即ち龍の長子と稱せられる蟲眞が能く重い物を負ふと云ふ所に基いて碑下に之を置いたもので、斯うした風は唐時代には既に存したものの様である。

雍和宮 内三區雍和宮大街

雍和宮は清朝第五代の帝位を踐まれた世宗雍正帝の舊邸で、即ちこの雍親王府の舊址である。斯うした關係から其の建築様式も喇嘛廟と云ふよりも、清朝時代の王府の制式に従つて居る。

雍正帝は聖祖康熙帝の第四皇子で、康熙六十一年（皇紀二二八二年）父帝崩御の後を承けて登極せられたのであつたが、之は聖祖が豫て皇孫寶親王の賢を認め、之に皇位を傳へしむる爲めに其の父王をして踐祚せしめられたものと謂はれ、寶親王は即ち後の高宗乾隆帝で、帝は實に康熙五十年に此の雍親王府に於て誕生せられたのであつた。

この雍和宮が喇嘛廟として開かれたのは乾隆二年（皇紀二二九七年）で、これは清朝の制として皇帝を出した皇族の府第は、之を龍潛藩邸と稱して臣下の居住を許されぬこ

子、宗聖曾子、聖孟子）と十二哲の神位を配し、殿外東西の兩廡には先賢七十二子の神位を従祀してある。

も毎年二月と八月との上丁（最初のヒノト）の日を以て勅使を派して之を祭り、時として皇帝親しく臨んで自ら祭らるゝこともあつたが、民國以來大總統は特使を遣はして之を祭るのを例とした。即ち所謂釋典でまた丁祭とも稱し古式に則つた壯嚴な祭儀であつた。然るに民國十七年國民革命軍の北京占領後は、八月二十七日を孔子の生日として、極めて簡單な祭祀を行つて居たが、事變後に釋典を復活して北京に在る大官の手で之を祭ることとし爾來毎年春秋の兩季に之を行つて居り、祭典の前日に豫行の演禮は一般の參觀をも許されて居る。殿内に陳列されて居る祭器や樂器は即ちこの釋典に使用せられるもので、天壇の陳列品と共に支那の古禮樂を知るに好個の資料である。

殿後に宗聖祠があつて孔子の先祖五代を奉祀し釋典の時に特使を以て之を祭つて居る。

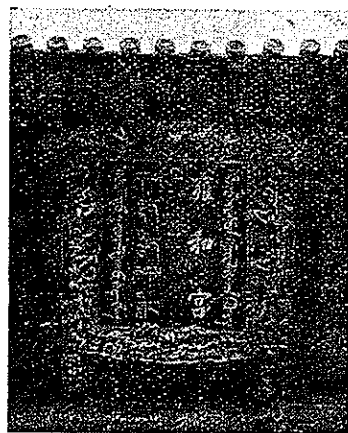
又境内に建てられた十數座の御碑亭は中に清朝時代の御碑を蔵して居るが、此等の碑を負ふて居る龜形の物は俗に龜趺とも稱せられ、支那の到る所に之を見られるのである。

となつて居た關係上、乾隆帝は蒙古人懐柔の政策的見地から、之を喇嘛に喜捨して喇嘛廟とせられたものと謂はれるが、私はこの清朝歴世の喇嘛教優遇は單に蒙古人懐柔と云ふ様な政策的意味の外に、清朝歴代の天子が實は喇嘛教の信者であつたことを指摘するものである。

北京に始めてこの喇嘛教が入つたのは元初と見てよいと思ふが、其の後元明兩朝に亘り帝室や貴顯等の手によつて相當な喇嘛廟も造營せられたのであつたが、清朝の北京に入るに及んではこの信仰は俄然旺盛となつて、北京の城内は素より、紫禁城内にも數箇所喇嘛の祭場が出来て、此等の喇嘛僧は理藩院の手に統制されて帝室の特旨によつて手厚い保護が加へられて居たのであつた。然るに清末に及んでは、福康の朝之と共に其の給與も昔日の如く行き届かず、遂に漸く諸喇嘛の敬を見るに至つたのであつたが、民國以來に於てはこの風は特に著しくなつて、今や其の管理も喇嘛寺廟整理委員會の手に移されて僅かに餘喘を保つて居るに過ぎない様な次第で、中には既に瀕滅の運命を辿つた寺廟さへもある。現在北京に在る喇嘛教關係の寺院はその數六十を越え、喇嘛寺廟整理委員會に屬するもののみでも三十二個所四十寺廟を算するのであるが、この雍和宮は上記の様な關係から、歴史的にも實質的にも諸廟の首位に居り、會て清朝時代には京師に於ける喇嘛教の大本山として、西藏拉薩の大昭寺と共に、活佛轉世化身の呼必勒罕を指出する爲めに造られた金瓶の一つを此所に蔵せしめられ

たのであつた。

「干地圓通」とした牌樓を入つて左に曲れば大門内の甬道に出る。この東方の一郭は喇嘛の僧房で、曾ては二千の喇嘛を擁したとも傳へられて居るが、清末以來國庫の疲弊は喇嘛に對しても其の給與を減じて漸く人員の減少を見る様になり、更に民國になつてからは彼等の窮乏甚しいものがあつて、現在では三百人内外の僧が住するに過ぎないと云ふ。



雍和宮牌樓

甬道正面の門は昭泰門で、門額に

滿漢蒙藏の四文字を用ひてあるが、之は喇嘛教關係のものに見られる特徴であらう。門内には東に鐘樓西に鼓樓が設けられ、鐘樓後方を東に離れて售票處がある。

售票所から西に大碑亭と並ぶ喇嘛式の銅獅を見つゝ石段を上れば、第一處天王殿とした札を掲げた中に正面に彌勒



雍和宮大佛

後方に韋馱天を供し、東西に四天王を配してあつて、その殿後には乾隆初年の作に係る大香爐を置いてあるが、之は宮中欽安殿前の大香爐と共に實に見事なものである。この次に乾隆晩年御製に成る喇嘛説を刻した豐碑が碑亭の中に立つて居るが、滿漢蒙藏の四國文字で書かれた碑文の要旨は、喇嘛教の沿革から元明兩朝の喇嘛教に對する失當を批判し、清朝の喇嘛に對する意思を表示して、更に喇嘛僧の

管理者たる達賴喇嘛及び活佛の後繼者として決定すべき呼必勒罕の選舉法を規定したものである。

御碑亭の次は雍和宮で中に三世佛を供してある。即ち中央釋迦牟尼佛(現世)、右燃燈佛(前世)、左彌勒佛(來世)であるが、各像の上部にガルダ(迦樓羅)を配したのは注意すべき所で、これは密教に於ては衆生救済の爲め梵天などの諸神が化身したものと稱せられ、我が國の天狗はこの變化であると謂ふ。東西の兩壁に十八羅漢を配し、佛前には八寶を供へてあるが、この中にはフルトまたはフグトと稱せられる銀輪もあり、極樂世界の小模型と稱せらるゝ、マンタルまたはマンチャルの名を以て呼ばれる壇もある。東西の兩廡は東が溫度遜殿で西が參呢特殿であるが、溫度遜殿の檐下には二個のマニホルと稱する轉輪があり、外面に金色燦然と六字の大明呪を刻してあるが、之を廻轉することには唱呪と同様な功德があると云はれて居る。殿内階上には數體の天地佛があり、階下にも五體の小天地佛があつて立派な鍍金を施してあるが、之は天地佛としては形こそ小なれ其の作に於ては見事な物である。

雍和宮の後方は永佑殿で中央に無量壽佛、東に宗喀巴の

化身佛と稱せられる像……これは大日如來と云ふ人が多いが……西に藥師如來を供し、左右の兩壁には二十枚の佛畫を懸けてあるが何れも紅緑の色も彩やかな西藏畫である。東西の兩廡は東が額木奇殿で、之は醫術關係の佛像を供したものでらしいことはその名からも考へられるが、正面の中央は宗喀巴で、右が藥師如來であると云はれ信者が眼の形を作つて奉納して居るのが面白い。入口の右には壇城らしいものが供してある。西廡の方は札寧阿殿であるが特記すべきものではない様である。

永佑殿の後方は法輪殿でこの廟の正殿である。中央に安置された大佛像は喇嘛黃教の開祖たる宗喀巴で高さ五米半と稱せられ、その金色燦々たる姿は美しいものである。殿内には毎日朝夕二回に亘り廟内の大小喇嘛が集つて、ゴヌクイと稱する僧官の統領の下に讀經をするが喇嘛僧特有のその聲音の響きにも大陸の宗教を首肯せしむるものがある。殿内には純金製と稱する釋迦牟尼佛・無量壽佛の大曼陀羅・五百羅漢・北京版藏文大藏經・達賴喇嘛の寶座等があり、特に釋迦牟尼佛は密教像で乾隆十年春西藏よりの供進になるものと傳へられて居る。



東宮和闐閣

東西の兩廡は即ち東配殿と西配殿とである。東配殿は所謂鬼神佛を供してあるが、何れも上を布で覆ふて硝子戸棚の中に格納せられた形になつて居るのほ餘りにも神經過敏な行き方である。殿内には乾隆帝吉林巡幸の御射止められたと云ふ熊・羆・虎・豹の木形があり、當時扈從したと云ふ四將軍の像も兩側に置かれて居る。西配殿内の佛像は其の彫刻精巧で女體佛の如き人をして恍惚たらしむるものがあると謂はれ、此等の作品は何れも廟内諸像中の白眉たるかの觀がある。法輪殿の東西は即ち藥師壇と戒壇とで俗に班禪樓、戒台樓とも稱せられる。この戒台は熱河廣安寺の戒台を改築したものと云はれる。

法輪殿の次は萬福閣で高さ約二十米と算せられ、中に立つ大佛像は高さ七十二尺と稱せられるが實は五十六七尺に過ぎぬと謂ふ。傳へられる所では西藏から一本の大旃檀を將來し、之を刻して造つたものとの事であるが、之に類似した傳説は熱河普寧寺の大佛にも存し、其の高さも七十二尺と稱せられて居るが、熱河の大佛像（盧遮那佛）がその脇侍と共に端麗なる相貌に人をして自ら敬虔の念を生ぜしむるものあるに反し、この像は其の面上甚しく險惡なるを感じしめるのは惜しいことである。閣後には南海大士などを供した一室がある。

閣の東西は永康閣及び延綏閣で共に高さ四丈と稱せられ三閣廊を以て相通じて居る。西方延綏閣に隣る一樓は雅木得克樓で上にヤマンタカ佛を供してある。又永康閣の東に建てられた照佛樓には旃檀佛を供し、其の次の一室には有名な六道輪廻圖がある。昔廟内の修理を失して居た時分に雨漏に損じたけれども繪の大體は判明する。この階上には打鬼に使用する各種の面を格納してある。

雅木得克樓の西の一郭に關帝殿と菩薩殿とがあつて、關帝殿内の諸像は其の作眞に迫れるを覺えしむるものがある。

り、京師關帝像中の傑作と傳へられて居るが、殿前の銅爐も亦有名である。

尙ほ本廟の東北に接してもと雍和宮離宮があつたが清末に焼失したとの事である。

それから入口の東方牌樓の南側にある佛塔は、北清事變の當時日本警務衙門の手で建設せられた萬靈供養塔で、明治三十四年六月末に建設を始めたものであるが、其の石材は日本より搬來した御影石で、台座上に安置せられたのは明代の製作に係る阿彌陀佛の像と謂はれる。この塔は永い間周囲の荒廢に委せられて居たが、事變後に邦人有志の手で修繕を加へられて、參拜者を見る様になつたのは喜ばしいことである。

この廟内で毎年陰曆の二月一日に打鬼の儀が舉行せられる。之は追儼の儀に似たもので清朝時代北京では紫禁城中正殿を始めとして、他の喇嘛寺でも之を行はれたのであつたが、現在ではこの雍和宮だけに残つて居る珍らしい行事で、其の前日に豫行の儀があつて之を演鬼と稱して居る。只これを演じる人々はみな他の喇嘛廟から集るものが多く、廟内の喇嘛達は當日は只管讀經に専念精進するのであ

る。

文天祥詞 丙三區安定門内府學胡同

正氣歌一篇凡そ二百七十字、まことに精神日月を貫き氣節天地に漲るところ、千載の下一讀懦夫をして起たしむるに足るものがあるが、之を世に残して從容刑に就いたかの南宋の忠臣文天祥の祠は府學胡同にあつて、此所は元時代の大都柴市口で文丞相授命の地と傳へられて居る。

文天祥は江西吉水の人で字を宋瑞又は履善と稱し文山と號した。二十歳にして進士に上つたが其の考試の答案は理宗親しく之を閱して及第第一に推したと謂ふ。宋末恭宗の徳裕元年（皇紀一九三五年）元軍の南下するに方り、紹して勤王の師を募集した時之に應じて兵を起し、江南の各地に轉戦したが翌年宋都臨安の陥るに及び、右丞相兼樞密使を以て講和の使節となり元の丞相伯顔と會見して論難した爲め遂に元の軍中に留められたが、後に隙を見て脱走し福建に入り、張世傑、陸秀夫等と共に勤王の軍に將として江西、福建、廣東の間に轉戦したけれども、元の至元十五年十一月元將張弘範の爲めに陸軍の北五坡嶺に執へられ、大都に送つて兵馬司に幽囚せられたが、宋はこの翌年二月崖山の戦に於て滅亡したのであつた。

當時元の世祖は人材を南方に求めんと急であつた爲め、天祥にも辭を盡して之を朝に用ひんとしたけれども天祥素より隱せず、而も世祖は其の節を屈せざるを見つゝも又殺すに忍びざるものあり、幽囚四年に及んだが至元十八年に正氣歌を作つて其の志を述べ、翌十九年十二月九日南向再拜して刑に就いたのであつたが行年四十七歳、この至元十八年は我が國に元寇のあつた弘安四年（皇紀一九四一年）に當り、有名な（孔子成仁云々）の衣帯中の寶は實に當時のものである。

名勝舊蹟

府學胡同の西口に近い舊順天府學の東に文丞相祠とした小さな正門があつて、その東に實驗小學が設けられこの祠も同小學の管理になつて居る。正門内に棗と榆との老樹があるが榆樹は文天祥愛賞の遺物と傳へられ丞相榆の名があり兩樹ともその枝の南向を稱へられて居る。

祠は明の永樂六年(皇紀二〇六八年)に北平按察司副使太常博士劉履節の勅を奉じて建立したものであるが、爾來屢々重修されたことは祠中に遺る大學士楊士奇の重修文丞相祠記にも見られる所である。

正面の神座には等身大の木像が奉安せられ、その前に「宋丞相信國公文公之神位」とした神位を設け、左に「宋丞相信國公文公像」とした神像碑が立つて居て、丞相衣冠の像を刻し、上に衣帶中の贊を彫つてある。又兩側の壁間には唐の雲鷹將軍李秀の斷碑があり、その左右には五六の石刻があつて色々な對聯も掲げられて居る。

それから正面神座の像はもと儒服を着けたものを置いてあつたが、明の景泰年間(皇紀二一五年頃)に忠烈の諡を賜つた時に、丞相の衣冠を正しうした現在の木像に改めたものであると云ふが、祠後に近い實驗小學校庭の小樓は

公の囚絆の舊址で、正氣の歌もこの樓上で作られたものと傳説もある。

隆福寺 内三區隆福寺街

隆福寺は東四牌樓隆福寺街の路北にある喇嘛教の大伽藍で、創建は明の景泰年間景帝の勅建である。景帝實録に據ると景泰三年六月に起工し、翌四年(皇紀二一三年)三月の竣工となつて居る。傳へられる所によれば竣工と共に日を撰んで皇帝の臨幸を見る筈であつたのを、萬乘の身を以て尊佛の爲めに行幸あることの風化に害あるを奏する者があつて中止となつたと謂ふが、更にその後御使朱鑑の奏によつて風水の關係から勅して正門を閉ぢてしまつたと言はれて居る。

もと門内には天王殿、眞如殿、正覺殿、毘盧殿、法堂、金剛殿の諸殿相次いで立ち並び、大悲、元直、關帝、地藏の小殿東西に配せられて莊嚴を極めて居たが、明治三十三年庚子の亂に天王、眞如の兩殿を燒かれ、爾來殿宇の荒廢甚しく今では方に倒壊に瀕せんとするものも見える。清の雍正三年に重修せられた碑記があり、近くは民國六年にも

一部の重修が行はれたと謂ふ。

古くから毎月九、十の兩日に廟市が開かれて日用品、骨董品、鳥獸等の露店が相並び頗る股賑を極め、西城の護國寺と共に東西相對して東廟、西廟と呼ばれて居る。

寺前の隆福寺街は書肆を以て有名で文奎堂を始め文殿閣、三友堂、修綏堂等の店舗が軒を並べて居るが、乾隆の中葉に出来た李文藻の琉璃廠書肆記に據ると、當時既に内城隆福寺に書籍を賣る者のあつた事が記されて居る。

護國寺 内四區護國寺街

護國寺は西城護國寺街にある一大喇嘛廟で元代の開基である。もと崇國寺と稱し上下の兩寺を有したとのことで、現存のものは其の上寺の方であると傳へられて居るが、寺基は當時の丞相托克托の邸宅を喜捨したものであると謂ふ。明の成化八年(皇紀二二二三年)に大隆善護國寺の名を賜ひ、後に清の康熙六十一年(皇紀二二八二年)に重修が行はれて護國寺と改めたが、乾隆十二年には天子の臨幸を見たこともある。

山門の次に二將殿と鐘樓・鼓樓を置き、之に續いて天

王・延壽・千佛の諸殿を中央にして、六個の小殿と僧房とを東西に配してあつたが、此等の主なる部分は民國以來荒廢に荒廢を重ねて殆んど倒壊し、今は僅かに其の殘礎を留めて居るものが多いが、後院に建てられた護法殿・功德殿・塔樓等は荒廢の中にも尙ほ屋壁を存して居る。

境内に立つ十七基の碑の中には元碑と明碑とが各五基宛數へられ、此等の中には趙子昂の筆に成る大碑や、元代の也里可溫に關して記録した貴重なもの等が見られ、千佛殿の土坯建築や柱礎の見事な彫刻を始め、護法殿内の壁畫・元塔・姚廣孝の木像・元代の石獅・塔樓内の喇嘛塔や佛像等の如き古い物が澤山に見られる。

古くから毎月七・八の兩日に廟市が立つて日用雜貨・荒物類・古玩類・玩具・花鳥・魚虫等の露店相並び、西西北大街に迄も延長して遊人行客頗る多く繁賑を極める。

東四牌樓の隆福寺と東西相對して東廟・西廟の名を以て呼ばれ、北京屈指の名廟であるが現在に於ては上記の通り主要建築相次いで倒壊し、宛然一大廢墟を思はしむるまでになつて居る。

觀象臺及び欽天監 内一區東横街胡同

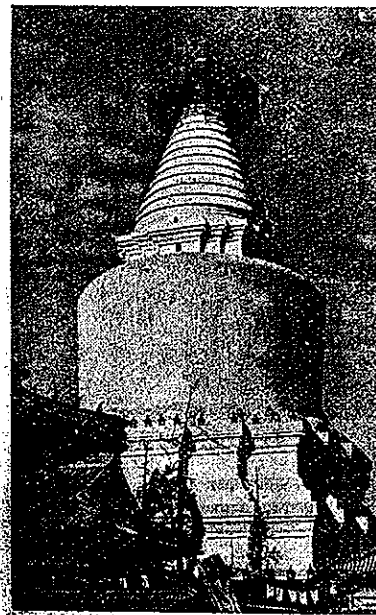
支那人は古くから天に對して特殊の觀念を有して居た關係上、天體の運行や曆に關する學問は非常に進歩したものがあつた。殊に元代に於ては回々教徒を介してアラビヤ系の天文學が取り入れられ、司天臺、觀星臺、欽天監等の設けは早くから存した様であるが、更に明末に至つては宣教師の手により西洋の天文曆等の學問が輸入せられて非常な進歩を見たのであつた。

觀象臺は即ち天文臺で現在の位置は元明の故址に依つたものである。今臺上に陳列せられた儀機は即ち西學輸入以後の製作に係るもので、天體儀、赤道經緯儀、黃道經緯儀、地平經儀、象限儀、起限儀、地平經緯儀は康熙初年に白耳義人フェルウェスト(南懷仁)に命じて作らしたものの儀機撫辰儀は乾隆初年の製作である。この臺下に明末製作の簡儀、渾儀、乾隆朝製作の圭表等があつたが、民國二十二年五月南方に搬出されてしまつた。清末までは此等の儀機を用ひて觀測を續けて來たのであつたが、北清事變の際此所を佛獨兩軍に占領された結果此等の儀機は戰利品とし

て兩國に持ち去られたが、その後何れも返還を見て再び臺上に陳列されるに至つたのである。臺下の欽天監は天文を考へ曆數を掌り正朔を天下に頒布した所である。

白塔妙應寺 内四區阜成門大街

阜成門内にある喇嘛廟である。寺後に聳ゆる白塔は高さ約五〇米遼の壽隆三年(皇紀一七五七年)に佛舍利を奉藏する爲め建てられたものと傳へられて居るが、實は元初の改建で、喇嘛塔としては非常に形の整つた立派なものである。



白塔寺

白塔寺の廟會(録日)



である。

が、白塔寺の名稱は遠時のものであると云ふ。其の後明の元順年間妙應寺と改め、清に入つて康熙乾隆の兩朝に重修せられて今日に及んだのである。

歷代帝王廟 内四區羊市大街

白塔妙應寺の東にある。歷代帝王の祭祀は明の洪武六年に始められた制で、明の中葉迄は南京で祭られたのであつた。現在の廟は嘉靖初年の創建で、當時は三皇、五帝、三王、漢高祖、光武帝、唐太祖、宋太祖、元世祖等創業の君主のみを祀つたのであつたが、其の後屢々改變があり、清末に於ては無道の帝王、弑に遭つた帝王、亡國の帝王を除いた歴代の帝王は、何れも此所の正殿に祀られて居たのである。又正殿の前に東西の兩廡があつて歴代の功臣を配祀して居たもので此等の神位は今尚ほ存して居る。

萬松老人塔 西四區大街路西

西四牌樓の南碑塔胡同にある七級の磚塔である。萬松老人は元の宰相耶律文正公の師事した人であると云ふが、この塔の創建に就ては判然しない。明の萬曆三十四年(皇紀二二六六年)及清乾隆十八年(皇紀二四一三年)の重修を経て最近民國十六年にも小修を施されて居る。

都城隍廟 西長安街

元の至元四年(皇紀一九二七年)の創建。後再三重建重修を經たと傳へられ、現在は光緒末年の失火に焼失したまゝになつて居る。

城隍は即ち城と隍とで城隍神は土地神の上に位し、其の所轄域内にある住民の禍福一切は素より、死後の賞罰迄も掌るものとして民間信仰の一大核心を爲すものである。都城隍は要するに帝都の城隍神として支那全國の城隍神を統べるものと考へられて居る。

慶壽寺(双塔寺) 内二區西長安街路北

金の章宗明昌年間(皇紀一八五〇年頃)の創建で大慶壽寺と稱し元時代もこの名に依つたが、明の正統十三年(皇紀二二〇八年)に宦官王振の手に之を重修して興隆寺と改め一時は禁廷香火の外院として榮えかの隆福寺とその繁を競ひ、號して第一叢林と稱したと云ふが、明初には姚廣孝も曾て此所に住し、後にはその木像も此所に置かれて居た。然るにその後寺を除いて射場に充て之を講武堂と稱

し、更に明末には象房の群象を此所に引き出して演象の場所にも充てゝ居たものゝ様である。

境内に立つ兩塔は九級のものゝが圓明海雲佑聖國師の塔で、七級の方は圓照大禪師可庵の塔であるが、この兩僧は宋元の間に於ける臨濟禪の名僧で、その名は耶律文正公の湛然居士集にも散見する所である。乾隆二十九年に重修されて居るが、此の兩塔が夜合して晝離れると云ふ神秘的傳説は今尚ほ残つて居る。元の世祖の大都築城に際しては特にこの兩塔を避けて、その南側の城壁は五十歩の距離を隔てゝ築造せしめたのであつたが、今でも西長安街はこの邊に於て其の廣さを減じて昔の彎曲を存して居る。

什刹海 内五區

萬壽山昆明湖の水が長河の運河となつて德勝門外の松林間から城内に入り、積水潭から什刹海となり荷塘を経て北海に注いで居るが、俗に荷塘を什刹前海・什刹海を什刹後海・積水潭を什刹西海とも稱して居る。

此の一帶は元時代に海子と俗稱され、明時代には淨業湖とも稱せられたところで、元の時代には水深も相當有つた

らしく、帆船林立の盛況を呈した記録も存して居る。

什刹海の名は湖岸に名利十個を存したのに因るとも謂はてれ居り此等の古刹は其の後殆んど廢滅した様であるが、今尚ほ此の諸海の兩岸には澤山の有名な寺廟が存して居て、西海南岸の高廟や北岸なる滙通祠・淨業寺・後海北岸の龍華寺・廣化寺・前海東岸の火神廟・同西河沿の藥王廟等は廣く其の名を知られて居り、中でも高廟は西紀一八六〇年の英佛聯合軍侵入當時に於て、英人パークス等の一行が一時監禁せられた所として歐米人の間に其の名を知られて居る。また後海の北岸には醇親王府があつて、今の滿洲帝國皇帝は實に此所で御降誕あらせられたのであつたが、その對岸に近い李廣橋の西北方には慶親王府の花園もあつた。

什刹前海は其の別名の示す通り蓮の花で有名な所で、夏季都人の行樂場と化するのには實にこの沿岸であり、特に北海北門外の邊から響蘭を経て會賢堂の前の邊に至る間の雜踏と熱鬧とは一驚を吃するものがある。

曹雪芹の筆に成る紅樓夢の大觀園は會賢堂の附近に在つたと謂はれるが、此の邊で柳陰荷影の間に輕羅楚々たる艶

姿の逍遙する所を見れば、傳へらるゝが如く武英殿大學士として榮華を極めた明珠一家に材を求めずとも、ある程度の小説位は書け相に思はれるし、又前後兩海の相連る所に架せられた銀錠橋附近の風光の如きは其のまゝに一幅の名畫である。

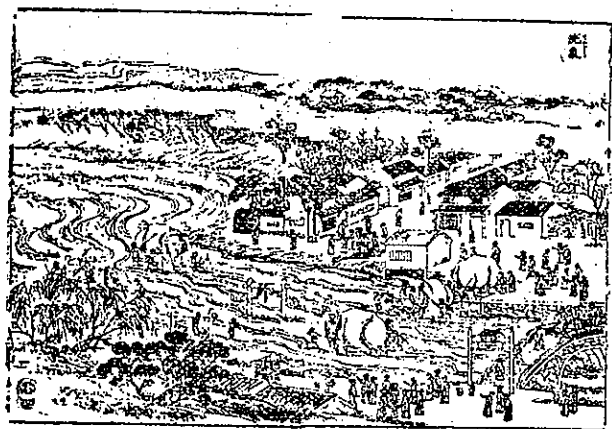
毎年夏になると澤山の茶社、戲場等が林立するが、何れも端午に開いて立秋に閉ぢるのを例とする。

象房址 内二區園會街

北京に馴家所が設けられたのは明初のこと、最初廣安門内の古刹報國寺の境内に之を置いたが、紫禁城への往復に不便であると云ふので、明の弘治八年(皇紀二一五五年)に宣武門内の阜財坊にあつた定力院と云ふ古寺の兩半部を改造して此所に移した。清朝になつてからも明の舊に依つて此所を象の飼育所に充てたのであつたが、之が俗に象房と稱せられたもので、この舊址には民國になつてから衆議院の建物が出来て、初め十數年間議事堂として用ひられて居たけれども、蔣介石の南京遷都後に北平大學の法商學院として使用せられ、事變後新民學院が此所に開かれた

のである。宣武門内の西城根を國會街と謂ふのは斯うした關係からであるが、北京の古老達の中には今でも之を象房と稱して居る者がある。

馴象所は明時代に於ては錦衣衛の管轄であつたが、清朝宣武門外の洗象(唐土名勝園會)



になつてからこの錦衣衛を豊儀衛と改めた關係上其の管轄下に屬した。此所に飼養せられる象は印度支那諸邦の貢進したものを以て之に充て、若しそれだけで足らぬ時には雲貴總督に令して之を購はしめたもので、象の頭數も時によつて甚しい不同があつたものゝ様で

清末には三四頭の象が存したが農事試験場に移した。

一體支那では古くから象を儀式や鹵簿に用ひて天子の尊嚴を示したもので、清朝時代にも斯うした關係から朝會に際しては之を朝象として午門と天安門との前に立たしめ、行幸に方つては之を儀象として鹵簿の先頭を行かしめたのであるが、この爲めに象使ひが設けられ象奴が置かれて平素其の訓練をしたのであつたが之を演象と稱し、明時代には一時この演象所を西長街の雙塔寺に設けたこともあつた。

むかし北京の年中行事の重要な一つに洗象と云ふのがあつたが、これは毎年六月六日に宣武門外の護城河で象を洗ふ儀式で、當日象房の象は鼓吹儀仗を備へて宣武門を出で、後河沿に設けられた綵棚の下に於て奏する旗手衛の樂につれて水に入り、象奴の命のまゝに色々な藝なども演じるのを例とし、この日は内城の貴婦人達も車を連ねて之を見物したものの様で、斯うした洗象の繪は唐土名勝園會にも描かれて居る。

廣濟寺 内四區羊市大街

宏慈廣濟寺は西四樓牌の西傍にある古刹で、明の天順初年(皇紀二二〇年頃)に山西の僧普惠の手に創建せられ、當時尙衣監の太監廖屏なる者がこの趣を奏して宏慈廣濟寺の額を賜つたとのことであるが、傳へられる所によればもと此所は西劉村寺と稱する金時代の舊刹の廢址で、その寺は金の劉望雲と云ふ人の開基に係るものであつたとも謂ひ、また一説には元時代の營房の廢址で某姓の老寡婦が、其の愛猫の死を悼んで殉葬した多大の財寶を、後に官の手で發掘して其の金を以て建てられた寺であつたとも謂はれて居る。

天順の再建後は萬曆年間に重修が行はれ、更に清朝になつてからも數次の重修を行はれて境内大小の伽藍その面目を一新し、殊に康熙三十三年には勅して大規模の改修が加はられて後に御書の扁額を賜り、佛殿經閣相連つて輪奐の美を極め、その寺基は三十五畝と稱せられ、境内に撰ばれた十景は詩人文士の題詠に上り、法燈愈々光輝を添へて帝京屈指の大道場として知られて居たが、民國二十一年一月上旬突如火を失して延焼百數十間に及び、寺内の大半を擧げて烏有に歸したけれども、間もなく再建を見て殆んど舊

觀に復したが、失火當時に寺寶として有名だつた明の藏經五千餘卷(順治年間に南京から齎らした物と傳へられる珍版で、外人の間にもその名を知られて居たが)を燒失し、五代時代の遺物として名高かつた方缸や、明末外國からの進貢に係るものと傳へられて居た白檀香木を精刻した接引佛の立像等も烏有に歸してしまつたのは惜しいことであつた。

智化寺 内一區米倉東口

朝陽門内祿米倉東口の路北にある山門内の一郭は、明代の巨闕として知られた王振の創建に因つて名高い智化禪寺の古刹である。

王振は明朝第五世の宣宗に仕へて次第に地位を得、殊に第六世英宗の東宮にあつた時から朝夕左右に侍して其の寵を固めた爲め、英宗即位の後には張太后の崩と共に政權専ら其の手に歸して生殺與奪皆その方寸に出で、百官之を翁父と尊稱して跪禮を行ひ、天子も亦之を呼ぶに老先生の名を以てしたと云ふ。性狡黠多智で朝政を紊ること甚しく、遂に正統十四年(皇紀二〇九年)八月、大同方面に入寇し

た蒙古互拉部の酋也先を撃つて邊功を立てんと策し、衆議を排して天子をして親征せしめたが、師を班して八達嶺外の土木堡に駐軍した時蒙古軍の重圍に陥りて全軍潰散し、天子は亂軍の間に捕へられたのであつたが、王振はこの時護衛將軍樊忠に擁護せられ、次で敗報の北京に達すると共にその三族長幼を擧げて誅せられたが、其家を籍した時には金銀六十餘庫・玉盤百・高さ六七尺の大珊瑚二十餘株・其の他珍玩珠寶無數を得たと謂はれ實に後年の魏忠賢と共に明代悪宦の双壁であつた。

寺の創建は正統九年正月とも謂はれるが、實は同八年の起工で翌九年三月の竣工に成るもの、様である。當時英宗は之に報國智化禪寺の名を賜ひ王振の死後に於ても天順元年（皇紀二二一七年）には勅して之を祭らしめ、又同六年には特に藏經一部を頒賜されて居るが、清朝乾隆初年迄その衣冠の像が後殿に祭つてあつた所を考へると、この寺は寧ろ彼の生祠では無かつたかと思はれる。

斯の如くにして明朝の中葉から清初頃迄は香火相當に盛んであつたもの、様であるが、乾隆七年（皇紀二四〇二年）に御史沈廷芳が奏して、王振の像を仆毀してから天下

の人之を憚り寺運漸く衰微に陥つたと傳へられる。

山門を入ると鐘樓・鼓樓を左右にして智化門があり、更に大智殿・藏殿を左右にして智化殿がある。藏殿には轉輪藏があつて、之は民間の寺廟としては珍らしいものであるのみならず、其の上にカルダを配されて居る所は注意すべき點であらう。

智化殿の次に建てられた如來殿内には英宗頒賜藏經碑が残つて居り、當時藏經を容れたらしい經櫃も存して居るが、この階上は萬佛閣になつて居る。

如來殿の後方に設けられた小門前の東に英宗諭祭王振碑が立つて居て、祭文の下に王振の像が刻せられて居るのも珍らしいもので、この小門内は大悲堂・萬法堂を中にして東に方丈が有り、西には後廟があつて王振の像は此所に祭られて居たもの、様である。

又藏殿と如來殿階上の萬佛閣の天井は明時代の藻井として珍らしい物であつたが、數年前その所在を失したのは惜しいことである。

民國以來漸く荒廢の風があつた所に、十數年來屢々支那兵の駐營を見た爲め、この由緒ある寺内も荒廢甚しく遂に

今日の姿に至つたのは返す／＼も惜しい次第である。

柏林寺 内三區大保街

雍和宮の東に隣接する古刹で其の開基は遠く唐代に在ると傳へられ、始め柏林寺在りて、後に北京城在りとの謠もある位であるが、其の後幾度かの變遷を経て、元の至正七年（皇紀二〇〇七年）に改建せられ、更に明の正統十二年（皇紀二一〇七年）にも重修が行はれて、清になつてからは康熙五十二年（皇紀二三三三年）と乾隆二十三年（皇紀二四一八年）とに重修を加へられて居る。

もと寺内に大藏經と道藏との經板を貯藏して居たのを、道藏の方は後に白雲翻に移されたと言ふが、この道藏板は北清事變の時、光明殿で焼けてしまつたもの、様である。大藏經の經板は完璧を以て稱せられ數年前に北京好佛家等相協つて十數部を印刷せられたこともあつた。

王 府

清朝時代には主なる宗室に對しては特に其の府邸を賜ふ制があつて、此等の用途に充てる爲めに大邸宅が豫め準備

されて居た。所謂王府と稱せられるものが即ちこれであるが、王府と雖も時々其の主を替える關係上、時によつて其の府第も名を異にしたものが多い。

宣統三年の宗人府統計に據ると當時の宗室は親王九・郡王三・郡王銜多羅貝勒二・多羅貝勒三・貝勒銜固山貝子一・固山貝子二・貝子銜奉恩鎮國公一・奉恩鎮國公一〇・奉恩輔國公一〇・不入八分鎮國公四・不入八分輔國公八・鎮國將軍一八・輔國將軍一五・奉國將軍二五・報恩將軍五七で合計一六七家に上り、光緒順天府志にも此等王公の府第一五五を擧げてあるが、この外に蒙古外藩の王公を加へるとその數は頗る夥しいものであつた。此等の中で特に有名だつたと思はれる府邸を擧げると

醇親王府	什刹海北河沿
慶親王府	外交部街
鄭親王府	二龍坑
怡親王府	東單牌樓及朝陽門内
壽親王府	西安門南皇城根
莊親王府	什鏡花園
恭親王府	什刹海南
慶親王府	定府大街
蔚親王府	北新橋船板胡同

豫親王府 東單三條胡同、鐵獅子胡同
 朗貝勒府 紅瓦市
 洵貝勒府 鐵子胡同
 溥貝勒府 龍眼井
 溥貝勒府 迴效府
 倫貝子府 大甜水井
 喀喇沁王府 地安門內太平街
 大公主府 寬街南

等があつたが、民國以來宗室俸祿の不渡から此等の諸王府は經濟的に窮迫して、或は賣却せられ或は負債の擔保になつたりして、現在残つて居る主なるものは醇親王府と肅親王府・慶親王府・溥貝勒府くらゐなものゝ様である。

王府の定制は街衢に南面して東西の阿思門の中間に府門を開き、その中に正門の銀安門と王の正殿として銀安殿が建てられ、其の後方の一郭を祭神殿として最後に樓を設け此等の東西に家眷の住房や花園を設けるのであるが、土地の都合で花園を別所に設けたものもあつた。

什刹海北河沿の醇親王府は、宣統帝の同親王家から出て即位せられた關係上所謂龍潛藩邸となり、臣下の居住が出来なくなつた爲め、中海の集靈園を改造して移轉せられん

とする時、辛亥革命の勃發によつて中止となり、改造の新府は國務院に充てられたのを民國十七年七月首都の南遷後市政府が此所に移つて來たもので、現在の市公署は殆んど完全な王府の制を備へて居るが、舊來の王府として完全に残つて居るものは醇親王府の右に出るものが無い様である。又肅親王府は東交民巷の舊王府が北清事變に際して日本軍の領域する所となり、事變後日本公使館に充てられた爲めに今の北新橋に移轉したもので、その洋風を加味した所は本來の王府の制で無く寧ろ花園の形式である。その外睿親王府は外交部となり、豫親王府が北京協和醫學校及病院となり、鄭親王府が中國大學となり大公主府が同仁醫院分院、禮親王府が中央鐵路學院となつたのはまだよい方で朗貝勒府の義達里と化し怡親王府が同和洋行街となつたこと等を考へると、私共は今更ながら金力の偉大なるに慄然たるものを感じさせられると共に、無爲徒食の人々の末路に就ても大に訓へられるものゝあるのを覺える。

俄國教會(アルバジン村) 内三區東直門内

東直門内の北方に露西亞人の教會があるが、廣大な一郭

の中央に高く聳ゆる白色異國風の丸屋根の上に大きな十字架が光つて居るのが見られるが、外國の人達は之をアルバジン村と呼んで居り、教會の人々も自らアルバジン人と稱して居る。

西紀一五八三年にコサツクのイエルマークがシビル汗の地を取つてイヴァン四世に奉つてから、彼等は毛皮獸を逐ふて西比利亞の野を東へ東へと進出し、康熙の初年には外興安嶺を越えてアルバジン(雅克薩)に城砦を設け、此所を根據として陸續南下の勢を示したので、清露兩國の兵力は遂に此所に衝突を見たのであつた。

此の城砦に於ける兩軍の戦闘は數回に亘つて繰り返されて居るが、康熙二十四年(皇紀二三四五年、西紀一六八五年)六月に、都統彭春が陸兵一萬、水師五千を率ひて之を攻撃した時には、守將トルブチン驍勇にしてよく戦つたけれども遂に敵せず、露人はネルチエンスタに退くの已むなきに至つた。清軍即ち城砦を毀ちて引き揚げたが、當時約三百の投降者は之を北京に送つて來た。

康熙帝は此等コサツク人の投降者を大に優遇して或は官爵を授け褒帽を賜ひ、滿洲廟黃旗の第四參領の部下に編入

して永く内城東北隅の廟黃旗地界に居住せしめ、信仰の自由を許して露國正教會の寺院を建て、その祈禱禮拜を許したので、其の後露帝より使者を派遣して引取方の交渉のあつた時も歸國を肯んずる者が無かつたと云ふ。

爾來此等コサツク人の子孫は此所に定住して、滿漢の兩民族と通婚して大きな混血部落を作りつゝ平和な生活を營んで居たが、たゞ牧師は常に露國より派遣されて此等の教化に任じ、其の間にはワツシリエフ・タタリノフ・ブンゲ等の如き有名な東洋學者も輩出し、東交民巷の俄羅斯館と相對して俗に南館北館と稱して居た。

明治三十三年(西紀一九〇〇年)北清事變の時に教會を始めこの邊の住宅も團匪の手に破壊せられ、二百二十二人の信者を虐殺されたけれども、其の後復舊して現在の建物が再建せられ、この信者虐殺の跡を特に受難堂と稱して居る。住民の面貌や生活様式は殆んど支那式に化せられてしまつたが、教會では今でも露西亞語が聞かれる。

北京神社(貢院舊址) 内一區貢院大街

現在の北京神社の神域から其の西及び北に亘る一郭は明

清時代に於ける貢院の舊址である。

清代に於て官吏登用の方法として行はれた科擧は、郷試・會試及び殿試の三階程に分れて居て、郷試に合格した者は舉人となり、會試及び殿試に合格した者は進士となるのであつたが、此等は毎三年に一回舉行せらるゝ制で、郷試は子卯午酉の年の八月を以て各省の省城に於て之を行ふを例とし、會試は丑辰未戌の年の三月を以て北京に於て之を行ひ、殿試は會試の後約一ヶ月を隔てた四月二十六日を以て之を行ふの定めで、北京の貢院は直隸省の郷試を此所で行つた外に、實に全國の舉人を此所に集めて



北 京 神 廟 郷 試 と 會 試 と の 行 は れ た 所 に 大 き な 特 色

を存したのであつた。

この貢院は元の禮部の舊址について明の永樂十三年(皇紀二〇七五年)に建てられたもので、その後嘉靖、萬曆にかけて擴大せられ清は明の舊に依つたものである。南を正門として南面中央に大門を設け、正門外には東に「爲國求賢」西に「明經取士」の兩牌樓が有り、南に「天開文運」の樓門が建てられて、門内古槐樹の在つた北の方に一段高く監視の場所に充てられた明遠樓が聳え、之を中にしてその兩側に東西の兩文場を配し、その東西には圍牆に近く四つの監視台が立つて居た。

受験者を容れるのは廣さ約三尺平方高さ約一丈の小室で、之が一萬五千餘も有つたと謂ふが、此等の受験者は一旦此の小室に入れば約三日間を皆この中に蟄居して用便の外は寸歩も室外に出づるを許されず、この小天地に踞して課題の論策を淨書し詩文を作らねばならなかつたのであつたが、而もこの苦痛は一回の郷試にも會試にも三回之を繰り返して漸く試験を終るのであつた。

北清事變に際して此所は相當な破壊を蒙り、光緒三十一年を以て斯うした科擧の制は廢せられたが、尙ほ民國にな

つてからも其の舊態を保存して居た、然るに民國十三、四年頃京都市政公所はこの地址を利用して模範市區の設置を計畫したが、不結果に終つた爲め遂に土地の拂下を行つたのであつた。

昭和十五年六月北京神社の造營が成つて同二十四日その鎮座祭が行はれ、天照大神、明治天皇の御二柱の神に加へて國魂神を奉祀し、社格を國幣小社に準じて扱はるゝこととなり、北京在留民の氏神として邦人崇敬の中心になつて居る。

光明殿址 内六區西安河内大街

明朝第十一世の天子として武宗の後を承けたのは世宗で即位の翌年嘉靖と改元したが、その治世は前後實に四十五年の長きに亘つたのであつた。

帝は生來道教を好み即位後間もない嘉靖三年二月には顯靈宮龍虎殿を建て、道教の諸神を祭り、江西省龍虎山の道士邵元師を召して之を寵信し、致一眞人に封じて宮中の道教を掌らしめたが、其の没後には更に陶仲文を召して之を乘一眞人に封じ、禮部尙書を授けて更に少師少保少傅を加

へ優遇せらるゝるなく當時創建を見た道場には欽安殿・太高玄殿・玄岳・玄處居殿・大玄都殿・萬法寶殿・玄極寶殿等があり、この光明殿も亦實にその一つであつた。

明の世宗實錄によると嘉靖三十六年(皇紀三二二七年)十一月に、大光明殿の工成つた旨を記してあるが、その後百二十年許りを經過した清の康熙二十三年に成つた高士奇の金鰲退食筆記を見ると、

大光明殿は西安門内の萬壽宮遺址の西にあつて、地城極めて廣く、臺殿と稱する門の中には前の方に高さ數十尺に及ぶ圓殿があつてその制は天壇の圓丘の如く大光明殿の額が掛つて居る。次に太極殿が建てられ後方に九間の香閣があつて天元閣の額が掛つて居る云々。

と云ふ様な意味のことが書いてあるが、當時高士奇は居ると光明殿に賜ふてこの附近に居住したのであつた。

この大光明殿は二層の圓形基壇上に建てられた圓頂重簷の八面殿でその形は今の景山の西にある大高玄殿に似たものであつたが、この中には道教の最高神として玉皇上帝を奉祀し、次の太極殿には三清・四御の諸神を祭り、後方の天元閣には斗母と普化天尊とを祭つてあつたものゝ様で世宗が陶眞人と丹を煉つたと傳へられるのはこの太極殿で

名 勝 蹟

あつたと云ふ。

清朝になつてからも此所は禁廷の道場として總管内務府の管理に屬し、澤山の内監道士を置いて主として雨雪を祈る祭場に充てられ、又毎年皇太后及び皇帝の萬壽節に際しては齋天道場を此所に設けて聖壽の萬歳を祈禱せしめられたのであつたが、その祭壇は嘉靖の舊に從ひ正一道教の大本山として有名な江西省龍虎山の簾壇によつたものであつた。

明治三十三年の北清事變に際して佛國軍が附近の北堂に籠城した爲めに此の一帶は兵火の巷となり、附近の貧民や無頼の徒に殿内悉く破壊掠奪せられて全く舊觀を失したのであつたが、殿内に藏せられた道藏の經板も當時焼けてしまつたものゝ様である。

事變後多少の修繕は行はれたと云ふが素より舊觀は全く失はれ、民國になつてから境内の舊建築を全部取り拂つて兵營を新築し、大總統府の衛隊を駐割せしむる場所に充てて居たが、後には奉天軍の兵營となつて張學良の衛隊も此處に駐屯して居たこともある。

昭和十四年から北京日本西城國民學校・青年學校・北京

日本中學校の校舍に充てられて居る。

碾米倉址 内一區碾米倉大街

朝陽、東直の兩門内には元明の時代から數箇所米倉が設けられ、漕運によつて通州を経て北京に輸送せられる南方の米糧を貯藏して居たのであつた。

即ち清朝に於ては朝陽門内に碾米倉・南新倉(東門倉)・舊太倉(南門倉)・富新倉(西門倉)・興平倉(北門倉)があり、東直門内に海運倉と北新倉とがあり、また朝陽門外に太平・儲濟の兩倉があつて之を京師の九倉と稱し、之に清河の本裕倉と安河の豐益倉とを加へて十一京倉とも呼び、更に内倉・恩豐倉・裕豐倉・萬安倉を加へて京倉十五の名もあつたが、此等は、通州の二倉と共に戸部倉場侍郎の管理に屬して居た。各倉には其の監督として滿人と漢人とを一人宛設け、その下に澤山の役人が置いてあつたが、此等の諸倉は主として京官の俸米を此所に貯へ、百官の俸米入旗の甲米は均しく之を此等の諸倉に取つたもので此の制は清朝に於ては順治初年(皇紀二三〇〇年頃)に定められて居る。

諸倉の營建に就ては『大清會典』に

倉年間一丈四尺。縱五丈三尺。按高一丈五尺有奇。下稱齊。上加木板。踏址留下孔。以曳其瀉。殿項建氣櫃。以散其穢。門用橫板。額上加木板。聯五間或四間六間爲一殿。統數十殿或百餘殿爲一倉。中建官舍。四旁鑿井。外環圍牆。(工部)

とありまた同事例には

每倉以五間爲一殿。每間七楹六椽。闊一丈四尺。深五丈三尺。山柱高二丈二尺五寸。楹柱高一丈五尺五寸。云々(工部)

とあるが、この殿には一萬石を充す制で、清朝時代に於て南方からの漕穀たる米麥豆は正兌米・改兌米・白糧・雜麥・黑豆の五等に分れ其の定額は米四百萬石で、正兌米は京倉に入れて八旗三營の兵食に充て、内城の諸倉殆んど朝陽門以北に存したのに、只この碾米倉のみは門南に設けられて居た。會典事例(工部)に據ると

碾米倉共二十五座。官廳三間。官舍八間。科房四間。井一。

とあるが康熙二十二年には八十一殿に増造され、同四十四年には太平倉殿を碾米倉に併せて別に三十の新殿を建てられたが、乾隆元年には碾米・裕豐・富新の三倉には隙地の無い爲め當時京倉に行はれた増殿を見合せ、同六年に井五を増した事等が見えて居て、清末には五十七殿を存したものの様である。

民國以來陸軍被服廠となつて居たが、昭和十五年四月北京日本第一高等女學校が此所に移轉してその校舍に充てられて居る。

〔外城の部〕

天 壇 外五區天橋南大街

天子祭天の禮は支那に於ては古來國家最高の典禮であつたが、殊に漢以來に於ける儒學の興隆に伴ひこの禮も亦形態を整備して、愈々尊嚴を極むるに至つたのであつた。歷朝の天子多くは帝城の南郊に壇を設け、柴を燔いて天を祭るのを例とし之を郊祀と稱したが、民國以前に於てはこの祭天の典禮を行ふことは實に天子の特權の一つで、北京の天壇は即ち最近迄四百餘州に君臨した天子の親ら祭天の典禮を行はれた靈域である。

始めて北京の地圖を手にした人々は、外城の中央に近く彩られた天壇の地域のあまりにも廣大なのを見て、奇異の感に打たれるであらうが、更に愈々北京に来て現地を訪れると、其の意想外に廣い壇域と、其の中に建てられた壯大な建築とを見て又々一驚を吃せしめられるのが例である。

又清朝時代の事實に稽へて見ても、清末當時禮部の手に行はれた天子の祭祀は、北京に於けるもののみでも大小五十近くを算したが、中でもこの天壇は實に諸壇諸廟の首位に置かれ、其の祭祀も亦大祀の第一位に列せられて居たのであつた。

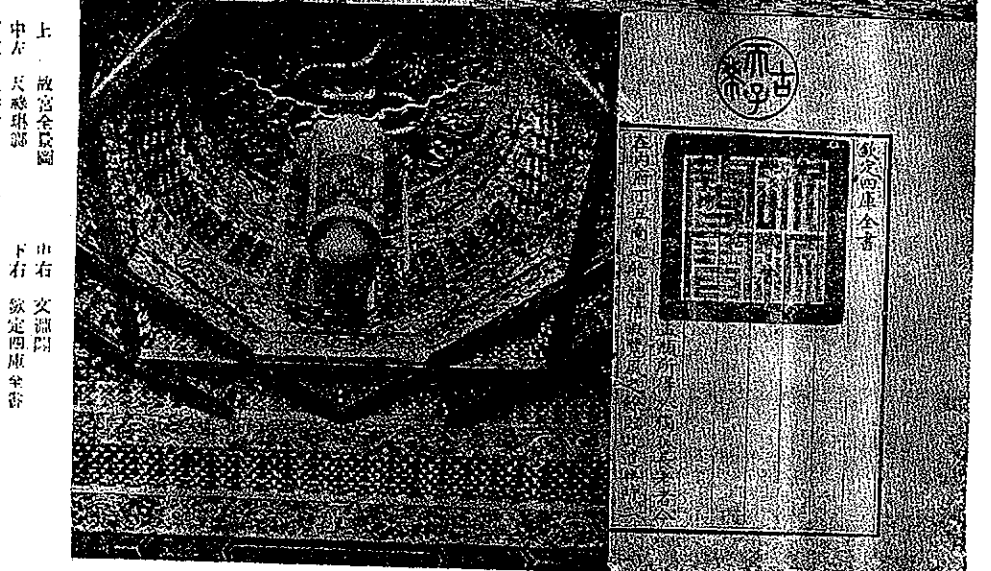
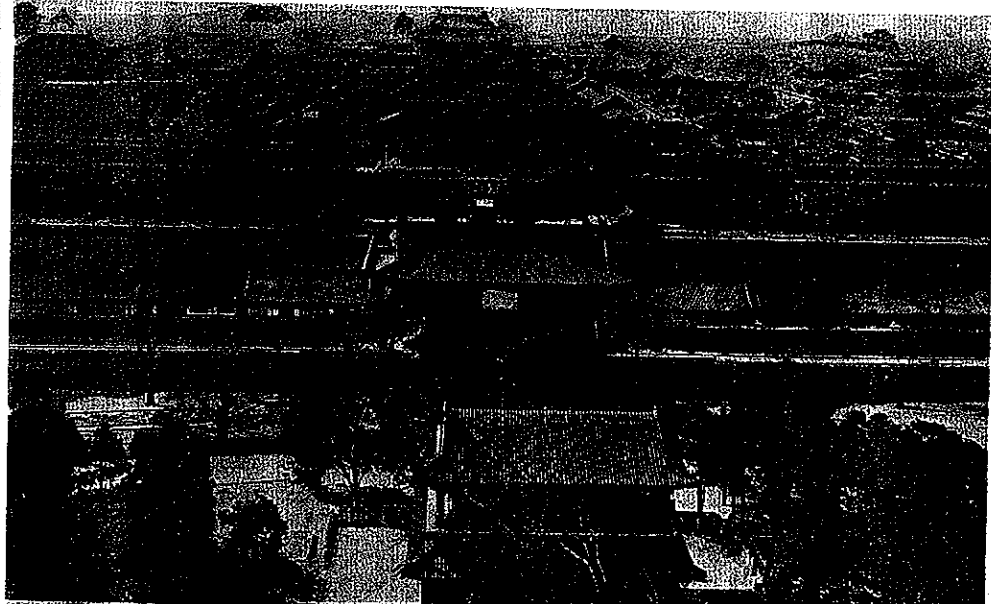
抑も北京に都した諸朝の中で、遠はその發祥の地に近い永州の木葉山に特に祭壇を設けて、特殊な儀式の下に天地を祭祀したのであつたが、金以後の諸朝は何れも漢民族の舊例に倣つて、南郊に壇を設けて郊祀を行つて來たのであつた。この邊に代つて北京に都した金が始めて南郊の壇を設けたのは、海陵王の貞元元年（皇紀一八一三年）の遷都後間も無い時の様であるが、當時の郊壇は拜郊台・拜天台・郊天台・郊台等の名を以て稱せられ、中郊大興府城の興宣門外に在つたと謂はれる所から考へると、今の壇台の東方に設けられて居たもの、據で、實はこの壇台の地名も之に基いて起つたものとさへ傳へられて居るけれども、其の遺址は今の所確然たるものが見られない様である。

其の後、元が燕に都して大都の築城を完成した後に、世祖の至元十二年（皇紀一九三五年）十二月、麗正門の東南七里の地を相して祭台を造り、皇天上帝と皇地祇との神位を設けたことが元史に見えて居るが、その後至元三十一年に成宗が即位すると、壇を其所に造つて定制とし、爾後に依つて南郊の祭祀を行つて來たのであつたが、正式に壇が築かれたのは、其の後約十年を經た大德九年（皇紀一九六五年）七月であつた様である。こ

の元の南郊の壇址に關して、欽定日下舊聞收の如きは之を永定門外にある據に關つて居るが、私は元史の「麗正門東南七里云々」の字句や、また明史の中にある舊丘の記録等から推して、其の舊址を現在の天壇々城内外と斷定するものである。

元に代つた明は最初南京に都した關係上南郊の團丘を鍾山の巔に設けて居たが、後に壇上に屋を建て、之を大祀殿と稱し此所に天地を合祀することにした、然るに、成祖の即位によつて北京遷都の議が決すると、南京の制を模して大に都城の造營を始めたのであつたが、元の郊壇の舊址に依つて南郊を營んだのも亦當時のことと、大體斯ふした遷都は永樂九年帝都造營の詔勅に依つて宮殿、城垣、壇廟等の造營に着手せられ、同十八年（皇紀二〇八〇年）に竣工したものの様である。

然しながら當時の南郊祭壇は太祖によつて改められた南京の壇制に據つたもので、其の名も大祀壇或は天地壇と稱して居たもの、據であるが、此の中には天地を祀る大祀殿を中心として其の前庭東西に日月星辰を祀る四壇を設け、更に大祀門外の東西に二十の小壇を設けて、太歳・歷代帝王・山川・神祇・風雲雷雨・五嶽・四海・四價を祀つたのであつた。然るに其の後、世宗の嘉靖九年（皇紀二一九〇年）正月に、給事中の馮晉が南北東西の四郊分祀を上疏した事に始まり、滿朝の群臣之が是非を議する者五百九十六人に及び、遂に分祀に決したのであつたが、故に於て先づ南郊の建廟成り、之と共に大祀門の南に團丘を築いて其の十月に竣工を見たので爾來大祀殿には皇天上帝を祀りて團丘に天を祀ること、し翌年には北郊及び東西郊の諸壇皆成つたのであるが、嘉靖十三年二月には詔して團



上 故宮全景圖
中左 天祿壇部

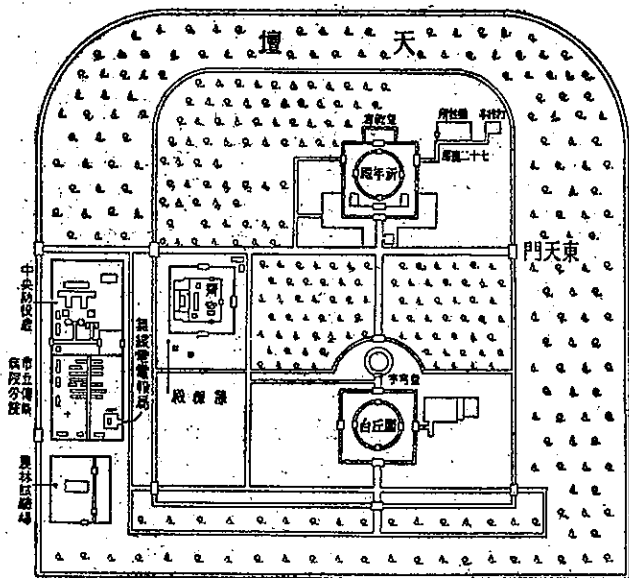
中右 文淵閣
下右 欽定四庫全書

丘・方丘の名を改めて天壇・地壇と稱することとし、其の後十七年には大祀殿を撤し、又園丘の北の奉神殿の名を皇穹宇と改め、更に二十四年には大祀殿の舊址に大享殿を建てたが、これは今の祈年殿の規模と略同じいもので、現在の天壇の制は當時漸く完成したのであつたが、清朝は即ち之を其の儘繼承したのであつた。

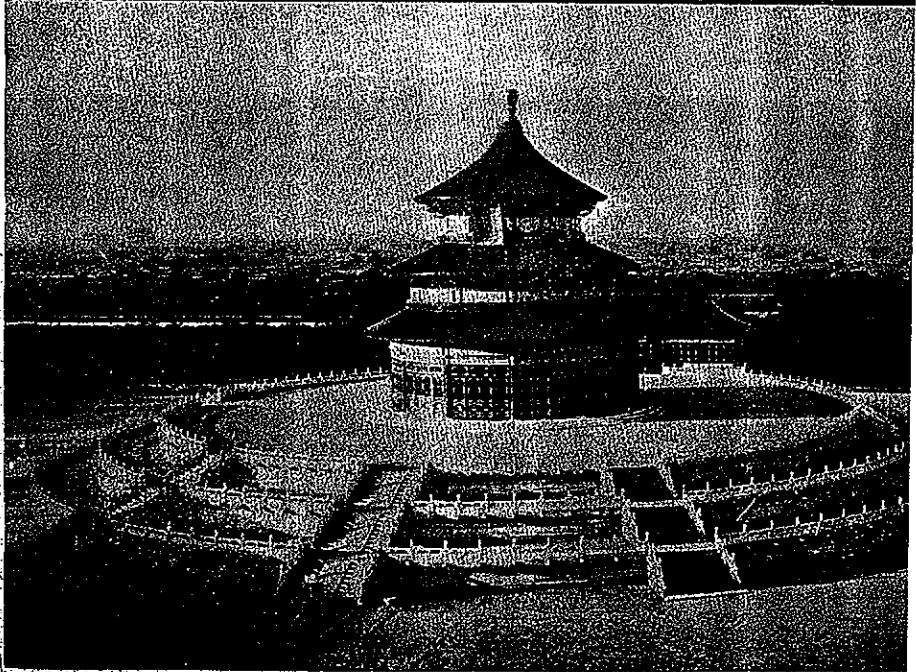
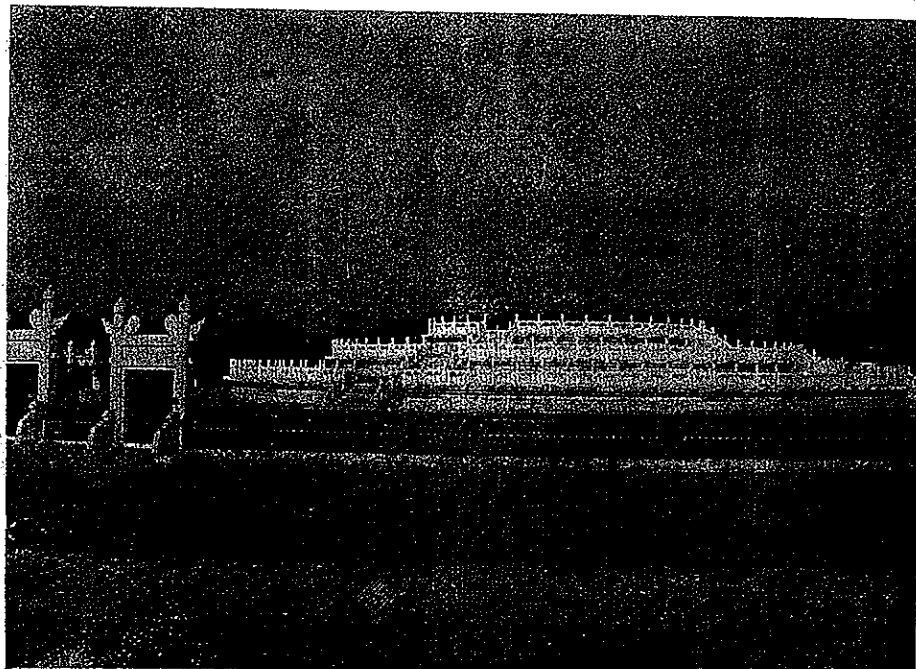
外城永定門内の東に延々と連る外垣は、其の周圍九里十三歩とせられるから算すると六軒五に近く、之に包まれた地域は五十四頃六(約百〇一萬坪)と謂はれるが、實際は八十二萬坪餘の廣さである。大體の設計を視ると、内外の兩垣によつて包まれた一郭の、内垣内に横垣を設けて南北の兩區に分ち、祭祀の主體を爲す園丘と祈穀壇とを各之に配して、其の他の神位奉安所、祭器庫・神庫・神廚・燔柴壚・燎壚・瘞坎・齋宮等の如き、直接祭祀に關係ある建物は之を内垣内に設け、犠牲所・神樂署等の如き間接的に祭祀に關係を有つ建物は之を内垣外に設けて居た。外垣の西側には南北の兩門が開かれて居て、南を園丘門と稱し北を祈穀壇門(正しくは祈穀壇外之西天門)と稱するが、内垣の周圍は約四軒二を算し之に六門が開かれて居る。

北清事變の時各國の聯合軍が北京に入ると天壇は英軍の

手に占領せられ、英兵はこの壇域に長い間宿營を續けて居た爲め、祭器祭具の類が當時盛んに盗み出されたもので、乾隆の銅鼎なども其の時分に掠奪し盡されて、現在残つて居るものは其の後の補鑄に係るものである、斯うした關係



天壇平面圖



天壇園丘上 天壇祈年殿下

から天子祭天の聖域も、爾後一時は外國人の觀賞を默許された形になつて居たが、其の後外交部發給の門照によつて參觀を許される様に改められ、更に民國七年一月から入門料を徴して一般人に觀覽せしめることになつたのである。

現在正門として開かれて居るのは外垣の祈穀壇門で、即ち祈年殿の祭祀に際して天子百官の出入に充てられた所である。之を入ると東に眞直に進む坦道は、約四〇〇米にして内垣の西天門に達し、更に約六〇〇米にして祈年殿の甬路に達するが、もと壇廟の祭祀に用ゐる犠牲を養つた犠牲所や、樂人の居住に充てられた神樂署はこの西天門外の南方にある。明以來天壇の樂人は専ら道士を用ひて居た關係上、もと神樂觀と稱して居たのを、乾隆の初年に樂人の道教を學ぶのを禁止して神樂署の名に改めたのは注意すべき所であらうが、この一帯の建物が林業試験所や中央防疫所・交通部無電台等に利用せられてしまつたのは民國になつてからのことで、西天門の南に設けられた關帝廟の如きも今や漸く荒廢に歸せんとしつゝある。

西天門内の南は齋宮の一郭である。もと祭祀に際して天

丘親祭の時天子は齋宮を出て先づ此の門を入つて南進せられたのであつたが、この門内を東に折れると路は松柏の林の間を通つて皇穹宇の前に達して居る。この一帯は老樹枝を交えて天日を遮蔽し、幽邃の氣自ら身に迫るものがあつて、恰も内地の神社の參道にも似た感があり、北京の城内にもこの神境あるを怪ましむる程である。

圓丘・圓丘は天壇の主體で純白の大理石を無數に積み重ねた三層の大壇は其の壯麗眞に人をして眼を眩らしむるに足るものがあり、圓方の内外兩壇に圍まれて四方に壯麗なる標星門を有し南方を以てその正面として居るが、南門内には東方に綠琉璃の見事な燔柴爐と差坎とを設け、傍に鐵製燎爐八個を連ね、西方にはもと三基の燈檠が立てられて居たのであつた。また門外の東には大仕掛の炕式に造られた具服台があつて、冬天の露祭に際して煖を地面から採る設備が出来て居る。

此所は毎年冬至の早曉に天子親ら皇天上帝を奉祀せられた所で、蓋しこの祭祀こそは天命を承けて四百餘州に君臨する天子の祀典として、最も重要な國家的大祀であつたのである。祭儀は當日の日出前七刻の時刻を以て始められ

子は三日の齋戒に服されたのであつたが、其の中の二日は禁裡の齋宮に於て致齋し、第三日目の早朝壇内に幸して齋宮に入り此所に宿して致齋の上、翌曉親祭を行はれたのである。前後の兩殿より成るこの齋宮は内外の兩垣に包まれて東嚮し、外垣の内外には二重の環池を繞らして東面に正門が開かれて居る。前殿は即ち齋殿で俗に無極殿と稱せられる通り、木材を全く用ひざる建物で殿前左右に齋戒銅人の石亭と時辰牌とがあり、後殿は即ち寢殿に充られて居たが、正門内には鐘樓を設けてある。齋戒銅人と謂ふのは天子の致齋に用ひられた高さ約五〇浬の銅人で、手に齋戒と書した銅札を持つて居たと云ふが、致齋に際しては祭祀關係者は胸に齋戒の小牌を帶び、官署は齋戒の大牌を懸けて、沐浴換衣の後刑名を理めず事を辨せず樂を聴かず、酒色葷蒜を遠ざけ一切の不潔不淨を去りて肅然として齋戒に服するのが制であつた。

天壇を觀るには此所から直ちに東に進んで祈年殿の方に行くよりか、先づ順序として南に折れて先に圓丘を見る方がよい。齋宮の前を南に進むと横垣に一門が開かれて居る。即ち正しくは成貞門西之大門と稱せられるもので、圓

ることになつて居たが、之に先んじて壇北皇穹宇に奉安せられた神位を、此の壇上に奉遷して祭儀の準備を完するのである。即ち上壇の正中位に皇天上帝の神座を南面に設けて神位を奉祀し、其の前方東西の神座に太祖以下八世の祖宗の神位を配祀し、中壇東西の神座には日(大明)・月(夜明)・星辰・風・雲・雨・雷の神位を從祀して各神座は龕を用ひて上を覆ひ、神座前の案上に所定の陳設を行つて時刻を待つたのである。斯の時天子齋宮を出て、南より進み、南門外の具服台に御し漱洗の儀を畢つてこの壇上に上られると、燔柴の儀を行はれるが其の燔烟の昇天によつて神靈の降來を見るとき之を以て迎神の儀とし之に續いて制例の諸儀が行はれて其の度毎に天子は中壇に下り、北面して三跪九叩の拜禮を行はれたのであつたが、天子親ら北面して祭らるゝのは祖宗の祭祀と、天壇とのみに於て見られる所であつた。この祭儀の順序を大別すると上記の迎神に續いて、奠玉帛・進俎・初獻・亞獻・終獻・徹饌・送神・望燎の九節から成つて居て、玉は青瑩を用ひ帛も青色のものを供へ、俎は上壇の正祀と配祀とは饋が用ひられ、中壇の從祀には牛・羊・豕の太牢が用ひられて居た。

この壇に就いて特に注意すべき點は、三層の圓壇に成つて居る事と、壇上の敷石、欄杆、階段等の數が、九乃至は九の倍數を盛んに用ひてある事と、壇の直經や高さや其の周圍の數などにも一・三・五・七・九の陽數(奇數)を用ひてある事や青琉璃の瓦を主なる建物に葺いてある等であるが、特に之を圓壇としたのは天圓地方の古説に則つたもので、又陽數を並べたのは天地を陰陽に配して陽數を天に屬するものと考へたことに依り青琉璃の瓦を用ひたのは天の色に模したものであると云ふのが從來の定説であるが、私は此の中壇に日月星辰風雲雷雨等の如き天體や空間現象の諸神位を配し、天子も亦特に中壇正面に下りて拜禮せられる事等を綜合して見ると、この上壇を以て天上と假想した點は無いかと考へるものである。

この祭祀は既説の通り支那に於ては三代の昔から行はれて居たもので、時に從つて其の祭神や祭法等にも相當な變遷があり、特に天地を合祀した例はかなり多い様であるが、明世宗の嘉靖九年から京師の四方に諸壇を造營して、四郊分祀の制を定めてから後は、昊天上帝を正祀として此所に祭ることになつて居たが、清朝になつてからこの昊天

上帝は皇天上帝に改められ、現在皇穹宇に残つて居る神位にも皇天上帝となつて居る。また民國三年十二月に袁世凱が此所に祀天の禮を行つた時には、配祀從祀は素より正祀の神位さへも之を用ひず、上天の名を以て之を祀つて居るが、この祭儀は當時制定せられた祀天通禮に據つたもので又實に又圓丘最後の祭祀であつた。

壇東の林間に遠く隱見する碧琉璃瓦葺の建物は宰牲亭で、其の近くに設けられて居るのは神庫、祭器庫等であるが、この壇の祭法が露祭であつた關係から、供獻から進俎の諸儀に至るまでの間の供物も全部露天下を持ち運ばれて居たものゝ様である。それから南門内に立つた三基の燈杆は祭祀に方つて燈火を掲げて奉仕の人々に位置方向等を知らしめたもの、燔柴爐の東にある瘞坎は祭祀に先だち毛血を瘞埋して祭地の儀を行つたところ、八基の燎爐は庭燎の目的の外燔柴爐と共に徹饌を爇化して、天子望燎の儀を行ふにも用ひられたものである。

それからこの壇は明初二成の制であつたのを、嘉靖九年に現在の三成の制に改められたものであつたが、乾隆の時に之を擴大して疊むに大理石を以てし、全く面目を一新し

たのであつたが、民國二十四年から二十五年に亘り舊都文物保存委員會の手に、此の壇内の修繕を行つた時に徒らに上面を削り取つて東洋特有の古典味を殺いでしまひ、其の上にも本來壇上に穿たれて居た神燈用の杭孔をも皆塞いでしまつて、舊觀を失ふること甚しかつたことは惜しい次第であつた。

圓丘の大きさを實測して試みに大清會典と比べて見る

上層 直徑約二三米六、九〇尺 高約一米九(五尺七寸)
中層 同 三九米四(一五〇尺) 同 一米六(五尺二寸)
下層 同 五五米二(二二〇尺) 同 一米六(五尺二寸)

となり、括弧内は大清會典所載のものであるが、其の高さに特に周の古尺を用ひて居るのは面白い。

それから壇の四方各層に配せられた石座はもと乾隆の銅鼎を置いた跡であるが、明治三十三年の北清事變に際して英軍が此所を占領して宿營した時に、此等を掠奪して市中に賣り飛ばしたので、其の後代品を新調したけれども前難に懲りて今は他所に格納してある。

皇穹宇・圓丘の北にある皇穹宇は圓丘に祭る神位を奉安

する所である。直徑約七〇米の圓壇に包まれた域内には南側皇穹宇に東西の兩廡が配せられ、清朝時代には圓丘の上壇に祭る皇天上帝と皇祖皇帝八代の神位を此所に奉安し、中壇の東西に祭る日月星辰、風雲雷雨等の神位は之を東西の兩廡に奉安したのであつたが、民國以來清朝の祖宗は之を配祀しなくなつた關係から、其の神位は太廟に移してしまつたとのことで、現在中央に一段高く設けられた神龕の中には、皇天上帝の神位だけが残つて居るのみである。

皇穹宇の陛の前を反聲境と稱する。試みに其所に立つて皇穹宇の方に向つて一聲高く叫ぶと特殊な反響が聞えて來るが、殊に秋の靜かな朝などには次から次にと六七回も響いて來ることがある。これと共に面白いのはこの圍壁に接して聞かれる回音現象で、之は東西に分れて圍壁に向つて話をすると、それが壁傳ひに反射して極めて近くの方から聞えて來るのであるが、兩側から向ひ合つて話したのでは聞き取れない程度の小さい聲でも、斯うすれば立派に聞き取れるのが興味のある所である。

皇穹宇の西の方には特に趣のある老柏が二本ばかりあつ

て、曲りくねつた樹皮の隆起を蟠龍にたとへたものさへあるが、之を見ながら皇穹宇の眞裏の邊に立つて成貞門越しに北方はるかに祈年殿を望む景観は又何とも云へぬ趣がある。この成貞門から北に甬路を進めば、燿次の舊址を右に見て祈年門から祈年殿に達するのであるが、皇穹宇と祈年殿との間は直線距離にしても約五〇〇米を算する。

祈年殿・祈穀壇の上に建てられた直徑約二四米の圓殿此所では毎年正月の上辛(最初の辛の日)に天子親臨して、皇天上帝を祭り五穀の豊穰を祈られた所で、即ち祈年祭の行はれた場所であつたが、この壇を祈穀壇と稱した殿を祈年殿と謂ふのも之に基いたものである。

祭祀に方つては殿内正面の一段高い所に皇天上帝の神座を陳設して其の神位を奉安し、その前方東西に皇祖祖宗八世の神位を配祀したのであつたが、斯うして祭神はかの圓丘と大體に於て同様であつたけれども、其の祭祀の形式や内容には相當な差異を存したことは注意を要する所で、即ち圓丘の祭祀が露祭であつたのに對しては屋內祭であり圓丘に於ては中壇の東西に日月星辰風雲雷雨の從祀があつたのに對しては從祀を設けず、又圓丘の祭祀が全然報本

の建築に係るものであるが、壇上に敷かれた煉瓦を注意して見ると、當時の焼け残りの物を使用して居るのが認められるが、當時新築費としては約三百萬兩を費したと傳へられるが、この巨額を以てして而も明代建築の舊に及ばざることを遠きものがあり、用材さへも之を外産に仰いだとのことで、殿内の大円柱の如きも以前は楠木の一本柱を用ひられて居たと謂はれるのに、現在のものは十數本の木材を繋ぎ合はせて一束となし、之に鐵輪を巻いて上を塗つたものを以て漸く體裁を整へて居る。

殿内の神座を見ると此所の祭法が椅子の上に神位を奉安して、其の前方神案上に各種の供獻をなし、次に犧牲を盛る俎を置いてあることを知られるが、この椅子の上に神位を奉安したことはかの圓丘の祭祀に於ても同様で、四郊の諸壇や太廟等も此の例に據つたものである。それから殿内中央の圓石にはもと完全な天然の龍紋が出て居たのが、失火の後には其の上面を削り取つた爲めに遂に現狀になつてしまつたと謂はれるが、而も今尚ほ其の面には不完全ながら龍紋らしいものを存して居て之が上方遙かに天井の彫龍と上下相對する様に配せられて居る。尚ほ中華民國最初の憲

反始的であつたのに對して、之には百穀の豊穰を祈ると云ふ一の要求的な意味が附隨して居たこと等である。

祈年祭は我が國では「としごひのまつり」と稱し、年の首に際して百穀の豊穰を祈ると共に、聖壽の萬歳を祈り奉り國家の安泰を祈請する祭儀で、古くは神祇官に於て行はれたが、今は二月四日に全國官國幣社に頒給の儀を行はれ、同十七日に官中三殿の祭典に陛下の御親拜があり、又伊勢神宮に勅使を發せられ全國諸社には供進使を向して奉幣の下に大祭を行はせられることになつて居る。

祈穀壇の大きさをみると

上層	直徑約	六八米二	高さ約	一米八二
中層	同	九〇米〇	同	一米八三
下層	同	一二米一	同	一米九一

となり、この壇上に建てられた祈年殿は其の高さ約二七米三(約九〇尺三)を算する。

本來此所には明初に建てられ當時大祀殿と稱した三層の大殿があつて、其の結構壯麗を盡し數十本の楠木圓柱を用ひた大建築であつたと謂ふが、それが光緒十五年(明治二十二年)八月に雷火に焼失したので、現在の建物は其の後

法を天壇憲法と呼ぶのは、民國二年六月に組織せられた憲法起草委員會の手に依つて、この祈年殿で起草された關係から生じた名稱である。

皇乾殿其他・祈年殿後方の皇乾殿は平素此所の神位を格納奉安する所であるが、其の制は皇穹宇と全く異つた方形建築である。また東方遙かの林間に屋根の見えるのは宰牲亭で、其の手前の柏林の間には神庫・神厨・祭器庫等が設けられて居るが、かの王漁洋の詩で有名な天壇の甜水はこの神庫の前にある井戸から湧出して居る。宰牲亭から延々と連亘する長廊は其の長さ七十二間と稱せられ、約三〇〇米にして壇の東門に達して居るが、この邊には老柏枝を交えて茂り合ひ其の大なるものは樹齡五六百年を算すると謂はれる。祈穀壇前方東西の兩廡には東に祭器を納め、西に樂器と祭器とを陳列してあるが、斯うして完備した物は今では孔子廟に於て見られる位なもので、其の間に置かれた冷謙・剛丙の兩像は有名な齋戒銅人の一として珍らしいものである。

祈年門は明代の建築で、其の門外東方には燔柴の大爐と相並んで、八個の鐵燎爐が一行になつて据えられて居る。

燔柴爐の東方に設けられた圓孔は即ち瘞坎で、祭祀に先だち地を祭る儀式を行ふ事圓丘のものと同様であるが、この祭儀には本来狗を埋めて祭つたのを、後世は専ら犧牲の毛血を埋めて行ふことになつて居た。

祈年殿の東方に離れて宰牲亭の南に近く七星石がある。古老の間には隕石と傳へられて居るが、それが細工を施した大理石であることは一見して知らるゝ程度のもので、實数は八個並べられて居て二は北極星を象つたものであると謂はれ、何れも乾隆當時に造られたものゝ様である。傳説としては昔天壇造營の場所撰定に困つて居た時に、一夜北斗が此所に落ちたので、天意は此所に在るものとしてこれに従つて此の地が祭天の靈場に選ばれたものであると云ふが、祈年殿から長廊を東に宰牲亭の前に出で、七星石を觀て西に進み、嚮次の南の甬道下に穿たれた地下道を潜つて出るのも趣のある順路である。

天壇の柏林の間には益母草と龍鬚菜とが生える。益母草は婦人病の特効薬で、昔は天壇神樂署の樂人共が之を採ることを特に許されて居たこともあつたが、其の製品は天橋に近い前門大街の賣薬店で賣られて居て、之は東陵の益母

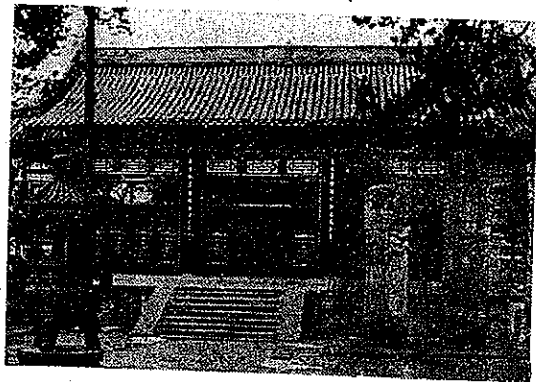
草と其に有名なものであつた。龍鬚菜は即ち支那在來の獨活に似た草で料理に使用せられること周知の通りである。この外特殊な毒草として皇宮西方の柏林中に蠟子草が見られ又齋宮の前方に茂つて居る樹木は民國初年頃から植樹節に國務總理以下の人々の手に植えられたものである。

先農壇(城南公園) 外五區天橋南大街

先農壇は一名を山川壇とも稱し天壇の西にある。壇域内には先農の神を祭つた先農壇の外に雲神・雨師・風伯・雷神を祭つた天神壇、四海、四瀆、五山、五鎮、五嶽を祭つた地祇壇、太歳の神を祭つた太歳殿等があつて、先農壇の東には皇帝親耕の禮を行はれた籍田の舊趾及び觀耕臺があり、神倉も残つて居る。耕籍の禮は毎年二月亥の日を擇んで行はれ、宗廟社稷を祀る供養は此所で作られたのであつた。東方の一郭は慶成宮と稱し即ち先農壇の齋宮として用ひられた所で、其の南の一郭は市民體育場となつて居る。

法源寺 外四區法源寺前街

法源寺は唐の太宗の創建でもと憫忠寺と稱し、太宗高麗



法源寺

親征の際に於ける戦死者の菩提を弔ふ爲めに建立したもので北京有数の名刹である。清の雍正九年(皇紀二三九一年)に「法海眞源」の額を賜り今の名に改めた。寺内に唐碑・遼碑・遼幢等が保存せられて居り、又春季丁香の名所として遊人の杖を引く者が多い。

小屋に移してしまつた。

江南城隍廟 外五區城隍廟街

南横街の東口に近い所にあつて明代の創建と傳へられ東に東嶽廟、西に城隍廟を配してある。此所の城隍夫人は神秘的傳説の所有者で殊に八大胡同の妓女等の間に信仰せられて居る。毎年清明・中元・十月朔の三回に三日宛の開廟がある。東嶽廟の中には十王殿、娘娘殿、斗母寶殿等があつて北京の民間信仰を知るのに極めて面白い廟である。

陶然亭 外五區先農壇西

先農壇の西にある。慈悲庵と云ふ小庵の西郭に清の康熙三十四年(皇紀二三三五年)時の工部郎中江藻と云ふ人が一亭を建て、白樂天の詩句から取つて陶然亭と名づけたので、一名江亭とも稱せられる。市塵を遠ざかつた閑雅な遊亭で古來文人墨客の好んで清遊する所である。境内に遼及び金の石幢があり、又東北に近い丘上に花神廟があつて、其の前に香塚、嬰武塚、郭醉の墓等があり、數年前北京に客死した有名な女俠賽金花の墓も近所に設けられた。附近

名勝舊蹟

謝疊山祠 外四區法源寺後街

宋の忠臣として又かの文章軌範の編者として名高い文節公謝枋得(疊山)の祠で、公の衣冠束帶の像があり、又その憤死した所と傳へられる小堂もあつて齋馨堂の額が懸つて居たが、近來建物を回教女子中學に充用し、祠を東方の

の龍泉寺は孤兒院を以て名高く、其の西の松柏菴は北京の梨園と古い關係を有する所であるが、かの日魯戰爭當時特別任務班に加はり壯烈な最後を遂げた沖積介氏が一時文明學校と稱する日本語教授機關を開いたのも此所であつた。

蟠桃宮 外三區東便門内

東便門内にある有名な娘々廟で太平宮と稱し明代の創建に係ると云ふ。西王母を主として數位の娘々を供し毎年陰曆三月一日より五日間の開廟があり、市民の參詣するものが多く雜踏を極める。此の廟は西王母中心の祭神であるが其の内容は他の娘々廟と大體に於て同様である。

萬柳堂址 外五區廣渠門内

廣渠門内拈花寺の傍にある。清の康熙初年馮益都が別業を此所に營み、柳萬株を植ゑて元の廉希憲の故事にならひ萬柳堂と稱した所で、當時名流遊宴の地であつた。今残つて居る元萬柳堂の額は阮文達の筆になるものである。因に元の萬柳堂は右安門外にあつたことが傳へられて居る。

藥王廟

北京に藥王廟の大なるものが四個所ある。即ち地安門外の南北兩藥王廟、東直門内にあるもの及び崇文門外清化寺街にあるものがこれである。崇文門外のは明時代に武清侯誠銘の創建に係るもので、宏大な戲樓を有して居る。廟の西に天慶寺と云ふ古刹があり、寺との間の空地に土耳古風呂の址があつて元代のものとして傳へられて居るが、武英殿の浴徳堂と共に珍らしいものである。

清真寺

俗に禮拜寺と稱し回教の寺院で北京に約四十個所あると云ふが、代表的なものとしては牛街の西寺と教子胡同の東寺とが大きくもあり古い歴史を有して居る。教徒の敬虔なる禮拜振りや、建築に用ひられたアラビヤ系のデザインや、全く偶像を用ひず西の正面に當るミハラブに向つて禮拜する點や、齋戒の浴室、觀月の高閣等回教徒特有の風俗習慣等を知るためにも一覽すべき所である。因に北京の回教徒は約十二萬と算せられるが、牛街附近が其の中心とな

つて居る。



回教徒風俗

廣安門

外城西面の門で彰儀門とも稱せられる。門樓は乾隆年間の重修に成るものゝ様であるが、門洞内に事變後迄も將軍石（閉門の時門扉を受け止める石）の残してあつたのは珍らしくあつた。此の門を出る坦々たる大道は蘆溝橋、長辛店、良郷等を

門扉を遮閉して我が兵力を兩分して射撃を加へて遂に廣安門事件を勃發せしめたが、續いて翌二十七日朝には居留民の避難命令が發せられたのであつた。

崇効寺 外四區陳家胡同

廣安門内の牛街を南に抜けて白紙坊に出ると、印刷局の北に近く崇効寺の古刹がある。むかし唐の時に劉濟なる者が宅を喜捨して建てた寺と傳へられて居るが、現在の建物は明朝嘉靖年間の重修に成るものを後年加修したものと云ふ。昔は境内に靈千株を存したと云ふので靈花寺の名もあるが、今もその後方の街を森林街と稱し靈の老樹が存して居る。

寺の後庭は牡丹の名所として清末以來有名になつて居るが、近來經濟的な關係からか稍寂れた觀があり、殊に中央公園や北海の物が榮えて來た爲めに此所の物が甚しく見劣りのする模様もあるけれども、綠黒兩色の珍花は他に見られぬ稀種であると云ふ。

經て保定に達する所謂廣安門石道であるが、明崇禎十七年（皇紀二三〇四年）三月流賊李自成の軍が、北京を陥れた時には先づ内應の宦官をして此の門を開かしめて城内に亂入したのであつた。昭和十二年七月二十六日夕皇軍の此の城門通過に方り卑劣暴戾なる支那軍は詭計を以て中途より

それから寺の寶物として名を知られて居るものに『青松紅杏圖』がある。傳へらるゝ所によれば明末洪承疇の裨將

として關外松山杏山の間に轉戦した張某が、洪承疇の清に投降した後に僧となつて此所に寓した時、心中の慷慨を綴す爲めにこの一幅を繪いたものと謂ふが、さうした気分は圖端に題せられた七絶の一首にも窺はれる所がある。巻尾に王漁洋・朱竹垞・翁方綱・紀曉嵐等舊時の名流を始めとして、近くは康有爲や梁啓超・樊々山等の題詞もあつて全長數十尺に及ぶ様になつて居る。北清事變の際此の圖巻が一時所在を失したのを後に發見して再び寺有に還つたと云ふが蓋し稀に見る珍巻であらう。

法藏寺の古塔(法塔寺) 外三區法塔寺街

天壇の東牆に近く左安門内玉清觀の東に接した法塔寺街にある。寺は金の大定年(皇紀一八二〇—一八五〇年)間の創建にかゝり、舊名彌陀寺、又は地藏寺と稱したがその院中に立つ法塔に因んで俗に法塔寺とも呼ばれ、塔の名を彌陀塔とも稱せられて居る。

後明の景泰二年(皇紀二一一一年)に太監裴善なる者、之を重修したと云ふが、寺の名を法藏寺と改めたのはこの時のごとで、裴善の名は『帝京景物略』には裴善靜とした

天壇北牆外の一帯には澤山の養魚池が相通つて居て地名も金魚池と稱されて居る。傳へられる所に據ると金の時代に魚藻池又は魚藻坑と云ふ所があつて、池上に瑤池殿が建てられ、曾て章宗皇帝の臨幸する所となつたことが古書に見えて居るが、現在の金魚池は即ち其の魚藻池の舊址であると謂はれて居る。

此の邊の養魚池は大體に明代に開かれたと傳へられるが、昔はこの一帯は悉く官地として保有せられ、養魚業者は緋鯉を飼養して之を宮中に上り膳房の料に供したのであつたが、當時は北京の貴顯官紳の府邸に於ても金魚を飼育する風が頗る盛んで、都人士の庭院中魚缸を設けざるは無かつたと謂はれ、何れも此所から産せられる金魚を以て需要を充たして居たのである。

民國以來此等の養魚池は何れも民有に歸し由緒ある緋鯉は跡を斷つてしまひ、全く金魚の養殖場となつて、知樂、永順、全海の三魚莊が其の經營に當つて居るが、知樂魚莊の如きは百數十年の歴史を有すると謂はれて居る。

ものもあるが、現在塔前に残つて居る明碑もこの當時のものといはれ、もと此所には國子監祭酒胡濙と同寺の戒壇第一代の戒師道孚との碑があつたと傳へられて居る。乾隆の頃にはこの寺は既に廢滅して古塔のみ園圃の中に立つて居たものゝ様であるが、而もその塔も相當荒廢して居たことが『日下舊聞攷』に記されてゐる所から考へると、その後重修を加へられたものであらう。

塔は八面七重で高さ十餘丈と稱せられるが、その各層に窓を開き内部に登攀の便を存して居る。由來北支那は風が強い爲めに斯うした窓の開かれた塔が少いのであるが、城内に於て登攀路を有する塔はこれだけで、昔は九月九日登高の日に都城の老幼此所に登つたとのことである。

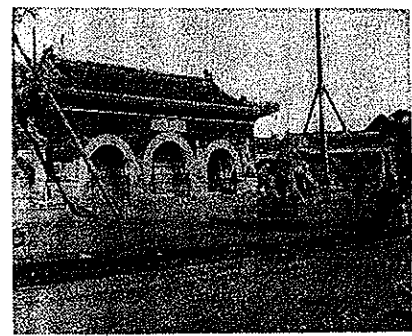
なほこの塔が東の方から歩いて此所に安定の地を見出して固着したと云ふ傳説は、支那の諸塔によく聞かれる靈塔移動の一例であらうが、多くの塔が西から東に移動して海に入るのを例とする中にこの塔だけが東から西に來て居ると云ふのは特例の様である。

金魚池 外五區天壇北

〔東郊の部〕

東嶽廟

現在大多數の支那人の心理を支配しつゝある信仰は道教であるが、この道教の南北兩派の北支那に於ける大道場として、北京城西、西便門外に白雲觀があり、東、朝陽門外に東嶽廟がある。



東嶽廟は支那五嶽の一なる東嶽泰山の神を祀る所であるが、この廟は江西省龍虎山を大本山とする張天師直系の正一派道教の華北第一の大靈場である。泰山が人の生死を司ることは支那人の間には古くから信ぜられて居る所で、この信仰は日本にも渡來して佛説と混じた泰山府君となつて残つて居る。

廟の開基は元の延祐年間（皇紀一九七五年頃）と稱せられ、其の後明の正統・萬曆年間を始め数回の重修を経て居るが、清代に於ても康熙三十九年（皇紀二三三一年）と乾隆二十六年（皇紀二四二二年）とに重修が行はれて居て、この康熙の重修に就ては王士禛の『香祖筆記』に、康熙庚辰（二十九年）の三月にこの廟の焼けた事が書かれて居る所から考へると、その重修は實は再建の程度のものであつたかと思はれる。

正殿の岱宗寶殿に安置せられた東嶽仁聖大帝とその侍臣の大像は、元史の工藝列傳によると當時の名工昭文館學士藝元の作と傳へられ、仁聖大帝の像は懿々然として帝王の度ありと稱せられるもので、また侍臣の像は憂深思遠の貌を現はして居るが、之は元がある日唐の魏徵の畫像を見て大に喜び、遽かに廟中に赴いてその製作を始め即日之を完成したものと謂はれて居る。尙ほこの像の作者を劉鬪又は劉鑿としたものもあるけれども此等は藝元と同一人であらうと謂ふ。

正殿の後方は即ち寢宮で東嶽大帝とその夫人との像を東西に安置し、その前に内官及び宮女を配してあるが、其の

作に於て前者と甚しい差が見られて、假令前記正殿の諸像が後代の物であるとしても相當な名工の手に成つたものであることを首肯せしめられる。

寢宮の後方には關帝殿・娘々殿・文昌殿・喜神殿・玉皇閣・大仙堂等があるが、正殿前の兩廊は所謂七十二司（實は七十六司を數へる）で、宇宙一切の事を司る神々と稱せられ、明の正統年間（皇紀二二〇〇年頃）に創めて此所に設けられたもので、その中間には東方に東財神殿を西方に廣嗣神殿を配して、財神と娘々とを祭つてある。又兩廊の間の御碑亭後方には無慮一百餘基の碑が林立して居るが、その中には有名な趙子昂の筆に成る張天師神道碑もあり、また鐵碑一座をも存して居るのは珍らしい所である。

廟の西院には東嶽寶殿・玉皇殿・延壽寶殿・火祖殿・眼光寶殿・魯祖殿・藥王殿・關帝殿等が相接して居り、東院は伏魔大帝殿・娘々殿の後方に方丈が設けられて居るが、廟貌を考へると西院が古いかの觀がある。

尙ほ本廟の道士は正一派に屬するもので妻帯肉食を許され護符祈禱が盛んで民衆的な點が多いが、斯うした所は北方道教と非常に異なる點である。

九天宮及び十八地獄

此等は寧ろ東嶽廟に附屬する性質のものである。即ち東嶽廟東の路北に九天宮があり殿内の塑像は北京にある此の種のものの中の尤なるものである。また路南の慈尊護國廟の中に十八地獄があつて陰慘なる諸地獄の實相が巧みに作られて居るが此等の内容は道佛兩教の混合的信仰に因るもの様である。

日壇及び金盞夕照

日本射撃場の西に日壇がある。毎年春分の朝天子が太明を祀られた所で明の嘉靖九年（皇紀二一九〇年）の創建である附近の黒松林は市塵を離れた所で以前は都人清遊の場所であつた。又射撃場の東に北京八景の一なる金盞夕照の址がある。燕の昭王の黄金盞の故事にならひ後人が臺を築いて金盞と稱した所で乾隆御筆の碑がある。

二 關

東便門外約二軒の通惠河中に慶豐閣がある。北京から第二の間に當るので俗に二關と呼ばれる。前朝時代から都人

遊覽の場所中で元の燈籠流しは最も有名のものであつた。近來非常に寂れたけれど尙ほ市塵を避けて一日の清遊を試みるに足る。

邦人の間に紅葉寺と稱せられてゐる康熙帝公主の陵も程遠からぬ所にあり、北京の都市計畫ではこの附近が工場地帯となつて居る關係上、近時市營屠宰場を始め多くの工場が設けられつゝある。

日本陸軍墓地

朝陽門の東約二軒、射撃場から通州街道を隔てた北にある。北清事變の際第五師團の繙帯所が東嶽廟に設けられて朝陽東直兩門の攻鑿戦に於ける戦死者を此所に集めて葬つたのに端を發し、爾來我軍の戦病死者の墓地に充てられ、事變平定後陸軍墓地に定められた。北京に於ける我が同胞今日の發展の基は實に此所に眠れる英靈の賜であることを忘れてはならぬ。北京日本居留民團はその一部を借りて在留邦人の墓地に充て、又火葬場も此所に設けられて居る。

架松（肅王塚）

廣瀨門外東南約二料の地にある。清初興國の元勳武肅親王豪格一家の墓地で其の祠堂もある。城内に澤山の老松が茂り合つて風致を添へて居るが、殊に數株の臥龍松は珍らしいもので、此等を木架を以て支へてあるので架松の名が生じたものである。近來不良の輩が荒した爲め甚しく荒廢を見せて居るのは誠に惜しいことである。

通州及其の附近

通州は北京の東方約十五料に位する古城市である。白河の別稱潞河の名に因んで、前漢に潞縣、後漢に潞縣と稱せられた所で、通州の名は金の天德三年(皇紀一八一一年)に始まり、揚子江口の南通州に對して俗に北通州とも呼ばれて居た。

元來南方から運河や海路による漕運が、天津から白河を溯つて北京に來るのに必經の要津たるのみならず、京津間陸路の要衝として古くから榮えた所であつた。即ち城東の北運河と城西の通惠河とは此所に於て相通するのみならず、京津の大道は城内を通過して西より南に抜けて居る關係上橋林鼓歌の間を車馬絡驛として相通り、店肆客棧軒を並べ

て繁榮を極めたものであつたが、清末鐵道の開通と共に其の重要性を失し、後には單に一地方縣衙の所在地たるに過ぎざるに至つた。昭和八年五月皇軍の熱河平定に引續き殘敵を掃蕩して北京に迫るや、其の先鋒は此の地を占領したのであつたが、塘沽協定の成立によつて戦區に編入せられ爾來邦人の來住する者點々としてあつたが、昭和十年秋、華北民衆の自治要望により、殷汝耕氏が起つて戦區二十二縣の自治を宣言し、十一月二十五日冀東防共自治政府を此所に設くるに及び、冀東地區行政の中心となり、守備隊・特務機關・警察署等も新設せられて、邦人の來住者も急に増加を加へたのであつたが、昭和十二年七月二十九日未明に勃發した通州事變に、城内は忽ち阿鼻叫喚の巷と化し、留邦人の過半数は保安隊匪の兇手に斃れ、家財は賊手に掠奪蹂躪せられて滿街擧げて死の町と化したけれどもその後、邦人の努力は異常の困難を征服して明期通州の再建に進められ、昭和十六年春國民學校も新築せられた。冀東政府は事變後唐山に移り、池宗墨氏が長官代理となり引續き冀東の政權を掌握して居たが、中華民國臨時政府の誕生により昭和十三年二月一日を以て同政府に合流した

のであつた。

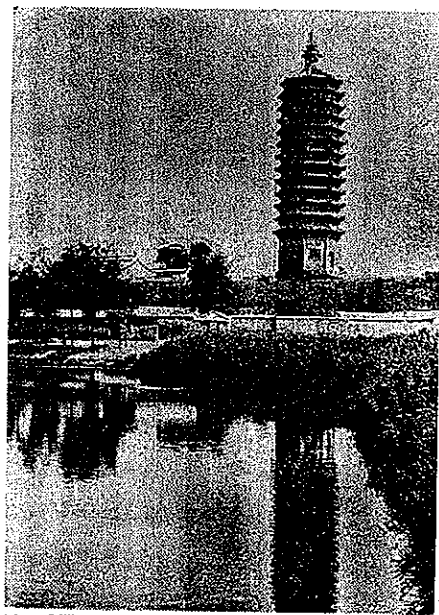
通州事變當時の慘劇を物語るものには守備隊、特務機關及び南門附近の皇軍奮戰の跡、全署員を擧げて壯烈に殉職した領事館警察署舊址、宿泊者全部と共に従業員が犠牲となつた近水樓や北門内東南の養魚池畔に邦人虐殺の地址等がある。

通州城・現在の通州城はもと舊城と新城とに分れて居た舊城は東方の一郭で明の洪武元年(皇紀二〇二八年)大將軍徐達及び常遇春等の築城に係り、周圍九支里十三步、高さ三丈五尺と稱せられ四門を有した。又新城は明の正徳十四年(皇紀二一七九年)に舊城の西に接して築かれたもので、周圍七支里、西南の兩面に門を設けたのであつたが、其の後再三重修を加へられ、清の乾隆三十年(皇紀二四二五年)舊城の西面を拆去して新城に連ね今の形になつたもので、此の周圍二千七百七丈五尺(八六六四米)と稱せられ東、西、北の三面に各一門と南面に二門計五門を有して居る。

燃燈佛舍利寶塔・城の北隅佑勝教寺の境内にある。後周(皇紀二二一七年—二二四一年)の創建で、唐の貞觀七年(皇紀二一九三年)尉遲敬徳が重修し、其の後元明兩朝にも修

繕を加へられたと云ふが南面にある明の萬曆三十八年工部郎中陸基恕の碑には唐貞觀七年癸巳建とあるけれども塔の建築様式から見ると遼代のものと考へられる。清に入つて康熙九年に重修したけれども、同十八年(皇紀二三三九年)の大地震に破損したのを更に同三十年から三十五年にかけて重修したもので、高さ二百八十尺と稱せられ、十三級の巍然たる大塔影と、之に絡まる神秘なる傳説とは、古來通州人の誇りとして語り傳へて居る所である。

燃燈佛舍利寶塔



文廟(孔子廟)・燃燈佛塔の南側にある。もと州學に附屬して祀られたものであつたが、康熙十八年の大地震に倒れたので同十九年に重建し、爾來再々重修が加へられ、近くは冀東政府時代にも修理を施して居る。冀東防共自治政府は昭和十二年八月唐山に移轉する迄此の廟内に設けられて居た。

鼓樓・東、南、北三門に通ずる大街を結ぶ十字街の北にある。康熙十八年の大地震に倒壊したので其の後、同四十四年に重建せられて居る。

かの通州事變の際邦人の多數が銃殺された養魚池は俗に東海と稱し北門内の東南に在つて此所から近い所である。

殉難邦人の墓・新南門内の廣場にある。昭和十二年七月二十九日午前三時頃から始まつた彼の通州事變に、この異域に恨を呑んで鬼畜の如き冀東保安隊の毒手に斃れた我が同胞二百二十餘名の墓地で慰靈塔は昭和十五年七月に完成したものである。

八里橋・明の正統十一年(皇紀二二〇六年)の勅建で、當時名を永道橋と賜ひ通惠河に跨つた大理石の橋梁で幅五丈長さ二十丈と稱せられ、西門外約八支里の所にあるので八

里橋と呼ばれて居る。明清兩朝に亘り屢々重修が施されて居るが、清文宗の咸豐十年(皇紀一五二〇年)九月二十一日、清將僧格林沁は英佛聯合軍の北京侵入を防がんとし此所に陣し、其の精銳を擧げて決戦したが英佛軍の猛撃に惨敗し翌朝皇帝の熱河蒙塵となり、次で圓明園離宮の大掠奪と燒毀とが行はれたのであつたが、當時の佛軍司令官モンローバン中將は其の後戰功に依り貴族に列せられた時、八里橋伯と稱したといふ。

通惠河・裏漕河、大通河又は裏河等と稱し、通州北京間を通れる運河である、元の至元二十九年(皇紀一九五二年)都水監郭守敬の開鑿する所と傳へられるが、金の世宗の初め(皇紀一八二二年頃)には既に兩地を連絡する運河があつた様である。清末鐵道の開通する迄は南方の米は専らこの運河によつて、通州より北京に運ばれて居たのであつた。

双橋・西門外十二支里を隔てた通惠河の南にある小村で明の文徵仲の詩にある「立馬双橋日欲斜」の句で有名である。大正七年我が三井物産と支那海軍部との間に、五百四十萬圓の借款で無電設置の契約が成立し、翌年工事を初めて大正十二年八月に竣工し試験通信に好結果を得たのであ

つたが、日米支の間に錯雜なる問題が発生し、昭和七年十月日本側管理人の引揚以來長い間放置されて居たのであつたが、事變後我が方に利用せられる様になつた。

〔西郊の部〕

西山の概況

北京の西にある翠黛の連峰は西山と總稱せられる太行山脈の一支脈である。主なる山は萬壽山、玉泉山、望見山、紅山、荷葉山、香山、翠微山、廣師山、平坡山、石景山、妙峰山、潭柘山、馬鞍山等で、妙峰山の標高一三三〇米を最高とする。

附近は隋唐時代から佛寺の造營せらるゝもの多く「西山三百寺」「西山五百寺」等の稱さへもある位であるが、永定河以東の地域に現存するものでも二百以上に達する様である。又永定河の沿岸には石炭の産が多く従前北京城内多季の採炭用に充てられたのは實に「西山の煤炭」であつた。特殊な動植物の産とも無いが白皮松(註)はこの山で盛んに見受けらるゝ珍木である。なほ玉泉山、萬壽山を始め水の

湧出多く、之が北京に曳かれて積水潭、三海等となつて居るので、今の北京城の發生は實に西山の水の賜と考へらるる點がある。

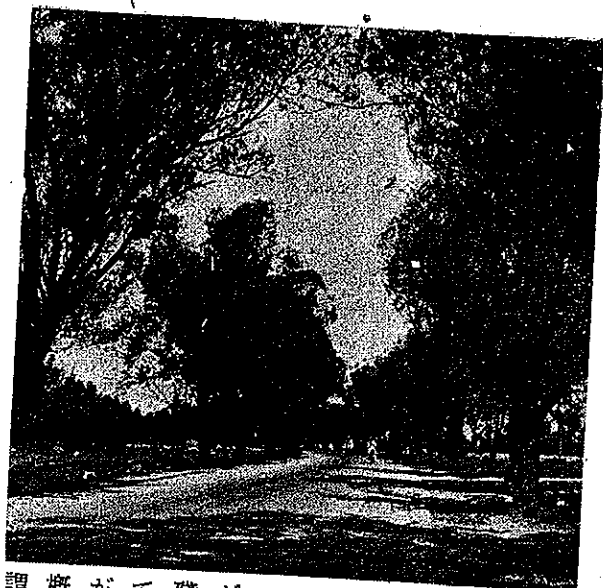
(註) 白皮松は白骨松、白松、白虎松等と稱せられ從來栢の字を充て、居る。學名は *Pinus Bungeana* といひ三葉松で西紀一九二四年獨乙人 *Bungeana* 氏に依つて學界に報告せられ、太行山脈地帯を主なる分布地域とするものである。發芽後五十年位にして樹皮より蠟質の分泌物を出して樹幹白色となる。樹質の脆い關係上材木としての用途は無いが觀賞用として珍取せられる。玉泉山にあるものは樹齡一千年と稱せられ乾隆帝御製の「古栢行」の詩が樹側の壁に刻してある。

萬壽山

一世の女傑として清朝三百年の末路を華やかに彩つた西太后の崩後既に三十年、今北京西直門外十二軒を隔てた西郊萬壽山に残る頤和園の大離宮こそは、實にこの女丈夫が社稷の興亡を他所にして、其の晩年を豪奢と享樂との間に過した遺址である。

萬壽山も昆明湖も乾隆帝の時に人工で造り上げられたものとして、眞しやかに説く人もあるけれども、萬壽山は颯山の名を以て、また昆明湖は太泊湖・西湖・西海等の名の

下に元時代から知られて居る。この山が本来北方の金山から延びて居る紅石山に連つて居た小山であることは、玉泉山の上から見ても想像出来る所であるが、要するにこの成因に就ては太古北京平野の大陥没があつた時に、玉泉山や八寶山などと共に取り残された大山塊と見るべきものであろう。
 萬壽山街道の並木



萬壽山の名に就ては明末頃の諸書にも其の縁起が書き残されて居るが其の概要を謂ふと

昔此所に居た老人が山麓に石壁の墮つて居るのを見つけて之を掘り出したが、其の壁には虫の模様や龍の彫刻が施されて居て、中には潭山の品物……寶物であつたらう……が容れてあつた。老人は之を悉く取り出して、その邊に「石壁徳。皇帝里」と豫言めいた字句を書き残し、之を出籠に乗せて何れへか逃げ去つたが、その後明の嘉靖初年に其の石壁が忽然として行方を見失ふと、果してその頃から北京にも致知の光が現はれて来た。云々

と云ふのであるが、これに據るとその石壁は今から約四百年ばかり前迄は、この山の西麓に存して居たものゝ様である。

之より先き今を距る四百五十年ばかり前に當る明の弘治七年(皇紀二二五四年)に、助聖夫人羅氏と云ふ人の手によつて、この山腹に圓靜寺と云ふ寺が創建せられたのであるが、その後更に山前に仁慈菴と稱する寺も出来たものの様で、明末の詩人達の中にはこの兩寺の風光を詠題に上せて居るものが多いが、明清の交には圓靜寺は既に香火絶えて荒廢に歸して居たものゝ様である。

然るに清朝になつてから高宗乾隆帝は、即位の十四年に工部右侍郎の三和に命じ、其の結構布置を江南の名勝に取り、この山と水とを利用して離宮を造營せしめて、之を好

山園と名づけられたのであつたが、次で清漪園と改め、更に乾隆十六年は恰も帝の生母孝聖皇太后の六十の萬壽に當る所から、同十五年に工を起して圓靜寺の舊址に大報恩延壽寺を建立し、山の名を改めて萬壽山とし、西湖を開濬して玉泉山の水を引き昆明湖の名を賜ふたのであつた。この山の名萬壽は皇太后六旬の萬壽に因んだものであること勿論であるが、昆明湖の名はむかし西漢孝武帝の元狩三年(皇紀五四一年)に、南溟昆明の夷を征伐せんとして、水軍訓練の爲め雲南の昆明池に象つて、長安の西南三十里の地に昆明池を造らしめた故事に基くもので、當時はこの湖内に小戦船を浮べて閩廣巡洋の制に模し、湖西香山健銳營の八旗中から選抜した軍兵を此所に集めて主力とし、水戦を練習せしめたのであつた。

この大報恩延壽寺は實は一大喇嘛廟で、今の排雲門内の一部に造營せられて居たのであつたが、當時の其の規模を考へると、清漪園冊の中に。

慈福樓の西を大報恩延壽寺と爲す、前を天王殿となし、鐘鼓樓となし、内を大雄寶殿となし、後を多寶殿となし、佛香閣となし、又後を智惠海となす、大報恩延壽寺の西を羅漢堂と爲す、田字式にして後を寶雲閣となす

云々

とあつて、この慈福樓は今の萬壽山昆明湖の大碑下に在つて、大自在の額を掲げてあつたと謂ふから觀音大士を供した所であらう。そして大報恩延壽寺の山門は即ち今の排雲門で、當時は乾隆帝の御筆に成る大報恩延壽寺の額が掲げられて居たと云ふ。この門内の東西には鐘樓と鼓樓とが相對して居り、池を渡つて石階を登つた所には天王殿があつて、その後方に一段高く大雄寶殿が建てられて居たのであつたが、これが即ち現在の排雲殿の場所である。又其の後方には多寶殿が今の德輝殿の位置に建ち、其の上の基壇上には佛香閣九層の高塔が巍然と聳えて居て、最後に衆香界の琉璃牌樓を前にして、智惠海の佛樓が建てられて居たと云ふ。それから現在排雲門内にある清華軒の一郭は即ちもとの羅漢堂の舊址で、今軒後に保有せられて居る羅漢堂記に據ると、もと此所にあつた五百羅漢は浙江錢塘の雲林寺や、杭州の淨慈寺のものを模したものと云ふから、現在碧雲寺にある五百羅漢……杭州淨慈寺のものを模したと云はれる……と相似たもので其の排列の方法も田字式に依つて居たものである。

この大報恩延壽寺の創建に續いて山前、山後から湖畔にかけて、大小各個の建物が營まれたのであつたが、當時は大體に於てこの大報恩延壽寺を中心とする山前の大喇嘛廟と、須彌靈境を中心とする山後の大喇嘛廟とが前後の核心となつて居たもの、據で、即ち萬壽山清漪園は斯うした前後の兩大喇嘛廟を中心とする大離宮として造營せられ、殊に乾隆五十七年の大重修が行はれた後は更に面目を一新して金頂の高閣湖面に映じ、朱欄の廻廊櫺間に見て輪換の美を極め、東方近くには圓明・長春・萬春・暢春等の諸園四離宮が眼下に相連り、西方には玉泉山靜明園と香山靜宜園の兩離宮を一眸の裡に收める景勝の地として、天子萬機の餘暇を好んで駐蹕せられたのであつたが、今より約八十年前、咸豐十年（皇紀二五二〇年）十月、北京に侵入した英佛聯合軍の毒手は、此等の諸離宮を擧げて一炬灰燼に附するの暴狀を演じたのであつた。

即ち十月六日の圓明・長春・萬春三園の掠奪燒毀に引續き、翌七日には英兵約二百名が此所に闖入して掠劫を恣にした上彼等の手に放たれた一閃の炬火に、さしもの名園も忽ち烏有に歸したのであつたが、之は實に我が萬延元年櫻

田門の變の年に該り、西太后二十有六歳の秋で、當時幸にして其の業火を免れたものは衆香界の琉璃牌樓と、萬壽山昆明湖の大碑と寶雲閣の銅亭くらゐなものであつたが、斯うした諸離宮燒棄の噂は我が琉球を経て内地にも傳つて、其の結果はかの外國船打拂令の實行にも相當な影響を招來して居る様である。

かくて爾來三十年間此の園内は只瓦石累々として狐狸その間に跳梁し、荊棘徒らに古道に茂つて夕陽空しく焦土を照す大廢墟になつて居たのを、光緒十四年に西太后は海軍擴張費三千萬兩を投じて重修の工を興し、乾隆の舊址に據つて之を復舊し、名を頤和園と改めて夏季駐蹕の離宮に充てられたのであつたが、この重修に當つては清漪園當時の殘礎は努めて之を利用せられた關係上、現在の建物はその結構規模こそ乾隆の舊に比して劣つて居り、また中には其の名を改められたものもあるけれども、其の布置は大體に於て昔の儘であると謂はれて居る。

然るにその後光緒二十六年（明治三十三年）に勃發した北清事變に際して、此所は露・英・伊の諸軍に占領せられ、此等洋兵の駐留年餘に及んだ爲め、又々その狼藉掠奪を蒙

り、荒廢甚しきものがあつたので、光緒二十九年に更に大修繕を加へ、爾來西太后は一年の殆んど三分の二を此所に過されたのであつたが、當時太后の駐蹕中に於ては太后日々の御用に充てる爲めに、北京から毎日一萬兩の銀が此所に送られて居たと云ふ。

斯くて太后の崩後間もなく中華民國の出現を見た時に、最初宣統皇帝の退位に際しては、皇帝は退位後此所に移れる取極になつて居つたけれども遂に其の事無く、民國三年からは入場料を徴して之を開放したのであつたが、その後も此所には清室の管理官が派せられて居り、また此所だけはかの故宮と共に民國十三年末の宣統皇帝出宮當時までは、宣統の正朔が奉じられて居たのであつた。

山と水とを巧みに按排した園内の面積は大體に於て

陸面 約六、五〇〇アール 約一九六、〇〇〇坪

水面 約三二、〇〇〇アール 約六六七、〇〇〇坪

計 約二八、〇〇〇アール 約八六三、〇〇〇坪

となると謂はれるが、此等の周圍を見ると

昆明湖西堤以東 約七軒

同 全 面 約八軒

銀齋園全 圖 約九軒

の數字となる様である。

仁壽殿・現在正門として出入して居るのは東宮門で、門の内外には兩側に朝房が連つて居る。此所を入つた正面の仁壽殿は乾隆勤政殿の舊址に建てられたもので、光緒皇帝の西太后を奉じて政務を視られ内外使臣の謁見等にも用ひられた所であるが、正中の寶座は即ち西太后の用ひられたもので、皇帝皇后の寶座は其の兩側に遠く離れて極めて素に設けられて居て、孝道至上主義の片鱗は斯うした所にも見受けられるのである。寶座の上に掲げられた「壽協仁符」の大額は西太后晩年の御筆であると謂ふが、この面に押捺せられた寶璽は「慈禧皇太后御筆之寶」を中にして、左の方が「和平仁厚與天地同意」の九字、右の方が「數點梅花天地心」の七字で、之には大中小の三種があり、西太后の晩年に好んで用ひられたもの、據で、この園内に於ては勿論、故宮に於ても各所に斯の寶璽は見受けられる所である。寶座の前方左右に設けられた陳設は香爐と燭台が多く、其の前の銅紅は苗族特有の文化として知られる銅鼓を覆へした形の珍らしいものである。